

777-58



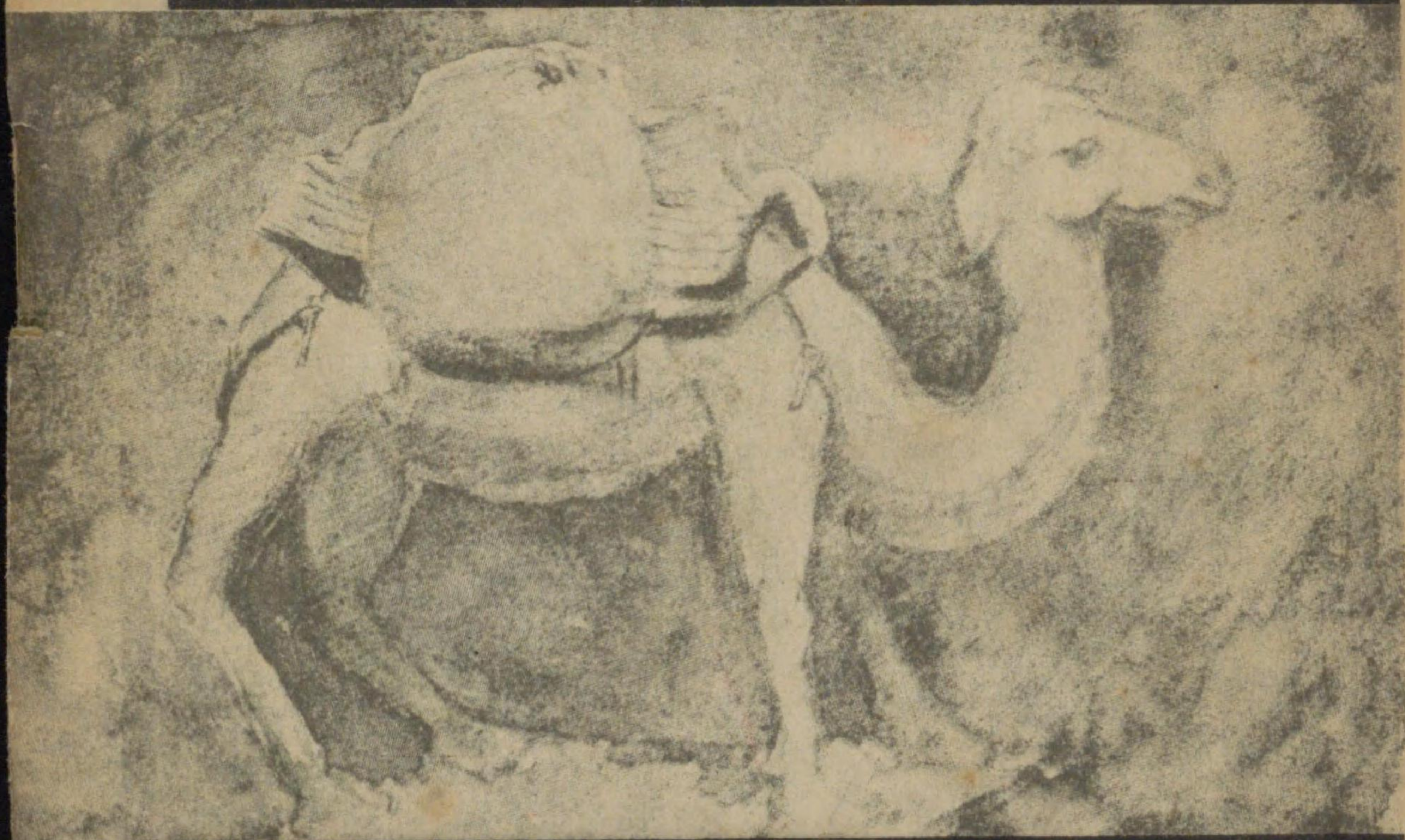
1200501601394

777

58

支那哺乳動物誌

阿部余四男著



✓
250

支那の政治

阿部 泰吉 著



日本書院

✓
028

支那哺乳動物誌

阿部余田男著



目 録 書 店 刊



1777
58

序 言

昭和十二年の支那事變の勃發は、我が國民をして眞に國民的意識を覺醒せしめたるが、更に舊臘に於ける大東亞戰爭の勃發によつて一層この意識は強められた。茲に支那事變以來、又大東亞戰爭始つて以後、我が國に於て支那に關し、東亞に關する著述が急激に増加したことは、全くこの事態に副ふものであると共に、よく事變下邦人の知識慾の向ふ所を反映したものである。惟ふに我が國人は明治以來、急激なる國家發展の自然の欲求として、歐米の文物を輸入し攝取するに忙しくして、而も支那を含む大東亞・アジア大陸に關しては、知識の比較的乏しかつた事は、甚だ迂遠のことであつた。故に支那事變により國を擧げての東亞新秩序建設の大任が我々に課せらるるに至るや、今更ながら其の方面諸般の知識の缺如を痛感し、争つて之が探求に力める事になり、更に今次の大東亞戰爭の起るに及んで、益々其の風潮が盛んになつたのである。之は一面に於て甚だ立遅れの感があり、所謂泥繩的の嫌ひ

があるが又一面甚だ慶賀すべきことと言つてよい。

蓋し其の國・其の民族の現状諸般の事を知るのは極めて大切な事であると共に、更に進んで其の由來するところを究め、之を將來に向つて及ぼすことは、其の民を正しく指導し啓發する上に於て、其の經營開發の上に於て極めて重要なことである。殊に今次の大東亞戦争は大東亞共榮圏の建設を目標とし、米英流の搾取主義を排棄して、全アジアの諸民族を其の魔手より解放し、我が肇國の大精神・八紘爲宇の理想によつて新秩序の平和境の達成を目的とするものである時、これ等東亞諸民族・諸國家の由來する所を知り、其の國土民族の現状各般の事を知るのは、今後愈々指導的立場に立つべき我が國人として、何人にも心得らるべき肝要の事である。其の地方の文物・政治・經濟・地理其の他の事を識らねば、確固たる適正の指導開發は出来るものでない。さればとて我が國民の各々が夫々の事に就いて詳しく研究する事は到底許されぬ所であるから、學者や一般識者が著述に、講演に於て、之が解説普及を圖るべきは言を俟たぬ所である。況んや我が學園の如き教育の最高學府として特に今後一層大東亞・全アジア諸民族の教育指導によつて、職域奉公の一端を果

すの任務を荷ふものとして、この際進んで夫等の研究調査をなして其の成果を、又從來なし來れる研究の結果を、著述に或は講演によつて我が國人を啓發する事は、教育者として又學者として當然なさねばならぬ責務であり、報恩の務である。是に於て一般國民に、支那を知り全アジアを識らしむる手段として、平明にして興味あり學術的權威ある著作を編述する事は、その任に在るものとして刻下の急務と言はねばならない。適々我が大陸研究室に於て、時局下に於る研學奉公の爲に、又國民教養・アジアに關する知識普及の念願よりして、其の第一着手として大陸叢書の編纂を企圖し、我が學園關係の諸氏に委嘱して、平素研究調査の一端を上梓し、今回世に送る事になつたのは、眞に時宜に適した快舉として甚だ慶賀にたへない次第である。而して本叢書は大陸・全アジアに關する諸種の知識を、堅苦しい學問としてでなく、寧ろ國民一般に、中堅層に對する一般的讀物として提供し、それを讀む間に自ら其の方面の基礎的知識を會得せしめんとするを以て其の主旨とした。これが爲に其の著はす所は、教育・歴史・生物・地理に關するものあり、又東亞の通話として將來性著しき我が國語に關するものあり、又隨筆的の旅行記もあり、一面學術的

なると共に他面趣味的なるものもあるといふ状態に、多岐に亙つて居るが、凡て學術的にして同時に平明に記述するを以て方針とした。若しこの企圖が幾分たりとも現下の要求に應じ、國民の知識を増して事變處理に寄與する所あらば學徒として奉公の微志は果し得るものと考へる。

茲に聊か本叢書發刊の趣旨を述べ、以て執筆諸氏に代つて序とする次第である。

塚 原 政 次 識

序に代へて (亞種の辨)

御承知の様に、リンネは種の學名として二語命名式を用ゐ、變種の學名として三語命名式を用ひたのであるが、氏の認めた變種は少數だつたので、二語學名のもものが大多數を占めて居つた次第である。二語學名は三語學名よりも簡便で扱ひ易い事は勿論であるし、又、變種は、異つた地方、異なつた環境から報告された例が多いため、亞種別は異つた風土の影響による個體變異に過ぎないもの、中間地帯をどしどし採集して集めてみたら、きつと連續變異に過ぎない事が知られるものであらうと想像され易い結果として、なほさら亞種を嫌ふ人が多いわけなのであらう。

併し亞種別が、環境の違いの影響に過ぎないのか、固定的な遺傳的變異であるのかを判定するには、飼育實驗を試みなければならぬ筈である。實驗も經

ないで、連続變異ときめてしまふのは早計であるが、さればと言つて、二語命名式に捉はれて、さういふ疑ひの有る變異をまで、異種として仕舞はれては、同種中の異亞種とされる以上に困るわけである。私が亞種制を抹殺しないのはその點を考へるからであつて、在來の種類の中には亞種制によつて一先づ整理して、飼育實驗の結果を待つて又整理したらよいと思はれるものが澤山有るといふのである。亞種にも整理されるべきものが澤山有ると思ふが、「同種中の」といふ所まで整理されて居ると、あと一息だが、同價値の違ひの様な顔をして並列されて居る種類間の差の程度を整理する必要はもつと緊急を要する様に思はれる例が澤山有る。例へば、アフリカの猿類 *Cercopithecus* 屬の一部は、シユワルツ（昭和二年）によつて、一〇亞種程に整理されたが、それまでは、十一種二變種とされて居たのであつた。オグネフ（昭和三年）も、モウコノウサギ其他多數の獨立種とされて居た兎をヨウロッパノウサギの變種に過ぎないとしたし、アカオホカミ屬も六種とされて居たのを、ポコック（昭和十年）は一種中の

十亞種とした。此の亞種數には私は賛成しないが、同種中に籠める事は私にも合理的と思はれる。徳田御稔氏（昭和十六年）はセスチキヌゲネズミ類五種を一種としたが、此の中の四種はチャーター・ムスターズ（昭和七年）によつて、同種中の四亞種とされたものである。又徳田氏（同上）は、滿、華、鮮のセスチネズミ類三種、四變種を合併して一種とし、亞種を分ける事をも不必要とされたが飼育實驗をされた結果ではない。

山階侯爵は、鳥類の雜種試験（染色體研究をも籠めて）を重ねて、その雜種の生殖力の程度を以つて、屬、種、亞種等を判定する標準としようと努力して居られる。誠に結構な試みであるが、左様な試験を経て整理された部類と、試験を経ない部類の外形的分類との間が跛行的になるであらうけれども、部分的にでも、さういふしつかりした標準の暗示が與へられるのは大いに望ましい事である。

人間社會の人事を見ても、あまり色々な事が人に知られすぎて居る人は落第

して、餘計な事は殆ど人に知られて居ない様な人は、却つて及第させられるといふ様な例が往々有る様だが、動物分類目録を見ても、一度報告されただけで後人の目には觸れない様な種類が生きて、ありふれたものが論議されて整理されて仕舞ふといふ様な不平等は随分有る様である。本書にもそんな例が色々有ると思ふが、兎に角本書に亞種制を採用して、三語學名の繁雜を捨てなかつたのは上述の様な心持だったのである。使用の目的如何によつては、亞種名までを詮議しなくても、二語の種名だけ解れば間に合ふのであるが、目的によつては地方によつての委しい差別までも知りたいといふ場合も出て來るのである。色の違い、體の大きさや習性等の違いも、使ふ目的によっては重大問題となるのであるし、毛皮や薬用としての價值等も産地に依つて違ふが、それらの變異が、亞種の價值の有る程遺傳的に固定したものでどうかは多くは今後に残された問題である。

無脊椎動物には、亞種なんかあまり出來て居らぬのかと思つたら、マラリア

病の媒介をするハマダラカ屬などは、實に澤山の亞種に分けて考へられて居るのに一驚を吃した。つまり委しく調べられた動物では、どうしても細かな差異まで取り上げられて考察されるわけなのであらう。いくら細かな差異であつても、それが遺傳的に固定して、それに屬する多數の個體が見られるものなら亞種は分けてもよいのではないかと考へられるのであるが、さてその差異が、環境を變へて飼つても持續するものであるかどうかは試す必要があるのであらう。たゞその試験の濟むまで別學名を與へないで置くべきか、假に亞種位にして學名を與へて置くべきかといふ所が、説の岐れる所であらう。どちらにも一理は有る様である。

昭和十八年十月

阿部 余 四 男

目次

序 言	福島政次	(一)
序に代へて(亞種の辨)	著者	(五)
第一章 支那の哺乳動物の分布概況		(三)
第二章 支那の民間薬と哺乳動物		(三五)
第三章 支那の靈長類		(三)
(一) 長臂猿(科)		(三)
(二) 瘠猿(亞科)		(三四)
(三) 獼猴(亞科)		(三七)
(四) 擬猴(亞目)		(三九)
第四章 支那の奇蹄類		(四一)
第五章 支那の偶蹄類		(四五)

第六章 支那の食肉類

- (一) 牛 (亞科) (四五)
- (二) 山 羊(亞科) (四六)
- (三) 青 羊(亞科) (四八)
- (四) 羚 羊(亞科) (五三)
- (五) 鹿 (科) (五五)
- (附) 豆 鹿(科) (七〇)
- (六) 駱 駝(科) (七〇)
- (七) 野 猪(科) (七一)

第七章 支那の齧齒類

- (一) 兔 (科) (一〇〇)
- (二) 啮 兔(科) (一〇八)
- (三) 栗 鼠(上科) (一一五)
- (イ) タラバガン(科) (一二六)
- (ロ) 栗 鼠(科) (一三八)
- (ハ) 齧 鼠(科) (一四一)
- (四) 海 狸(上科) (一四七)
- (五) 跳 鼠(上科) (一四九)
- (イ) 尾長 鼠(科) (一四九)
- (ロ) 跳 鼠(科) (一五〇)
- (六) 鼠 (上科) (一五三)

第七章 支那の齧齒類

- (一) 兔 (科) (一〇〇)
- (二) 啮 兔(科) (一〇八)
- (三) 栗 鼠(上科) (一一五)
- (イ) タラバガン(科) (一二六)
- (ロ) 栗 鼠(科) (一三八)
- (ハ) 齧 鼠(科) (一四一)
- (四) 海 狸(上科) (一四七)
- (五) 跳 鼠(上科) (一四九)
- (イ) 尾長 鼠(科) (一四九)
- (ロ) 跳 鼠(科) (一五〇)
- (六) 鼠 (上科) (一五三)

(イ) 猪尾鼠(科) (一五四)

(ロ) 鼯鼠(科) (一五五)

(ハ) 竹鼠(科) (一五六)

(ニ) 鼠(科) (一六〇)

(一) 畑鼠(亞科) (一六一)

(二) 沙鼠(亞科) (一七六)

(三) 絹毛鼠(亞科) (一七九)

(四) 鼠(亞科) (一八三)

(七) 箭猪(上科) (一九九)

第八章 支那の食虫類

(一) 有盲腸(亞目)——樹仙科 (二〇一)

(二) 無盲腸(亞目) (二〇三)

(イ) 猬(科) (二〇三)

(ロ) 鼯鼠(科) (二〇五)

(ハ) 尖鼠(科) (二〇九)

(一) 尖鼠(亞科) (二〇九)

(二) 鼯鼠(亞科) (二一四)

第九章 支那の翼手類

(一) 大蝙蝠(亞目)——大蝙蝠(科) (二二〇)

(二) 小蝙蝠(亞目) (二二一)

(イ) 荒蝙蝠(科) (二二三)

(ロ) 神樂蝙蝠(科) (二二三)

(ハ) 菊頭蝙蝠(科) (二二六)

(ニ) 挿尾蝙蝠(科) (二三〇)

(ホ) 大耳蝙蝠(科) (二三一)

(ヘ) 雛蝙蝠(科) (二三三)

第十章 支那の有鱗類

..... (二四六)

第十一章 支那の淡水海豚……………(三四九)

附分布目録……………(一一—五七)

挿繪引用目録……………(五—六三)

大
叢書 支那哺乳動物誌

阿部余四男

第一章 支那の哺乳動物の分布概況

第一章 支那の哺乳動物の分布概況

今日東亞其榮園内で栽植して居るゴムの樹は、實は南米原産のパラゴムであつて東亞の野生種でない事は誰れの耳にも聞き馴れた事である。左様いふ風に、適當な環境を與へられれば、遠い異郷にも生物は育ち得るものであるから、生態的事情が生物の存亡に重大な關係を有する事は明かである。尤もゴムの樹の場合には、人間がゴムの樹と他の生物との生存競争に参加して、大きな援助を與へて居る事も見逃してならないのであつて、野生に放置された生物では、競争敵手との闘ひや相互扶助はもつと複雑である事も明かである。一つの岩に地衣が生へて居るのを見ても萬遍なく生へて居るわけではなくて、諸所に散在して居るのは吾々の一寸では測り知り得ぬ生態事情の差が有るのかも知れぬのである。動物の分布を述べる爲めには、もつと生態的事情との關聯を研究する必要がある。併し一方に、所謂古い動物地理學者の研究結果も無視するわけにはゆかぬのであつて、瓜の蔓に茄子は實らない以

上は、支那の野獸に見られる北米的色彩とかマライ的色彩とかを辿つて、彼等の祖先の移動徑路とか過去に於ける水陸の變遷とかいふ事も考へなければ徹底し得ないのである。

も一つ、動物の分布を述べるには、實は數とか量とかを述べないと經濟的な實用の役には立たない事もわかつて居るが、目下はそこまで進む道程としての基礎的分布誌であるのは遺憾である。

アレンは支那及び蒙古の野獸として五百六亞種（陸産だけで）を認めて居るが、西藏や新疆省を輕視して居るから、それを加へるともつと多くなるのである。それに支那は諸方の隣接地と陸続きであり、且つ支那自身も一続きの大陸國なので、野獸の交通路も自ら有るものと見えて、南進者やら北進者やら東進者やら入り亂れ、生態的條件によつて或る程度の局限はされるとは言つても、動物地理學者の好きな所、分布地區線の引き方は中々難しいのである。つまり學者によつて説が異なるのである。中支區を設ける人も有り、設けぬ人もあり、南支區と亞熱帶區とを分ける人も有り、分けぬ人も有り、西部高地區に陝西南部（の大巴山等）や甘肅省南部

の高地を包含させる人も有り、包含させないで北支區に入れる人も有り、西藏高臺の包括範圍なども随分異なるし、四川省、雲南省の邊の分割法は殊に説が岐れる様である。何分獸類は支那の省の境界の變更等は知らぬのであるからかなはない。分けるのが無理なのだと言ふかも知れない。左に述べる所も笑はれる一例であらうが、諸學者の説を參照した上での一案である。

一、北蒙針葉樹林

蒙古も沙漠だけの國ではない。庫倫から北はシベリアの落葉松樹林帯の續きで、落葉松、樅類、松類、檜類、樺類等の樹林帯である。ユックの言を借りれば「庫倫の喇嘛廟はトッラ河の畔に立ち、無限の森林の入口に當つて居るが、此の森林は北方ロシア境まで六、七日行程に互つて延びて居り、又東方は滿洲の索倫の地まで、五百哩近く續いて居る」のであり、又アンドリウスの言の様に、此の河の支流の谷間を北方に辿ると何エーカーも何エーカーも打ち續いて、忽忘草、螢袋、雛菊、毛茛、黃花櫻草等が谷間全體を舊式な花園に變化させる季節も有るのである。



第一圖 オホシカ(駝鹿)

此の地帯の獸類は、學名は異つて居ても、まあ中、北歐やシベリアのに近似したものが多く、シベリアには北米北部と似たものも色々居るので、此處にも北米北部のに近似したものも有るのであるが、アジアが原産地で、北米や歐洲の方に分散したものも有ると言はれるのであつて必ずしも歐や米から入つて來たと速断すべきではない。唯お互に近似して居るといふまでである。

扱、此の地帯には偶蹄類ではオホシカ(駝鹿)、オホアカシカ(馬鹿)、ノロ(麋)、野猪等が居り食肉類としては滿洲虎、オホヤマネコ(土豹)、クロヒグマ(人熊)、

狼、黒狐、紅狐、黒貂、水獺、モウコエゾイタチ、コエゾイタチ等、齧齒類では、モウコリス、ビュツヒナーモモンガ、シベリアアシマリス、ホクモウハタリス、マンシウナキウサギ、モウコハタネズミ、フトリハタネズミ、チシマヤチネズミ、オビヤチネズミ等、食虫類ではハリネズミ、キタオホトガリネズミ、バクストントガリネズミ等が見出され、蝙蝠類も皆北方的な種類である。此の地帯の動物は興安嶺の東側の森林を傳つて、滿洲や北支とも連絡ある事は北支の部で述べる。

二、ゴビ、タクラマカン、青海の沙漠及び草原

ゴビ沙漠は東は大興安嶺の北西部から、西は天山山脈の東端に至る東西二千五百軒、南は陰山山脈から北は庫倫の邊に及び、南北千餘軒に互り平均海拔千米位の波状の高原である。張家口の邊でその南端に行きつくと、突然北支の山河のパノラマが足下に展開するのに驚いて、はじめて今迄旅したゴビの地の高いのに氣が付くといふ。天山も東西二千五百軒も延びて居るのであるが、その南北にも沙漠が擴がり、南方の沙漠が有名なタリム盆地を含むタクラマカン沙漠である。タリム盆地は

海拔やはり千米位であるが、崑崙山脈の支脈なるアルタインターグ山脈や南山山脈によつてタクラマカン沙漠と仕切られた青海省のザイダム荒原は、海拔三千米位の高原である。此等の地方は乾燥が甚だしくて、樹としてはオアシスの近くに檉柳を見る位に過ぎぬが、全然草が生えぬといふわけではなく、短期間所々に草が生え實を結ぶ所も有るし、又周邊には豊富な草原が有るのであるから、獸類も色々棲むのであるが、何と言つても前に述べた様な樹林帯の獸類の南方進出には大障壁となつた事は確かである。

先づゴビ北部の草原例へば明林から庫倫の間の帯には、蒙古羚羊(ゼーレン)の群やフジロハタリスやタラバガンの穴居村落を見、又之を食とするケナガイタチが居る。プラントハタネズミやホルヤコフハタネズミも穴居する。ケアシキヌゲネズミも此の北草原とゴビの南草原との特色となるものである。南草原にも蒙古羚羊多く、數百乃至千頭位の群をなし、狼がまた出て來て之を追求するといふ。唯南草原のハタリスは北草原のと別種で、小形なナンモウハタリスで之は熱河省や北支にも居る者である。ゴビのもつと乾燥した沙漠の中心地にも然し、野生驢や甲狀腺羚羊



第二圖 ゴビの野生驢

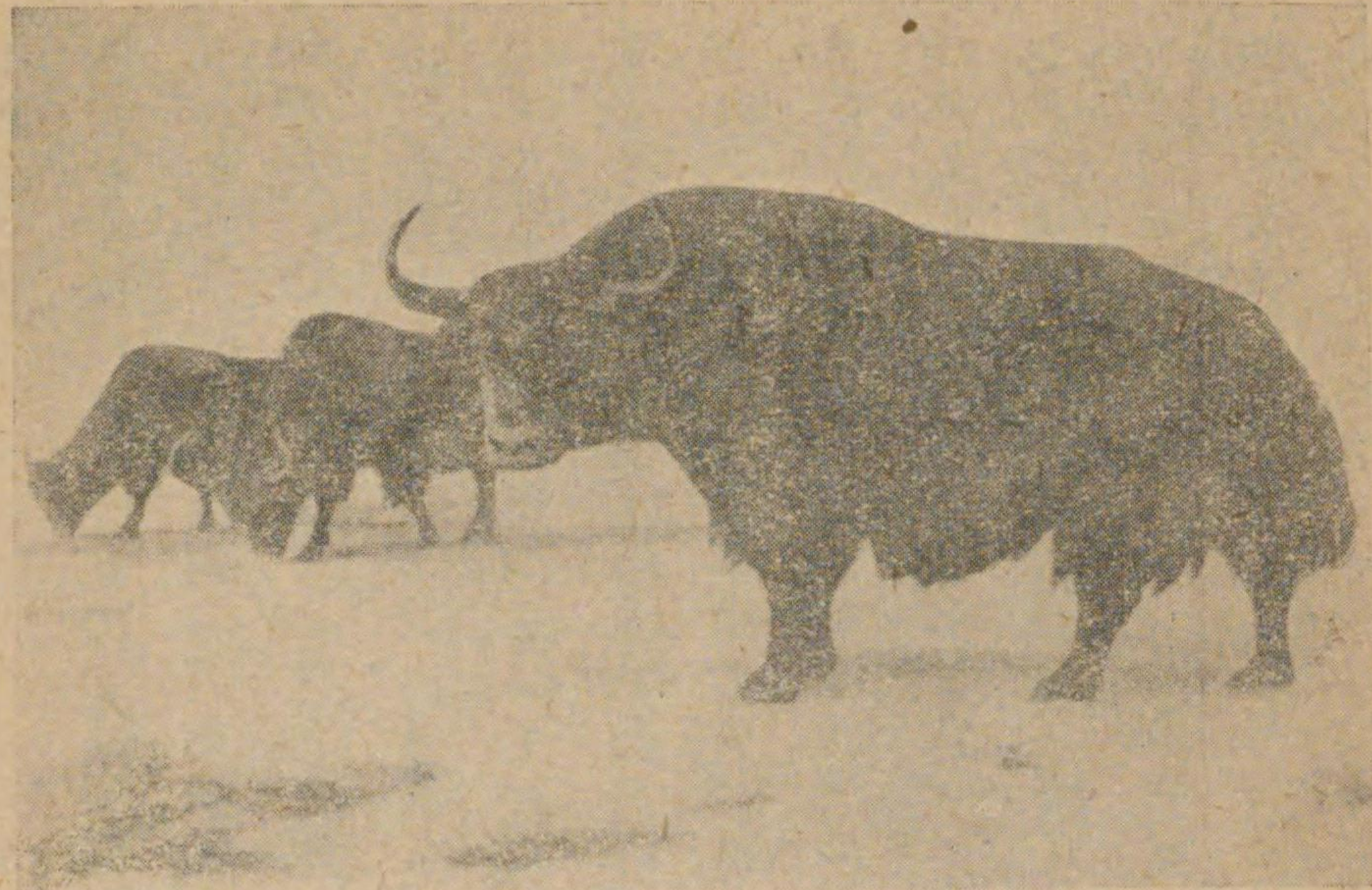
やハイイロキツネ、スナギツネ、モウコヤマネコ(キジネコ)、トビネズミ類、スナネズミ類、モグラネズミ類、ヒメキヌゲネズミ、パラスナキウサギ等色々居る。又西北から南東に走る山脈を傳つてゴビ沙漠に東南進したものと思はれるものに、盤羊やシベリア山羊が有り、ゴビイワヤマネズミ等もその一例であり、アルタイナキウサギもその一例である。本當の野生馬と稱せられるプルツェワルスキー野馬も蒙古西北隅の荒原に残つて居るが、之れは舊石器時代のフランスの洞穴の壁畫の馬によく似て居る小形の馬である。食虫類ではハリネズミの代りに耳の大きいオホミミハリネズミやヒメチネズミ(新疆)、ゴビヒメチネズミ等が居る。

プルツェワルスキーは青海省のザイダム荒原に、小形な野生二峯駱駝が居るとして長々と記述して居るが、之れは野生化したものといふ學者が多い。何分駱駝は有史

以前から飼はれ、そして冬春に使役して夏には野に放置するものだ相だから野生化もするであらう。

三、チベット高原

チベット高原は南はヒマラヤ山脈、北は崑崙山脈によつて仕切られた海拔四―五千千米の高原で、多数の褶曲山脈から合成されて居り、多くの湖水が有るが、湖水でも海拔四千米、山地は海拔六千米内外である。それでもヒマラヤ山脈には八千米、崑崙のアカターグは七千五百米といふ風であるから盆地といへば盆地だが、高い盆地だから非常に乾燥して濕草といふものは生育しないから、茲に生活する獸類も特殊な者が有る。唯東方支那本部の何處までをチベット高原の中に包括させるかによつて、此所の動物の量が異つて來るわけである。巴塘より西の西康省西部の高地はチベット高原と言ふに異論有るまいが、何分崑崙山はアルテインターグや南山にも續き南山は又賀蘭山脈に接近して居るし、崑崙の一方の枝は岷山山脈となつて東走し、陝西省南部の秦嶺や大巴山脈にも續くし、之と直角には印支山脈や大雪山脈が四川



第三圖 ヤク (犛牛)

雲南に入つて居るので、東邊は限界がぼやけて來るわけがあるのである。一八七〇年ダビッドが四川省の馬邊山邊を採集した頃は、あの邊もチベット東部と做されて居たのである。が先づ大體を述べてゆくと、偶蹄類ではヤク(犛牛)、ホデソン羚羊、チベット羚羊、白鹿等はまあ支那本部には大してはみ出して居らぬ方で、クチジロジカはチベット、青海、甘肅に、麝香鹿はチベット、四川、甘肅、陝西に、チベットタキンはチベット、西康省、四川省の馬邊山にも居り陝西の秦嶺大白山にはキョウセイタキンが居る。羊の一種でエセヒツジ(青羊)がチベットの外、ネパール、四川省、陝西省、

甘肅省、南蒙に分布して居るし他の野生羊も居る。奇蹄類ではチベットの野生驢はキヤンと呼ばれ、ゴビのと同亞種だとか別亞種だとか問題にされるが近似したものは違ひない。靈長類の天狗猿に近いイボハナザルは四川の馬邊山にも居るがチベット境まで居るからチベット高原の動物中にも編入してもよいであらう。食肉類では狼の外、オホツキノワグマはチベットにも居るが、甘肅省にもはみ出して居り、チベットクログマに至つてはチベット以外、四川、陝西、山西、河北にも分布し、近似亞種は朝鮮や日本、海南島、臺灣にも居る。オホパンダをチベット高原のもともいふ人があるのは西康省の打箭爐よりや、西まで居る事をいふのだが、本區外にも四川省では中央高地を南北に傳つて甘肅との境まで一萬尺乃至一萬二千尺位の高地の竹林に棲む事は確かである。雪豹も支那ではチベットだけに知られて居る。齧齒類ではナキウサギの種類多く、ミミアカナキウサギはオホツキノワグマの餌となつて居るし、フトミミナキウサギ、ハイイロナキウサギ、ラダックナキウサギ、ハナグロナキウサギ等が居るし、兎でもラダックヤマウサギやラッサノウサギが居り、ヒマラヤ系のタラバガンともいふ、へきドラランやコドラランも本區のものである。ラマ

イワヤマネズミ、ストリツカンイワヤマネズミも居る。食虫類ではチベットトガリネズミがチベット、西康省、四川省に棲み、ステイアンカハネズミは本區の東端とビルマ北部一萬尺の高地から採れ、ミヅカキカハネズミも本區の東端や四川省中部の馬邊山、陝西の西安附近から採集されて居る。

四、支那西南高地

四川省と西康省との境界を南北に走る大雪山脈が有つて、低い峯でも二千五百米乃至四千米、高い峯は六千米に達する大山脈で、四川省では四川アルプスといはれ、峨眉の靈峯（三三八〇米）を含み、雲南省に入つては分岐して麗江山脈とか雪嶺山脈とかを起し、その西には怒山山脈、高黎貢山脈が平行して人間にとつてはビルマとの仕切りとなり、大雪山脈の東には四川中部の馬邊山山彙、功陝山脈が有る。此等の北端には直角に甘肅や陝西の南境に互つて東西に走る摩天嶺、大巴山脈（蜀の棧道を抱く）や、もつと北には岷山、秦嶺（北嶺）も有る。此の地方にはサルキン、メコン、ソンコイの諸河が流れて水に富み、又南北に走る高嶺には濕氣を含む西風



第四圖 パンダ (猫熊)

がぶつかつて雨雪を降らすので、濕氣に富む爲め、中腹や峡谷にはジャングルが生じ、八千乃至一萬尺の所には竹林やシヤクナゲ類等の灌木林が有るといふ様なわけで、熱帯樹林性の獸類も入り込んで居るし、又附近の他處では亡びて此處にだけ生き残つたといふ様な獸類も有る。西北にチベット高原との仕切りがぼやける様に北東では岷山、秦嶺(北嶺)以南の甘肅省南部や陝西省南部を本區に入れるべきか北支區に入れるべきかの問題が有るし、東南では雲貴高臺との移行の問題が有るが元來四方へのうつりゆきのぼやけてゆく事は當然の事である。

扱本地區に棲む獸類でヒマラヤを通して西方と共通ともいふべき分子としては靈長類ではケブカザル、チビヲザル、アツサムザル、偶蹄類ではタキンやカモシカ類、食肉類ではパンダ(猫熊、化粧熊)、食虫類では、ウンナンモグラ、ヲナガケムリトガリネズミ、ステイアンカハネズミ、ミヅカキカハネズミ等が有り、はみ出しても居るが、本地區が本場と思はれるものとしては靈長類にイボハナザル、食肉類にオホバシラ、食虫類にヒメモグラ、セツザンヒメモグラ屬(三種)、ホソヒメモグラ屬(二種)、ウンナンシナヒミス、ウロコアシチネズミ、フトリトガリネズミ屬(三種)、ヤマトガリネズミ屬(五種)等あり、ハナナガモグラも歐洲や西亞には同屬のものが有るが、支那では本區丈に知られて居る。若し陝西南部大巴山や甘肅省南部をも本地區とすれば其處に棲むオイエモグラ(北米のに似た一例)も面白い例である。齧齒類でもチベットナキウサギ、ダセンロナキウサギ、グロバーナキウサギ、シセンタラバガン、シロアカムササビ、ミミアカムササビ、フォレストイワリス、フォレストハタネズミや、ダセンロハタネズミの屬、スチハラヲナガネズミ(北米に同屬有り)も本區の特色といふべく、又ビロウドネズミ屬も本區には種類非常に多く

て正に本場といはれる。

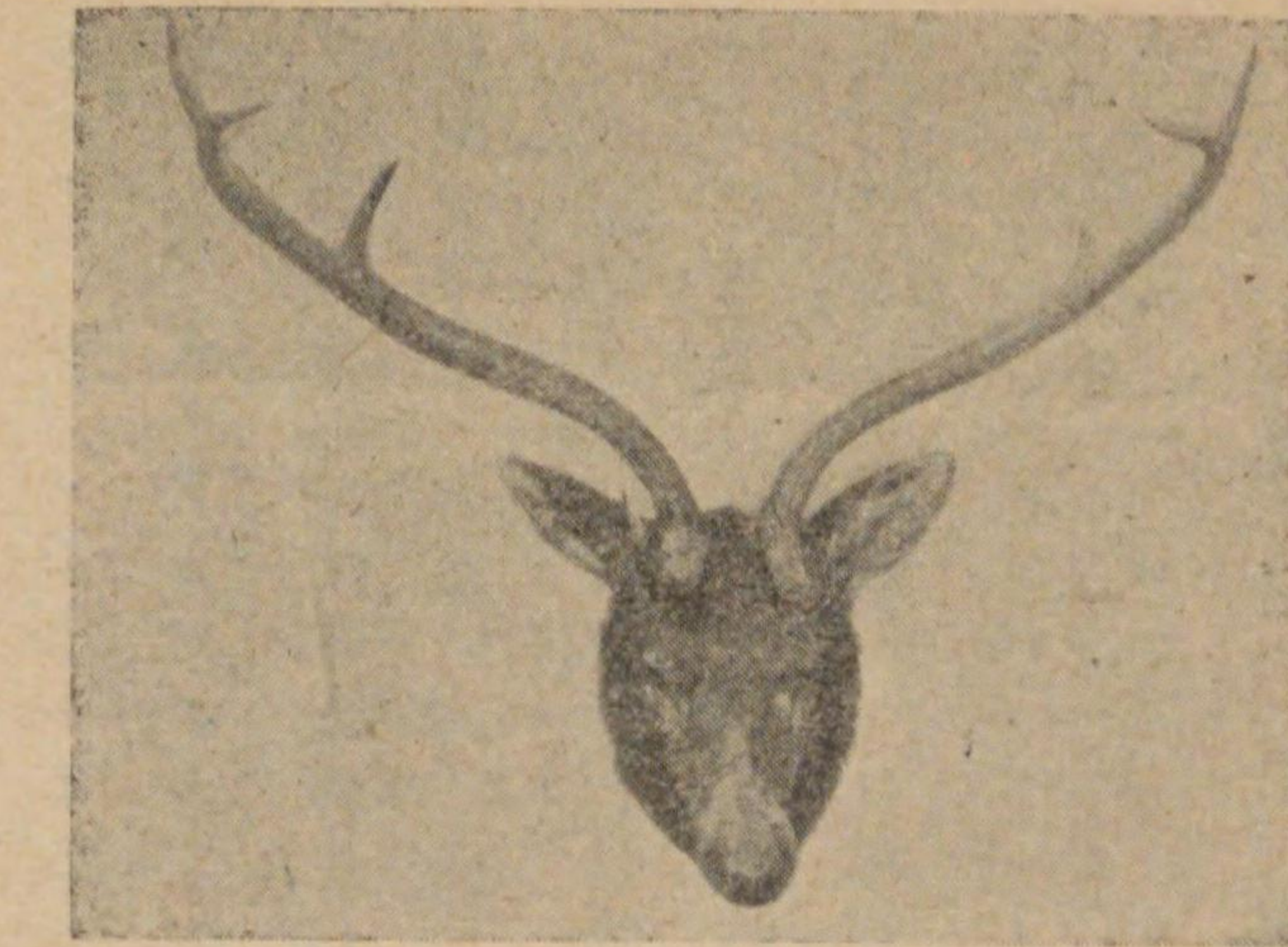
其他一々數へれば限りもないが、佛印、ビルマ、マライ地方等とも接して居るので、南方低地的な獸類も澤山入り込んで居り、小蝙蝠類等で見ると南支の一部といひ得る相を示して居る。雪線以上の部が澤山有るに關らず、高山的特色の獸類の少ないのはゴビや新疆、青海の沙漠が昔から北方獸の南進をはぐんだからであらう。

五、南支地方

中支地方を設けない事にするなら、大體北緯三十四度以南の地方から、前述の西南高地を除いたものである。揚子江流域とそれ以南ともいへるであらう。西には雲貴高臺があり、その東には江南を東西に走る南嶺山脈があり、浙江、江蘇には斜に南北に走る仙霞嶺山脈あり、又それらの支脈が有る。

海南島は南支の動物の一部分が入つて、一寸變化してハイナン何々と名づけられる様になつた南支獸類の雛型の陳列所の様なものであるから、先づそれに就いて述べて見ると、靈長類ではクロテナガザル、ハイナンヤセザルあり、偶蹄類ではハイ

ナンキョウ、ハイナンスイロク、ヒラツノシカ、ナンシヤチヨ有り、食肉類ではアモイトラ、ウンペウ、シナヤマネコ、ハイナンジャカウネコ、ハイナンヤシネコ、



第五圖 ヒラツノシカ

ハイナンハクビシン、カホアカマングトス、ハイナンクログマ、ハイナンイタチアナグマ、シナカハツソ、チビヅメカハツソ等有り、齧齒類ではハイナンノウサギ、ハイナンオホリス、ハイナンシマリス、ハイナンハナナガリス、ハイナンクリハラリス、ハイナンモモンガ、ハイナンムササビ、ハイナンイヘネズミ、ハイナンコウシネズミ、ハイバラネズミ、キノボリネズミ、ハイナンフサヤマアラシ、ハイナンヤマアラシ等有り、食虫類ではハイナントガリス(樹仙)、ハイナンモグラ、

ジャカウネズミ、シナチネズミ等、蝙蝠類では、イヌオホカウモリ、ハイナンカグラカウモリ、シナヒメカグラカウモリ、ハイナンキクガシラカウモリ、ハイナンヒ

メキクガシラカウモリ、ハイナンハナビロキクガシラカウモリ、ハイナンオホミミカウモリ、ダビッドカウモリ、ハイイロホホヒゲカウモリ、ハイナンカシラダカカウモリ、チャイロカシラダカカウモリ、コアシユビナガカウモリ、ヒメユビナガカウモリ、クロアカツツミミカウモリ、アカテングカウモリ等有り、又ハイナンセンザンカフも居つて住民は犬に追はして丸くなつて動かぬ所を捕へて、食つたり、皮を賣つたりするといふ。

大陸南支には此等に似た者の外、もつと澤山の種類が有る事勿論で、靈長類ではマユジロテナガザル類が雲南境に入つて居るし、ヤセザル類も雲南に一種、廣西廣東西部等にも居る外、日本内地の猿に似た短尾のナンシチビザルが廣東省、福建省に居る。擬猴類のノロマザルもシヤムの方から雲南省南部に入り込んで居る。

偶蹄類ではキヨン(羴)やツノキバシカ(毛冠鹿)、水鹿、南支野猪、ナンシカモシカ等が湖北省以南に廣く分布し、クロカモシカは江南に限られて居る。日本鹿系の鹿は浙江、江西、江蘇、安徽以北、北支にも居るが、牙麋は湖北、湖南以東の揚子江沿岸に限られて居る(朝鮮に變種は有るが)。

食肉類で江南に限られて居るものには印度、マライ、佛印、臺灣等に近似種の有る者多く、即ち雲豹、石虎、テミンク猫、タイワンジャカウネコ、コヤシネコ、ハクビシンの類、カニクヒマングース、イタチアナグマ類、チビツメカハフソ等有り湖北(や四川)の方まで廣く分布する者に、印度系のアモイ虎、南支豹、麝香猫、貉類、南支狐、支那獾、黃襟貂、ダビッドイタチ、水獺等有る。

齧齒類ではナンシノウサギは北支のとは別系のものだし、タイワンシマリス屬(河北に一種居るが)、ハナナガリス屬、クリハラリス屬、アカムササビ其他のムササビ屬、竹鼠科、猪尾鼠科、ナンシビロウドネズミ、キバラネズミ、ハイバラネズミ、フツケンコキバラネズミ、コウシネズミ、オニネズミ、コキノポリネズミ屬、キノポリネズミ屬、フサキノポリネズミ屬等は北支にはまゝ居ない類である。

食虫類では猬の棘のない原始型ともいふべきキノウハリネズミやトガリリス(樹仙)が西方の他國から雲南に入り込んで居り、福建や海南島にのみ日本のモグラと同属のものが採れるのも面白い。ジャカウネズミは廣東省、福建省の海岸近い處に多く、シナチネズミ、フツケンチネズミ、フツケンカハネズミも南支のものである。

蝙蝠類ではオホカウモリア目の二種が居るのは當然といつてよいが、日本南部のオホカウモリと同属のものが居ないのは不思議である。小蝙蝠亞目では福建省や四川に居るアラカウモリも日本には居ない南方系のもので、カグラカウモリ科、サシヲカウモリ科、オホミミカウモリ科（一種が河北で採れたのは寧ろ迷ひ込んだのであらう）は附近の南方諸國に多いのと似て居るのである。菊頭蝙蝠科も北支よりずつと種類が多いし、雛蝙蝠科にもヤマカウモリモドキの特産があるとか、ツツミミカウモリ属も北支には居ないし、ユビナガカウモリ属やヒナカウモリ属、テングカウモリ属なども北支より種類が多い。

穿山甲（陵鯉）の事は海南島の所で述べたが、シナセンザンカフは揚子江以南に廣く分布して居る。

六、北支地方

ゴビ沙漠以南、岷山、秦嶺以北、賀蘭山脈以東位の地域が主部で、省でいへば、河北、山東の全部、山西、陝西、河南の大部分といふ事になる。甘肅、陝西の南部



第六圖 ホクシカモシカ

は支那西南高地の續きといふ色彩もあるといふ事は前に述べたが、オルドス沙漠も

ゴビ沙漠的要素が北支に入る中間地帯である。北蒙樹林帶的動物の要素は前述の様に興安嶺の東を通じての連絡と思はれるので満鮮と似た色彩が多いのは當然である。此れがむしろ北支獸類の主體であつて、それにゴビ沙漠的要素、南支的要素、西南高地からの進入者が加味されて居るといふべきであらう。

熱河のケブカザルを野生化したものとする定説に従ふと北支以北には野生の靈長類はないが、偶蹄類では山西谿谷の山西大赤鹿（馬鹿）や日

本鹿系の熱河鹿、山西鹿が居るし、その連山の山頂部には大きな角を卷いた盤羊が雄姿を現はす。鮮満のカモシカと同属のホクシカモシカは河北、山西、陝西に分布し、麝香鹿は河北、山西の山に、その一變種は甘肅、陝西から四川、湖北、廣西、雲南の岩山にも分布する。麝も滿蒙にも居るが、河北、山西、甘肅、陝西、四川北部のはベッドフォードノロと言はれるが、個體數の多い事は野兎に次ぐ程で狩獵家を喜ばして居る。四不像（麋鹿）といふ珍種の鹿も日清戦争までは北京の南苑に澤山殖えて居た。今では支那では亡びたであらうが、山西の殷墟からも掘り出された所からみると北支に野生して居つたのであらう。

食肉類では毛の長い滿洲虎が熱河省までは確かに居るが、北支では一九三三年に山西南部の新郷の北で獲れたといふのが珍らしがられる位、少なくなつたらしい。北支豹は滿洲、河北、山西、陝西、甘肅から南支の東部にも分布し、キジネコも河北省北部の沙漠の縁に居る。オホヤマネコ（猓狽）は熱河にも河北、山西にも、四川、チベット、雲南西北高地にも棲む。支那狼は北支のみでなく廣く分布するが支那貉は却つて南支の方で多く獲れるのは水流の多い關係であらうが、北支にも居

る。北支の紅狐は南支のより大形であるし、赤狼も居る。支那獾は南支より北支に多く、沙獾も白頸の種は北支に居る。トラファイタチといふ條斑の有るイタチはオルドス沙漠の縁に棲むし、シベリアイタチ系のサンセイイタチ、サントウイタチ、カナンイタチは夫々名の示す地方に棲む。アルタイイタチ類は蒙古や西藏にも棲むが北支でも山西、甘肅の高地に棲む。

食虫類では南支に見ないシナハリネズミやオホミミハリネズミが居り、ジャカウモグラや北米に近似屬を有するオーエンモグラも居る。セスヂトガリネズミ、カンシユクオホトガリネズミ、カンシユクトガリネズミも居るし、ヂネズミ類は南方に多いものだが、サントウヒメヂネズミ、キタシナヂネズミ、カナンヂネズミが居る。蝙蝠類では南方的なオホミミカウモリの一種が河北省で獲れたといふのは珍らしいが、あとは屬としては鮮満や日本内地に居る屬のものだけである。

齧齒類ではヨウロツパノウサギ系のモウコノウサギやスキンホーノウサギやその變種が可なり普通に見られ、山西に白化する兎が居るといふ話もあるが、まだはつきりしない。ハタリス屬のナンモウハタリスが熱河から河北、山東、山西東部など

に棲み、アラシヤンハタリスが山西西部からアラシヤン東部にかけて棲む。シマリス屬ではコシアカシマリスが熱河から河北、山西に廣く分布し、陝西にも入り込みオルドスシマリスはオルドス沙漠の縁に棲む。其他ダビッドイワリスは、滿洲、熱河、河北、山東、山西、甘肅に入り込み、チヨクレイリスは河北省の森に棲む。モモンガ類ではビュツヒナーモ、ンガが山西西部と甘肅とから知られ、ハネグロムササビ(北京附近)、アカアシムササビも河北省から知られて居るが、南支のムササビ類とは屬が別である。鼠類ではモグラネズミの二種が陝西、甘肅から知られ、ビロウドネズミ屬の一種が山西、陝西にあり、絹毛鼠類は豊富で七亞種が知られて、その寄生節足類が黒熱病の媒介をしはせぬかと疑はれて居る。スナネズミ屬も二種北支にも棲む事が知られて居る。

第二章 支那の民間薬と哺乳動物

漢薬でも植物性や礦物性のものには對症療法的なものも多いが、動物性の薬といふものにはむしろ補腎とか強精とかいつて、つまり滋養劑、強壯劑の様なものの方が多い様である。その中には哺乳類から取るものも少なくないが、殊に廣く用ゐられるのは鹿である。支那では昔から福、祿、壽を理想としてあこがれるのだ相だが鹿は音が祿に通ずるから貴重とされるといふ點もあるらしいが、そればかりでもないかも知れない。角などは三、四ヶ月の間にあんなに伸びる所を見ても何となく生氣の強い物らしく思へるのであらう。鹿の生血を飲む爲めに、椀を持つて、獵師に附いて山あるきをするともいふし、陰莖を乾燥させて鹿鞭と稱して親友でも來ると、之を削つて酒に入れて飲ますといふし、鹿の胃を内容ごと乾したものを煎じて健胃劑にするといふし、翠丸は鹿鞭以上に高價であるといふ。併し一番商品價値の有るのは胎兒と袋角(鹿茸)とである。胎兒は子を得る爲めの薬として用ゐる相で、中



第七圖 オホアカシカの袋角

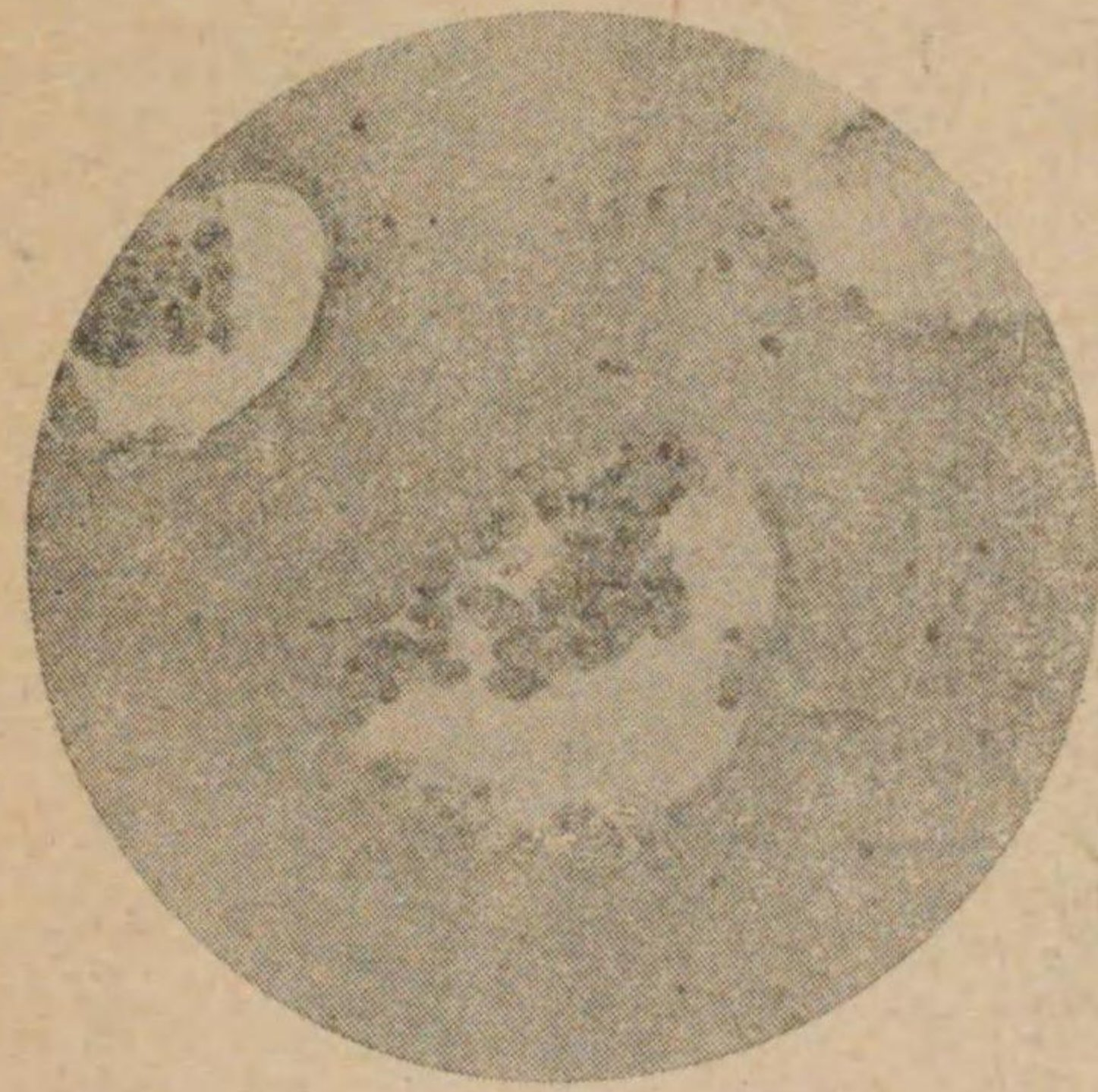
には男の子を得る薬、女の子を得る薬と稱して、男女子どちらでも望み次第のを賣つて居るといふ。鹿茸即ち袋角は外側の毛皮をむいて薄く輪切りにして煎じたり粉

にしたり酒にませたりして服用するのだ相だが、鹿の種類、産地、袋角の發育上の時期等によつて、随分値段にも高下が有る相で、袋角の末期に近づいて大部分化骨した様なばさ／＼した物は安く、未だ血液や有機物質の多い、飴の様にちや／＼した部の多い物を貴

しとするのは道理にかなつて居ると思ふが、鹿の種類や餌の如何が、どれ程の効能の差を來すかは知らぬが、値段程の大差はないのではあるまいか。靈草を食はして



第八圖 オホアカシカの袋角の組織 (先端近くの部) (軟骨細胞と血管とを見よ)



第九圖 同上 (基部近くの部) (骨質とハーヘルス氏管とを見よ)

飼つたのでなければ効が薄いなどといふのは勿體をつけて居るに過ぎまいと思ふが、鹿の角は毎年生へるものであるから、飼つて置くのも商賣として成り立つ事は確かで、殊に角の大きな枝の多い者程有利なわけであらう。シベリアや滿洲で大赤鹿や梅花鹿を飼養して支那に輸出する量も大したものな相で、六、七月頃の生きた袋角一斤(支那斤)が五十圓乃至百二十圓、六歳乃至十歳位の牡の大赤鹿の袋角は一双で百斤以上もあるから、毎年千圓以上にも賣れるわけである。牝は角がないからつまらぬわけだが、それでも胎兒は牡兒で百五十元、牝兒で七十元もするといふから馬鹿にならない。支那内部でも飼養家が相當

に有るものらしく、火野葦平の「花と兵隊」にも杭州に澤山飼つて居る家が有つて、わけを知らぬ駐屯兵が殺して食はうとしたら、牡一頭六百元を請求されて驚いた事が記されて居る。此の鹿はどんな鹿とも書いて居ないが、大さに驚いて居ないところを見ると、その地方産の、日本鹿系の中支鹿であらうか。之なら大赤鹿と比べたら、男女川と比べた櫻錦よりもつと小さいのである。ニコールスミスの「ビルマロード」にも海南島で一頭で一家を養つて居る鹿の記事があり、毎年八十弗づゝで角が賣れるので、一家を養ふといふのも嘘でないを書いて居る。此の鹿は海南島でも奥の奥の西洋人などの行つた事もない様な處で捕へた馬鹿マールだと言つて居るが、支那人がマール馬鹿といふのは大赤鹿の事であるが、それなら、シベリア、北蒙、滿洲、山西省等には居るが、海南島に野生して居るとい話は學者には知られて居ないし、又あり相もない事で、本土から仔でも買つて來て飼つて居るのではないかと思ふ。臺灣でも鹿を飼つて鹿茸を採るといふが、臺灣には華鹿、水鹿、恙きり野生して居ないのであるから、どんな種類の鹿でも商賣になるのであらう、勿論値段の高下はあらうが。後藤朝太郎氏によると、四川省の岷江と金沙江との合流地點の叙

州には盛大な鹿角のマーケットがあつて、其處には高さ四、五尺もある大きな袋が無數に並べられて居り、その内は一杯に鹿の一、二寸の袋角であるといふ。それほど、支那の袋角の賣れ口が有るのであつて、どんな葯店でも鹿茸を備へぬ店はないといふ。又支那には鹿の種類が多いのであつて、前に述べた大赤鹿の外に、チベットから甘肅南部にかけては五先の角を有する大きなクチジロシカや白鹿ハイルが居るし、雲南には水鹿の外に、角の九乃至十先も有るシヨンプルクジカも少しは居るらしいし、四川から南支一帯にかけては水鹿が居り、江蘇、浙江以北から北支にかけては日本鹿系の中支鹿、熱河鹿が居るし、海南島には水鹿の外にヒラツノシカも居る。竹の根の様に節の多い角をした羚羊日本の羚羊の類ではないの角も薬用にされ、モイコレイヤウの様に飴色をした艶々したのが優品とされる相で、一對で何百圓とする相である。此の角は牛の角と同様、中心に骨心があり、その周圍に犀角や爪と同性質の角質の（有機質の）角鞘が被さつて居るのであるが、羚羊のは節が有る爲めに骨心と角鞘とが離れないのである。角鞘が厚くて一寸觀ても、飴の様なおいし相な色をして居る。やはり粉にしたり酒に入れたりして服用するのであらう。

虎の肢骨といふものも賣つて居り、やはり輪切りにして碎いて服用するものらしいし、又「虎骨酒」等といつて酒にも入れるらしいが、私の買つた虎の肢骨なるものは牛の肢の骨に他の獸の趾や爪を附け加へたものであつた。すべて贗造物を念入りに造る事、支那人の如きは天才といふべきであらう。海狗（ワットセイ）の陰莖だとか、水獺の膽などといふものも用ゐるが、猫の肝臓を乾した「水獺の膽」等も有る。

熊の膽なる物は本當は熊の膽囊であるべきで、それは本物も有り得るのであるが本物でも一匁が金一匁と同値段などといふのは乾燥した膽囊についていふべき風習であつて、水分の多い生まなので、そんな高價なのはインチキである。熊の膽は月輪の有る黒熊の膽より安いものだ相ではあるけれども、カリンスキーによると北滿の熊の膽囊は一頭分で五十圓位のものらしいのである。膽囊は胃腸には効能が有つても不思議でない様に思はれる。

穿山甲の鱗が天然痘や疥癬、腫物、梅毒等に用ゐて効能が有るといふのはにはかに信じられないが、その肉が美味なものである事は本當らしい。

其他支那の黒焼き藥の様な物には獸類の腦とか諸部をも使用する様だが、カルシウムと有機物との混合物には相違ないから、刺戟がちつともない事はないであらうし、臓器療法的一種と做される場合もあるであらうけれども、安い榮養食とどれだけの差があるのか、高い金を出すのは馬鹿／＼しい例も多いであらう。或は高價に對する心理療法みたいなものかも知れない。

第三章 支那の靈長類

一、手長猿（長臂猿）科

此の類は猩々類よりは小形で（三尺以下）、腕が脚より長いとか小さな臀胝が有るとかいふ點で類人猿科と分けられるけれども、直立歩行の上手な事も人間に次ぐし頭骨の釣合なども最も人間に似て居る。性質も兇暴でなく、人にもよく馴れて、キース夫人のボルネオの著書によると、女史に戀着してやきもちをやいたり、夫人の手を握つて頭をなでさせながら一所に仰臥して喜んで居つた相である。食物は果實、昆虫、蜘蛛、鳥の卵等である。群居性があり、アンダーソンがビルマと雲南省との境の邊のイラワデー河の上流地方で觀た時の記事によると、密林に被はれた河の兩岸の崖上をヲーコ、ヲーコと嵐の様に木魂させながら無數の個體の群が動いてゆく。はじめはかすかに聲が聞えたと思つてる内に數分も経たぬに遙か頂上に聲が

移つて居る。樹上をブランコしながら動いてゆく事を思ひ合せると、その運動の速さは驚くべきであると述べて居る。直立歩行の時は人が躍る時の様な恰好に兩腕を舉げて調子をとる。手長猿はマライ、ビルマ、印度、シヤム、印度支那等に分布して居るが、支那の西南部にも二種が居る。

クロテナガザル（黒長臂猿）(*Hylobates concolor* Harlan) は海南島の産で、牝はまあ全身真黒であるが、仔の時は牝は淡紅色であり、牝も成長につれて一旦黒くなるが、七、八才の成熟者ではまた淡色になる。他の手長猿と異つて額の毛が逆立つて居るといふ特徴もあるし、牝の陰核も異常に長くて陰莖に似て居るのも特徴とされて居る。エルチによると鳴聲もホー、ホー、ホー、ホーときこえて、次に述べる種類のはハー、ホー、ハー、ホーときこえるといふ。海南島の對岸に近い東京邊に棲む手長猿は頬に白斑があるといふので別種とする人も有るが、變種 (*H. concolor leucogenys*) に過ぎないといふ方がよさであらう。

マユジロテナガザル（白眉長臂猿）(*Hylobates hooleck* Harlan) 此の種類は分布の廣いもので、アッサム、ビルマから雲南省に入り込んで居り、ビルマ南部やシヤ



第十圖 マユジロテナガザル

ムのラルといふのも之れの變種と做すべきか別種といふべきか疑問であるといふ程似たものである。海南島のに比べれば、額の毛が後方に寝て居り、牝の陰核も長くなく眉帯が白いので異つて居るが、他の體部は矢張りまあ黒色であるが、之れも色は年齢により個體によつて色々異ひが見られるのである。雲南省ではビルマ境のサルペン河の崖の密林によく見られて居る。

二、瘡猿 亞科

此の類は後肢は前肢より長く、尾も頭胴長に等しいか又はもつと長い位で、頬嚙は缺くか又は小で、樹葉や花や筍などを食とし、食物を一時食ひためる部屋も有るので胃は三部に識別される。瘡猿といふ名は日本などの猿より體が細長い點から來たのであらう。支那には鼻の上向きに尖つた(天狗

猿程長い鼻ではないが)類と、普通の鼻の類とが居る。

イボハナザル(疣鼻瘡猿)(*Rhinopithecus roxillanae*)は英名を直譯すると黄金猿



第十一圖 イボハナザル

なるものであるが、それは頬から咽、腹面、手足の内面が黄金色をしてゐるからである。背面や尾(尾端は白)は灰黒色である。此の珍品ははじめ四川省の中央の馬邊山で獲れて、一八七〇年にミルヌ・エドワーズによつて發表されたのであるが、其處よりはむしろ西

部四川省に多く、チベット境までも、又甘肅省南部にも見出されたので、熱河の東陵の猿を後に述べる様に人が移入したものとすると、日本の猿と此の黄金猿とが自



然分布の最北進者となるわけで、耐寒性の強い者といはねばならない。頭胴長七四〇耗乃至七二〇耗、尾長五一〇乃至七二〇耗。之れに似て前種の黄金色の部が白く、灰黒色部が淡褐色のビートイボハナザル (*Rhinopithecus bieti* M. E.) が雲南省西北境の阿墩子附近から知られて居る。

鼻の尋常な類の方はヤセザル類とも言はれ、印度の方ではラングール (*langur*) とも呼ばれる類である。印度、ビルマ、マライの方に多いのであるが、群をなして非音樂的でもない聲で鳴きかはしながら、樹頂から三十尺も下の枝に跳躍するかと思へば、落ちた反動で巧みに他の枝に飛び上るといふ風にして行列をなして行進する。毛皮は高價に取り引きされる程、毛も深くて立派である。支那は分布の末であるが、西南部に次の三種が知られて居る。

ハイナンヤセザル (海南瘠猿) (*Pithecus nemaeus* L.) は海南島と對岸の佛印との産で、頭胴長六二〇耗、尾長六一〇耗位の大きさで、大體は暗灰色乃至黒ずんだ色だが、臀部や肛門の邊が白く。フランシスヤセザル (クチギレヤセザル) (*Pithecus francisci* Pousargues) は廣西省南部から廣東省の西部にかけての産で、大體黒いが

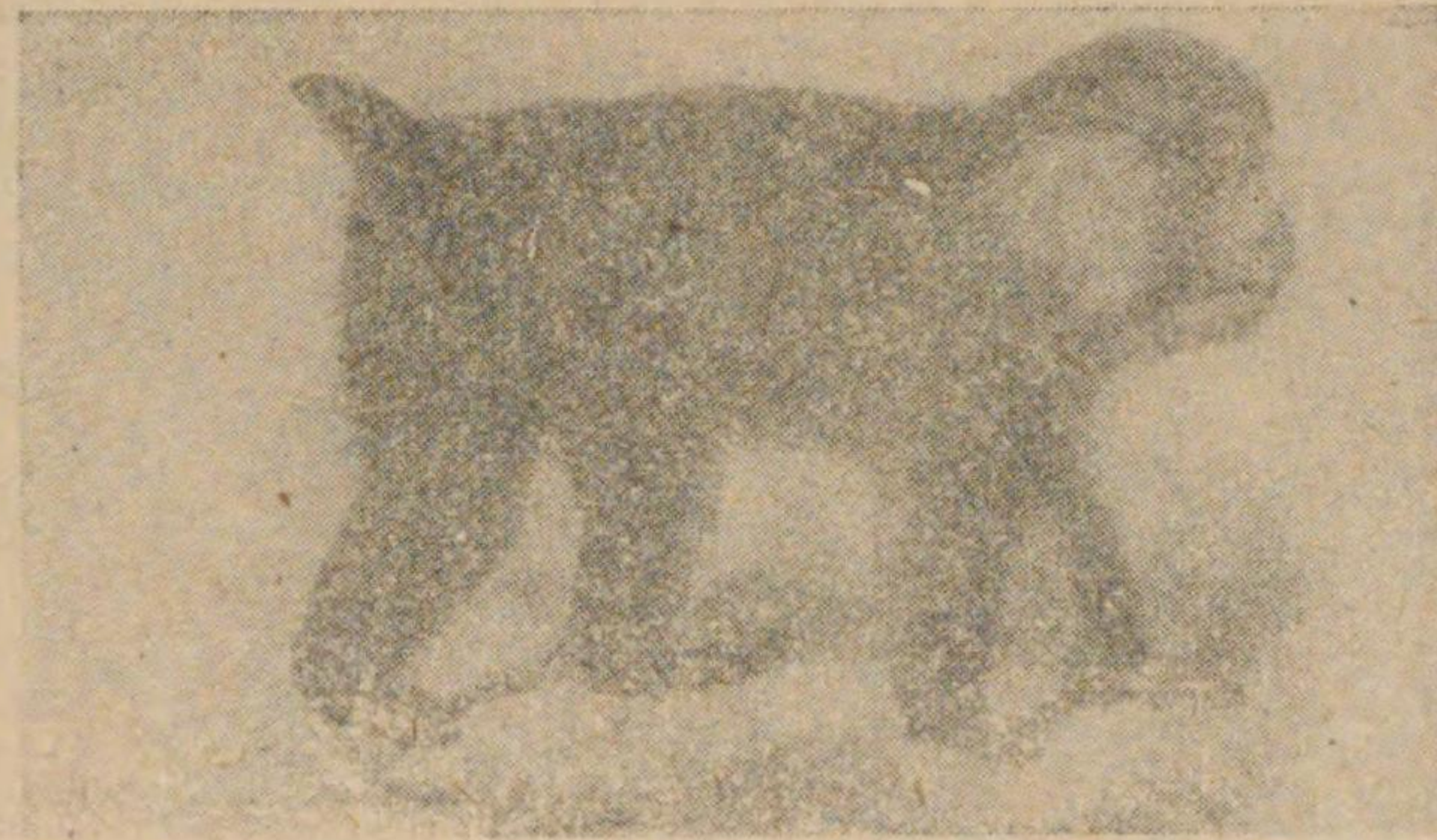
口角から耳の根にかけて白帯が有る。頭胴長四九〇耗、尾長七四九耗位。はじめ廣西省龍州駐在の佛領事フランシスが附近の左江の大懸崖で獲つたのだが、南寧附近の岩岸でも小群を見て居る人もあるし、トーマスは佛印の東京地方でも得て居る。も一種はバーベヤセザル (コシグロヤセザル) (*Pithecus obscurus barbei* Blyth) やビルマから雲南省西境に分布して居るもので、成熟者は顔と胸は黒く、他は銀灰色をして居るが、六ヶ月位の仔は茶褐色である。頭胴長六五〇耗、尾長七六〇耗位。

三、獼猿 亞科

此の類は瘠猿亞科の者たちがつて、口の内側に食物を貯へる頬嚙有り、尾も頭胴長よりは餘程短く、食物も果實とか昆虫とか雜食性なので胃は單純である。アジアの獼猿も樹上生活ではあるけれども、地上に坐る習性もあるので、アフリカのに比べて殊に尾が短く、臀部が顯著である。支那には三種知られて居る。

レズサル (ケブカザル) (*Macaca mulatta* Zimmermann) は印度、カシユミール高地、ネパール、チベット、四川の揚子江上流地方から揚子江南の雲南、海南、

廣東などから知られた。ミルヌエドワーズは熱河の猿を *Macacus tcheliensis* とす
ふ新種として居るけれども、之れはレズサルが、帝室の命で人工移入されて保護



第十二圖 ナンシチビラザル

されて野生化したものと考へる人が多いのである。つまり此等の猿は皆、尾は日本の猿よりは長くて一五〇耗位あり、背の色は茶褐色乃至黄灰色である。アッサムザル (*Macaca assamensis* Mac Cleland) とす方は頭胴長五七五耗乃至六八〇耗、尾長二三五耗といふ位の、まあレズサルより僅に大きい位だが、毛が波うち、背色が一體に黒褐色で黄色味が少ない。産地は支那では雲南省の西境で、ビルマ境のイラワディ河を降る船からは飯や果物を投げてやる相であるが、印度北部からシツキム、ネパールの高所にも分布して居る。

も一つ私にとつては非常に面白い事に、チビラサル (チベットサル) (*Macaca speciosus tibetanus* M.E.) = (*Lissodes speciosus tibetanus*) とすふ日本猿に非常

によく似た、顔の赤い尾の痕跡的な猿が、アッサムとチベットとの境の邊から四川省 (馬邊山)、雲南に居るし、之れの變種ともいふべき近似亞種ナンシチビラサル (*M. speciosus melli* Matchie) が、廣東省西部から福建省に居る事である。命名者のマチーといふ人は種類を分けすぎる位の人で、日本のヤク島の猿をも以北の猿と分けて新種として居る人であるから、四川省のと廣東や福建のとを別として居つても、大した差があるといふわけではなく、四川のは褐色なのに、廣東のはチョコレート色で黄色の影がさして居るといふのであるから、東方のもの程日本のに色も似て居る事になる。頭胴長六〇五耗に對して尾長六六耗といふのであるから、ケブカザルよりはずつと短い尾である。

四、擬猴 亞目

近年まで招魂祭の見世物などに「血塊」と稱して見せた一尺ばかりの、人の子の出来そこなひの様な形をしたのろくしたものがあつたが、あれはベンガル地方ではコンカンといふ擬猴類のもので、ベンガル、ビルマ、マライ地方に居るのである



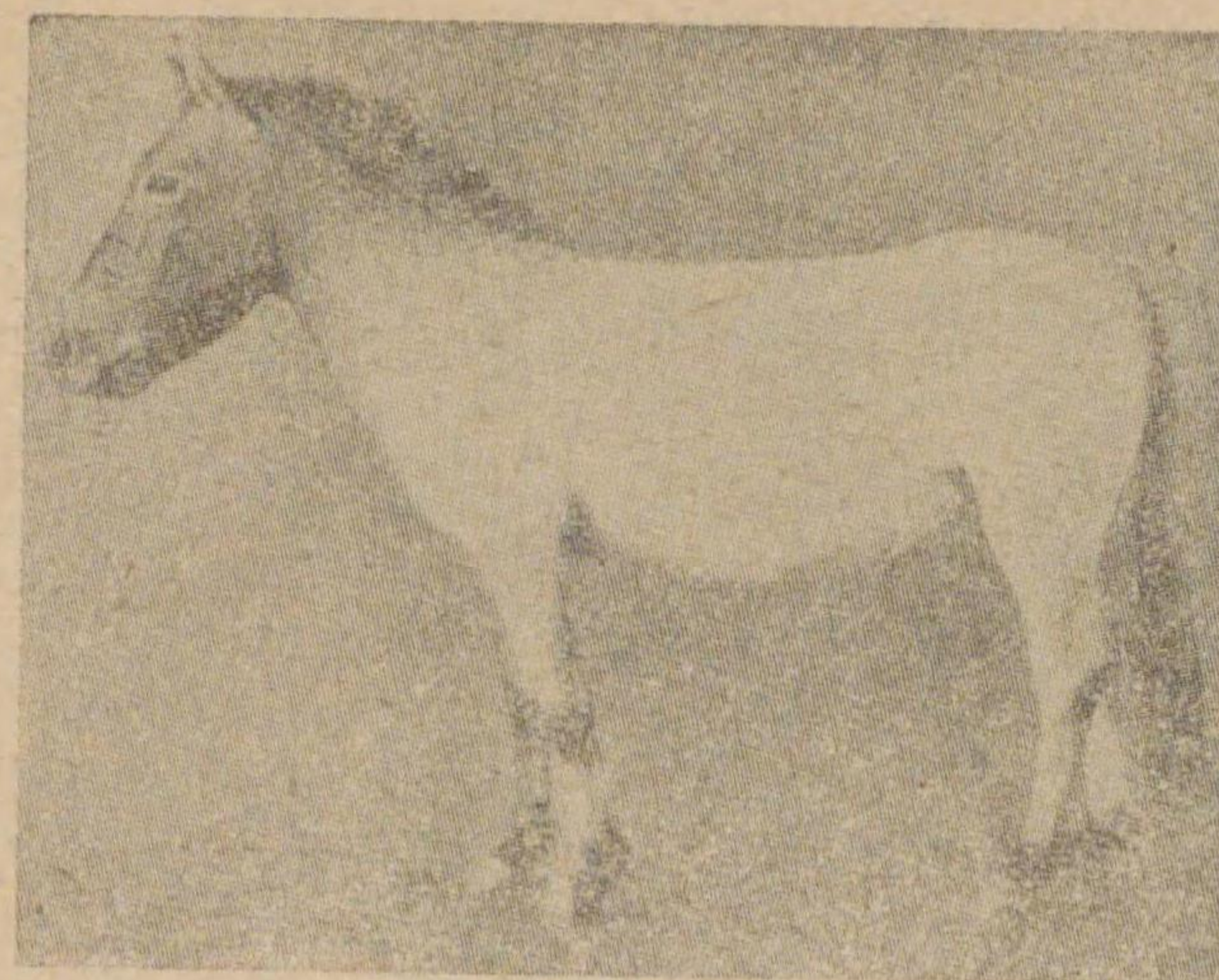
第十三圖 ノロマザル

が、シヤムや南支のはその變種で、ノロマザル學名を *Nycticebus concang cinereus* M.F. とす。雲南省の西南境——ビルマのバーモに近い邊には居るといはれる。スキンホーは一八六三年に廣東で生きた者を見たといふが、日本にさへ生きた者が來るのであるから廣東に野生するといふ證にはならないであらう。一寸人の怨靈の小さく化けた様な形を連想させるせいか、スマトラ原住民などは之を見ると不吉だとして居る相であるが、雲南ではそれほど日常出合ふ程多くはないのであらう。

第四章 支那の奇蹄類

犀と獐とは化石以外には支那に産しないので、奇蹄類と言つても、茲では馬と驢との野生者を述べるに留める。普通に馬と驢との異ふ點として、馬では肢胛が前(腕骨の上)後(跗骨の下)肢兩方に有り、尾の長毛は全尾を被ひ、蹄廣く、耳短いのに対して、驢では肢胛は前肢にのみあり、尾の長毛は尾端近くのみであり、蹄狭く、耳が長いと言はれて居る。鳴き聲もちがふ。

蒙古野馬又はプルツェワルスキー野馬 (*Equus przewalskii* Poliakov) は外蒙古の西北隅草原地方でポリアコフが入手して一八八一年に學名をつけたのであるが、分布はもつと廣いので、蒙古野馬とも言はれるのであらう。プルツェワルスキーもその數年前に柴達木を通過して野馬のある話を書いて居るが、氏自身では入手し得なかつたらしいので、所謂「野生駱駝」の記事に比べるとずっと短く書き書いて居ない。此の野馬は肩高十手尺乃至十二手尺(一手尺は約四吋)の小馬で尾も付け根に



第十四圖 蒙古野馬

は長毛がなく、鬣は逆立ち、頭は體と比較的にいへば大い。額垂毛はない。フランス舊石器時代の洞窟の彫畫の馬によく似て居るので、昔はもつと分布の廣かつたものに相違ない。北歐の小馬には此の系統がつながつて居るらしいし、蒙古や朝鮮の馬も此の系統のものであらう。日本石器時代の馬もやはり小さな馬だつた事が齒でわかる。アラビヤ馬の系統は別であらうといはれる。蒙古野馬の體色は、個體趨異はあるが、まあや、赭色を帯びた暗褐色で、鬣と尾と足首とは黒く、吻は白い。下毛もあり、冬毛は夏毛より大部多くて長い事も見られて居る。雪をかきわけて下の草を食ふ習性をも持つて居るのであるが、南米の雪のないバンバスの野生化馬を、フオークランドに移して野生化させると、此の習性が復活する相である（牛は同様にしても、雪をかきわけて下の草を食ふ習性を示さない

ので雪が永く續くと餓死するといふ。

チベット人がキャンと呼ぶものは、まあチベット野生驢馬と做されるもので學名

では *Equus hemionus kiang* と呼ばれ、肢脈



第十五圖 キャン

前肢にのみあり、尾の長毛が尾端にのみある點は驢馬に入れられるべきであるが、耳もアフリカの野生驢馬よりは短く、蹄もやゝ廣い。體は細いが、肩高は蒙古野馬より高くて十三手尺もある。鳴聲も驢と馬との中間的である。チベットの荒野に居るので、食物は草食といふよりもむしろ木食である。蒙古やトルキスタンの沙漠乃至荒原にも之れにごく近似したものが居り、蒙古人はチゲタイと呼ぶ相であるが、學名は *Equus hemionus hemionus* とはされる。つまりキャンと同種で亞種を異にする丈である。

支那では昔から母馬と父驢との間の雑種をつくつて騾と稱して力役に用ゐるもので伯樂といふのは主として騾の醫者だつたのだといはれるが、馬が小さいので、それに比べると騾の方が大きくて強かつた事は確かであるから、もつともな事だつたのである。たゞ騾は生殖力がないのである。

第五章 支那の偶蹄類

之れは御承知の様に、牛の類、山羊や羊の類、羚羊類、鹿類、駱駝類、猪類等を含むので、支那には日本よりは随分澤山の野生種が居るので、少し各類に分けて述べようと思ふ。

一、牛 亞科

化石としては蒙古から始原野牛も出て居るが、現在棲息して居るものとして面白いのは先づヤク（犛牛）(*Phoepagus grunniens* L.) (第三圖)である。之れはチベットの雪線近い高原に群棲し、胴が長くて肋骨が十四對ある點でも普通の牛と分けられるが、喉、胸、腹の下面の毛が長く垂れ下つて、雪上や氷つた岩に坐る時には下敷きの役に立つ。短い肢も此の内に折り曲げられる。冬の河を渡ると此の腹面の毛に氷柱が下がる相である。尾の毛も長くて上品なので拂子や蠟拂ひにされる。中

中銃獵し難い様に述べて居る人もあるけれどもプルツェワルスキーは何頭も射ち止めた記事を面白く書いて居る。肉も至極上等で、皮や毛は人の保温具や天幕に用ゐ



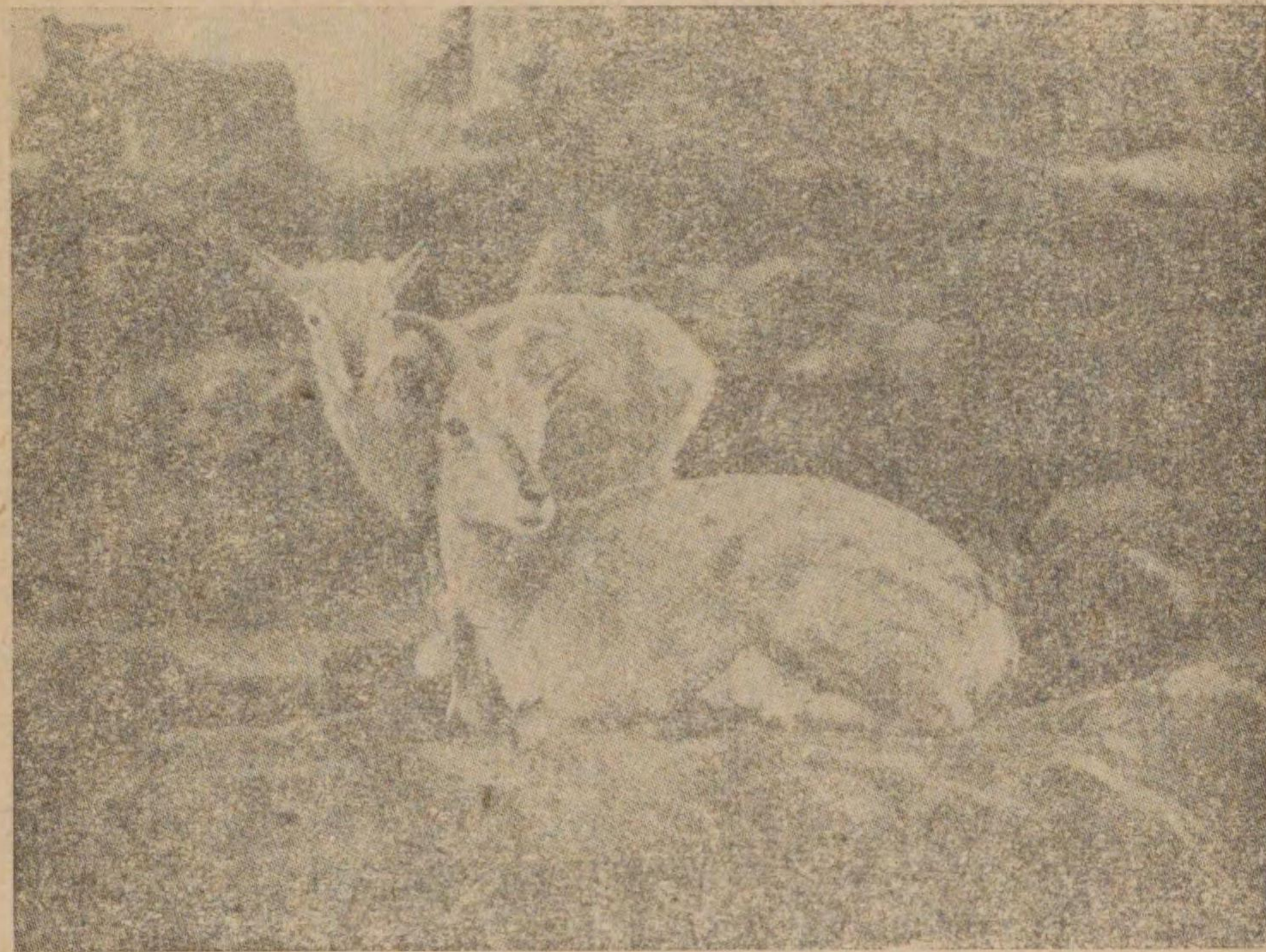
第十六圖 盤羊

られ、糞も干して薪用にされ、力強くて山路の行進が上手なので、住民は之を飼つて勞役用にもして居る。唯人が乗つて山路をゆくには、海で小船に乗つた時の様にゆれるのが馴れないと困る相である。之の毛でなつた繩は極めて丈夫な相だがさもあるべく思はれる。

二、山羊 亞科

盤羊 (アルガリ) (*Ovis ammon davidi* Przewalski) は角の著しく大きな羊で、角は先端

は丸いけれども、基部からかけて大部分は扁平で、渦の様に巻いて居る。頭胴長一米半、尾長一一〇耗で體色は夏毛は岱赭が、つて居るが冬毛は濃褐色味が勝つて居



第十七圖 エセヒツジ

る。北米西部ロッキーマウンテン山地の大角羊も之れに比べれば一寸法師の様なものだとアンドリュウスは述べて居る。昔は蒙古東境のドライ湖邊の山や山東にも居たらしいのであるが、今は蒙古の歸化城に近い山西省北部の山々に圍まれて匪賊と共に餘喘を保つて居り、之とて次第に亡ぼされて仕舞ふだらうといふ。それは狩獵家の最大のトロフイーとされて居るからで、何しろ鋸の齒の様な裸の山崖に登攀の出來ぬ者には射てぬので、狩獵家の冒險心をそゝること多大なのであ

る。勿論谷間の草を食ひに降りもするわけであるが、斷崖の上にローマの武士の様に首を眞直に立てたこの羊の姿はふるひつく様な感じを與へるらしいのである。山西北部から斜に北西にアルタイに續く地帯の岩山には未だ小群は見出されるであらう。十月頃が交尾期で牡ははげしく争闘し、五月頃仔が生れる。

なほ羊ではあるが、顔面腺のないエセヒツジ (*Pseudis nayaur sichuanensis* R. Thschild) が、ネパールからチベット、四川、陝西、甘肅、南蒙に産するし、シベリアヤギ (*Capra sibirica*) が、アルタイ山脈まで南下して來て居る。

三、青羊 亞科

日本語でいへばカモシカ亞科と言つてもよいのであるが、漢字の羚羊は此の次の亞科に屬するもので、日本のカモシカの類をば漢字では山羊とか青羊とか書いてあるから、漢字としては青羊を採用する事にする。つまり羚羊の様に體が細くて肢の長い類ではなくて、羊、山羊の類と羚羊との中間的な形をした類である。角は羚羊では牝には無いが、羊や青羊では牛と同様、牝牝共に有るのである。



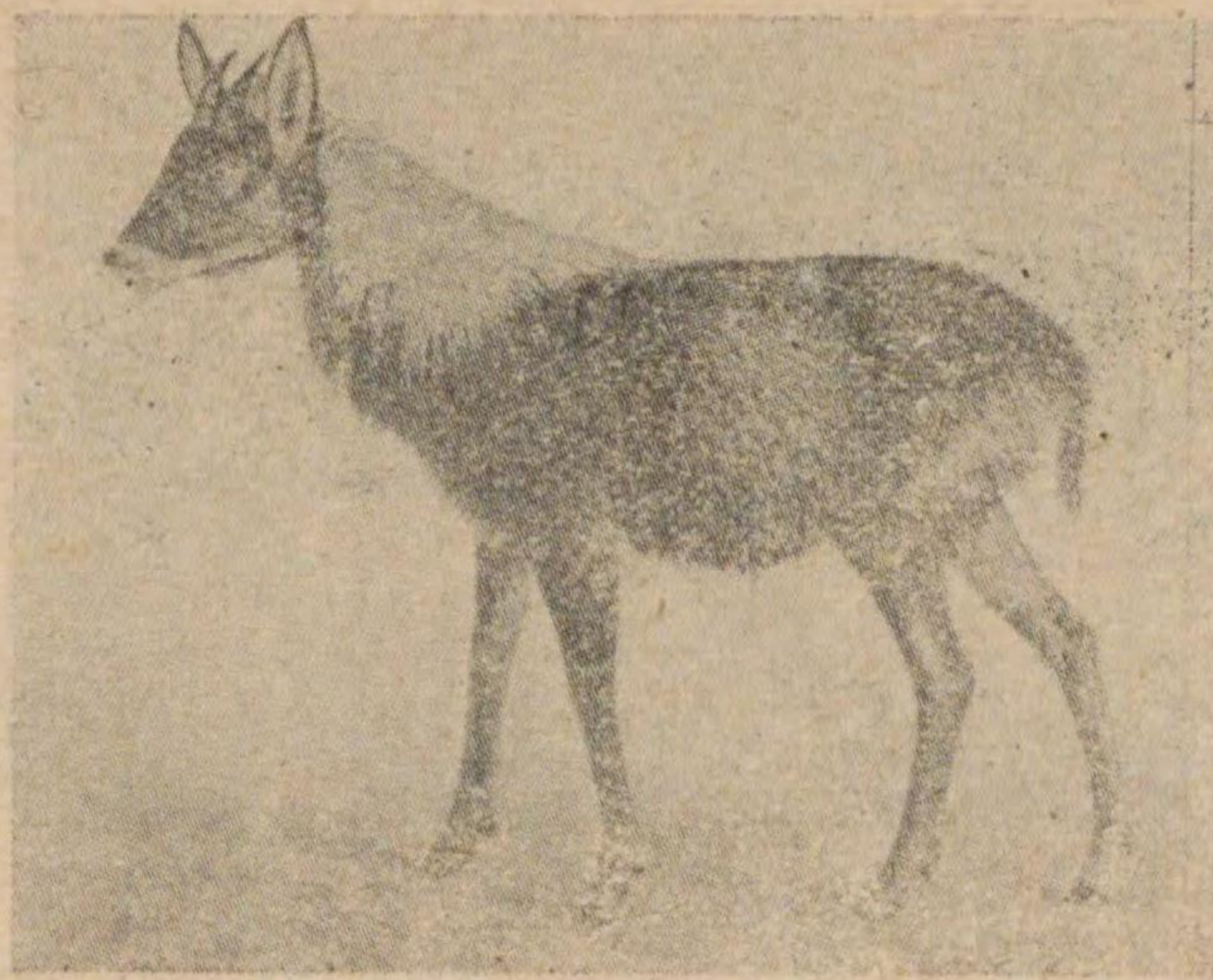
第十八圖 チベットタキン

タキン (*Budorcas*) はカモシカに比べると角が扁平で先づ水平に外方に曲つてから後方に曲る點が異ふが、角の色は黒く、形も餘程カモシカに似て居る。チベット、西康省に産するのをチベットタキン (*B. taxicolor tibetana* M.-E.) とし、頭胴長一・一六米、肩高一米位。體色は褪褐色。陝西省のはキャウセイタキン (*B. taxicolor bedfordi* Thos.) としはれ、體色が一層淡い(秦嶺の産)。

カモシカの類は青羊といはれるが、黒い角が圓錐形で、横に向かずに上後方に向いて居るので前者とは一見して區別される。眼窩前腺の有る日本のカモシカの類は *Capricornis* 屬とされ、鮮滿のカモシカの様に眼窩前腺の無い方は *Nemorhaedus* 屬とされて居るが、支那にはどちらも産する。青羊又は山羊の名はどれにでも使はれる。

日本のカモシカと同屬のものとしては、支那から三亞種が報告されて居るが、皆

スマトラカモシカ (*C. sumatrensis*) と同種中に編入されてよき者である。一は四川省、甘肅省、雲南省に分布し、森林に囲まれた岩山といふか、岩山に囲まれた森林といふかに棲むもので、即ち朝や夕には森に降つて食事し、日中は断崖の上に現れ、岩屋根の下に眠るといつた生活をするのであつて、蹄が岩の壁をはさんで攀る様に出来て居る。頭胴一米半近く、尾長一一〇耗位で、背の色はま



第十九圖 クロカモシカ

黒い。肩の長い鬣毛は白味を混えた個體もある。ミルヌエドワーズカモシカ (*C. s. milne-edwardsii* David) と學者はよき。次は雲南省西北部の年中雪のある麗江山脈の九千尺乃至一萬三千尺の邊に棲むもので、體色がやゝ褐色がかつて居るし、額の正中線に黒線がないといふが、大體前亞種に似たものである。頭胴一米半尾長九〇耗内外。學者はタカネカモシカ (*C. s. montinu* Allen) とよき。も一つは

浙江省、福建省、廣東省の山に分布し、背の色は大體黒くて鬣状の長毛は灰白色である。クロカモシカ、學名は (*C. s. argyrotaetes* Heude) とよき。

鮮滿のカモシカの様に眼窩前腺の退化した屬に入るものも支那から三亞種報告されて居るが、これも皆同一種中の異亞種にすぎない。頭胴長は前屬より小さくて一米位で尾は比較的短くはば長くと



第二十圖 ホクシカモシカ

へるが、やはり一三〇耗内外のものが多し。一は河北省、山西省、陝西省等に分布するホクシカモシカ (*N. goral caudatus* M.E.) と、冬の下毛長く、體色は一樣に言へぬがまあ灰青色。次は、浙江省、福建省、廣東

省、湖北省の揚子江峽の断崖等に見出されるナンシカモシカ (*N. g. arnauxianus* Heude) で喉の色が白くなくて淡茶色であるとか冬毛が短くとかで區別されるにすぎない。も一つは雲南省、四川省に分布する *N. g. griseus* M.E. と、北方のもの

よりやゝ色が黒ずんで居るとか冬毛が短いかいふ區別にすぎない。

四、羚 羊 亞 科

前に述べた様に體も肢も細長で、角は牡丈に有つて牝には無いのである。角が角



第一一圖 家畜羚羊

鞘と骨心とから成る事は牛、羊、青羊等と同じであるが、支那の羚羊の角は竹の根の様に節が澤山有るので、角鞘と骨心とは容易に離し難いのである。飴色又は黒色の角鞘で、漢藥として高價なものである。

ジェレン（モウコレイヤウ蒙古羚羊）

(*Prodorcas gutturosa* Pallas) と蒙古人の呼ぶのは蒙古には最も普通の羚羊で、頭胴長一・二米内外、尾長一〇〇耗内外のもので、體色はまゝ茶褐色で眼窩前腺が有る。ゴビ沙漠の南、北、東などのへりの方に多いのはやゝ軟い草を嗜食するからで



第二十二圖 甲狀腺羚羊

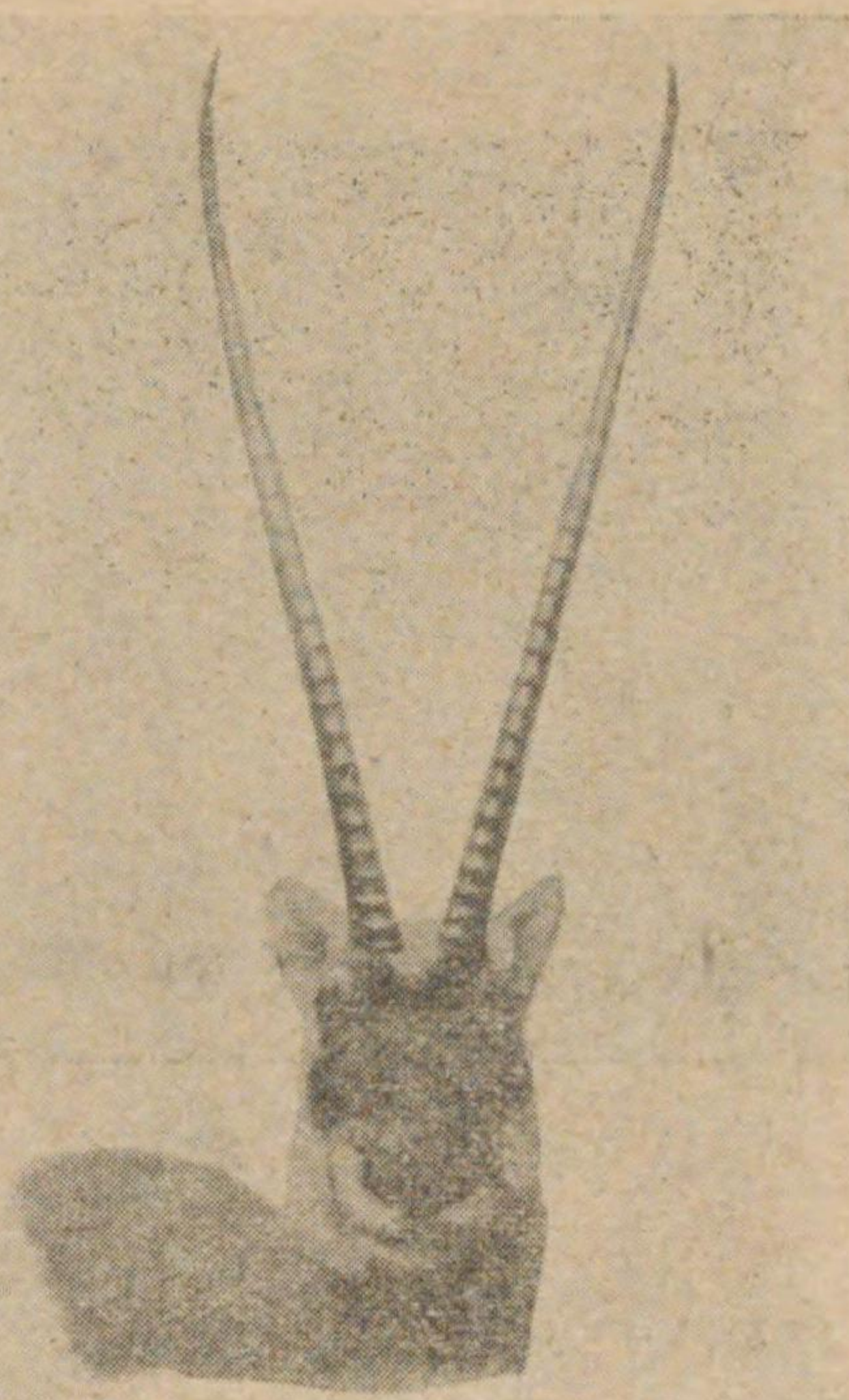
時に數百千以上が群をなして居るといふのも、草の未だ有る邊に棲むからである。短時間なら時速五十五哩から六十哩の速度でも駆け、三十哩（時速）なら何時間で

もつゝくらしい。アルタイにも之れの變種が棲む。チベット羚羊 (*Procapra picticaudata*) は眼窩前腺が無くて體色が暗灰色である點で前者と識別されるが、尾はやはり短い羚羊で、チベット人はゴアとよぶ。プルツェワルススキー羚羊 (*P. p. przewalski Buec'ner*) とよぶ之れの變種綏遠省のオルドス沙漠や寧夏省のアラシヤン沙漠に居る。

甲狀腺羚羊 (*Gazella subgutturosa hillieriana* Heude) と稱せられるものが、ゴビ沙漠の内部

の乾燥した部分、例へば、滂江と叻林との間のまづしい草原、アルタイ附近、寧夏省、青海省などに居る。甲狀腺の名を冠せられるのは喉がふくれて居るからで、そ

の點はジェレンと似て居るが、尾が明かに長くて、尾端の毛を除いても一二〇—一四〇耗あるし、體色も一層淡色である。六、七月頃仔を産む。あまり大群をなさぬのは食物の少ない處に棲む關係でもあらう。



第二十三圖 ホツヂソソ羊

なほブルツェワルスキーはチベット高原にオロンゴ(チル又はホヂソソ羊)(*Pantholops hodgsoni* Abel)といふ角の黒くてずつと長い、體が大きくて(肩高二尺六寸位)、淡色な吻端が一寸下に曲つたカモシカを述べて居り、チベット人は此の獸を神

聖視してラマ僧はその肉を食はず、血は藥とされ角は野に捨てる人の屍殊にラマ僧の屍の周圍に立てるので高價に取り引きされ、又表面にある節の數で運勢を占つたり、馬の鞭の柄にすると馬が疲れないとか色々信仰して居ると述べて居るし、ユツクがラッサから東方への旅中に聞いたセルウ(角端又の名獨角獸)といふのも之れ

の事でセルウ村といふ名の村まであつたと述べて居るが、アレソの「中亞調査記」に見えないのはチベットを支那以外と考へたのであらう。

五、鹿 科

鹿類にも、牡にも角の無い種類も有るけれども、多くの種類では牡にだけ角がある。馴鹿丈は牝牡共角がある。その角は牛科の者の角と異つて角鞘はなく、角筈といふ骨質が毎年皮膚に包まれて生長し(袋角)、夏に生長し切ると皮膚が剥げ落ちて角が露出するのである。そして鹿の角は又角であつて、分叉して居るが、その又の數や角の形状は種類によつて一様でない。枝の數が完成するには數年を要するが、毎年一枝を加へると然らざる種類とある。支那では鹿の袋角を鹿茸とか血角と稱して藥用にする事が大層はやり、シベリヤや滿洲の方からも輸入し、又特別に飼育した鹿の角はなほさら珍重するので、有利な事業として飼ふ人がある。大赤鹿の鹿茸は一斤五十圓以上もし、一頭の双角は百斤以上だといふ。支那には日本に比べると鹿の類の種類が極めて多いので、少し細分して述べる事にする。

麝 香 鹿

麝香鹿 (香麝、麝) (*Moschus moschiferus* L.) はシベリアのと同じ種類が、外蒙



第二十四圖 香 麝

からゴビ沙漠の東端の山々をつたつて内蒙に南下し、河北省西北部、山西省の山にも分布して居るし、チベットから四川省、雲南省西北部の山にも居る。牝牡とも角がなく、牡では上牙が長く彎曲して突出して居る。眼窩前腺の無い事、牛科の様に膽囊の有る事、又牡には辜丸と包莖との間にある包莖腺 (の變形物) と

做される麝香腺が有つて、高價な麝香が採れる。尾は無いと言ひ度い程短い (四〇耗位)。孤獨性で、高山の幽林、斷崖に棲む黒ずんだ色彩のものだが、幽かな白紋や條斑がほの見える。麝香腺を採る爲

めに追つかけてまはされるので、河北ではもう亡びたかも知れぬ。之れの變種 (*M. m. sifanicus* *Buccer*) が甘肅、陝西、四川、廣西、雲南、湖北の諸省の山に見られ



第二十五圖 牙 麝

る。之れは白斑の無いのを特徴とされるが、幼者にはある。體色は大體黃褐色である。頭胴長八四〇耗、尾長四〇耗、肩高五二五耗。

牙麝 (*Hydropotes inermis* Swinhoe) も

牡も角がなくて牡の上牙が彎曲して下方に突出して居る點は麝香鹿に似て居るが、他の鹿と同様に膽囊なく、眼窩前腺が有り、耳も麝香鹿の様に大きくない。鼠蹊腺の有るのは鹿類中で

牙齦だけである。體も麝香鹿より少し大きくて、頭胴長一米内外、尾長七〇耗内外で、肩高五〇〇耗内外。背の色は大體黄褐色である。此の鹿は楊子江沿岸の葦原に棲み、一時に五、六頭の仔を産むといふ變り者で、葦が刈り取られると岸の小山に逃げ、葦が生えた頃にまた歸つて来る。はじめ（一



第二十六圖 ナンシツノキバシカ

八七〇年) 鎮江の上流邊の楊子江中の島からスキンホーが報告したのであるが、其後、江蘇、安徽、浙江、湖北、湖南の沿江にも見出された。之れの變種 (*H. i. argyr pus*) が朝鮮に居る。

ツノキバシカ (毛冠鹿) (*Elaphodus cephalophus* M.E.) も支那特産ともいふべきものであつて、瘤の様な角が長毛の房に被はれて殆んど見えない位である。角柄の長い事はキヨンに似て居るが、但し此の

角柄はキヨンの様に下方前頭骨に隆起線を生ぜしめては居ない點が異ふ。牡の上牙はやはり口外に下方に突出して居る。四川省や雲南省北部に産し、黒ずんだチヨコ

レート色で冬には殆んど黒いと言つてもよい位。ライデッカーは湖北省のを之れの變種としてギショウツノキバシカ (*E. c. ichangensis*) と命名したが、尾端三分の一が背面も白いといふ點を特徴として力説して居るが、さうでない個體も獲れる。頭胴長一・一米位、尾長七〇耗、肩高七二〇耗。もつと東の浙江省、江西省、福建省、廣東省のものはナンシツノキバシカ (*E. c. michianus* Swin'oe) としつゝ變種とされて居るが、之れは西支那高原のものより體も小さく、體色も淡くて灰黒色であり、蹄の上に白毛の狭帯がある。湖北のは色も大きさも中間的なので或は皆個體趨異にすぎないかも知れぬのである。

キヨン (羌) 屬 (*Mutiacus*) は分布の廣いもので、印度もセイロン島まで、ビルマ、マライ半島、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、シヤム、佛印、臺灣にまで居る位であるから、勿論支那にも可なり廣く分布して居り、四亞種に識別されて居る。皆角は小さくて二先であるが、前枝はことに小さい。併し角柄は長くて其の下方は前頭骨に隆起線を生ぜしめて居るので、外から見ても額に左右の隆起線が走つて居る。體は毛冠鹿より小さくて頭胴長八、九百耗からせいぜい一米餘、尾長一二〇耗

位と言つた様なものである。

雲南省の羴 (*Muntiacus muntjak vaginalis* Boddaert) は大きい方で背の色は橙紅色。海南島の羴 (*M. m. nigripes* Allen) は小形で肢下部が黒味がかつて居る。四川、廣西、湖南、江西から浙江の周邊、湖北、安徽の南部、福建、廣東の北部といふ地方に居る羴は南支羴 (*M. m. reevesi* Ogilby) と稱せられ臺灣のに近いもので、背の色濃くて殆んど一樣に赤褐色で、肢は下部にゆく程黒ずんで居る。浙江省の寧波の邊の羴は、暗黒色であるといふので暗色羴 (*M. m. crinifrons* Sclater) といふ變種とされて居る。大さも之れはキヨン屬中最大といはれるもので、頭胴長一・二米、尾長一七〇耗、肩高二尺に達するものもあるが、個體数は少ないものらしく、獲れた記録は數例にすぎない。

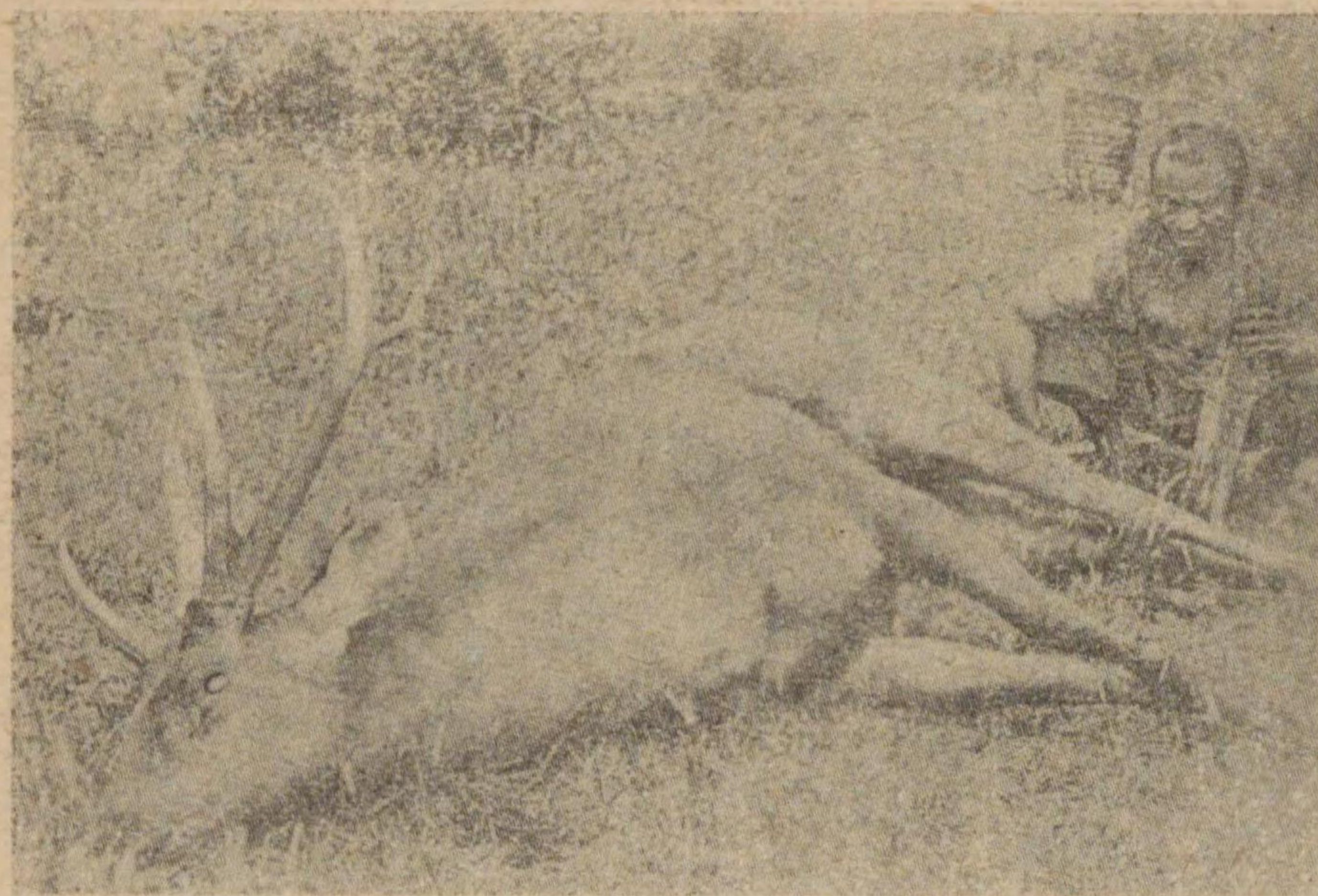
羴 (羴) (ノロ) (*Capreolus*) は牡の頭頂に幾垂直に短し三先の角があるが、體は羚羊の様に輕快な形のもので、體色も赤味掛つて居る。歐洲からシベリア、鮮滿にも居るものであるが、支那にもゴビ沙漠の東邊をめぐつて南下し、河北、山西、陝西、甘肅から四川の北部にまで分布して居る。之れの袋角も、支那では藥用にす



第二十七圖 ノロ (羴)

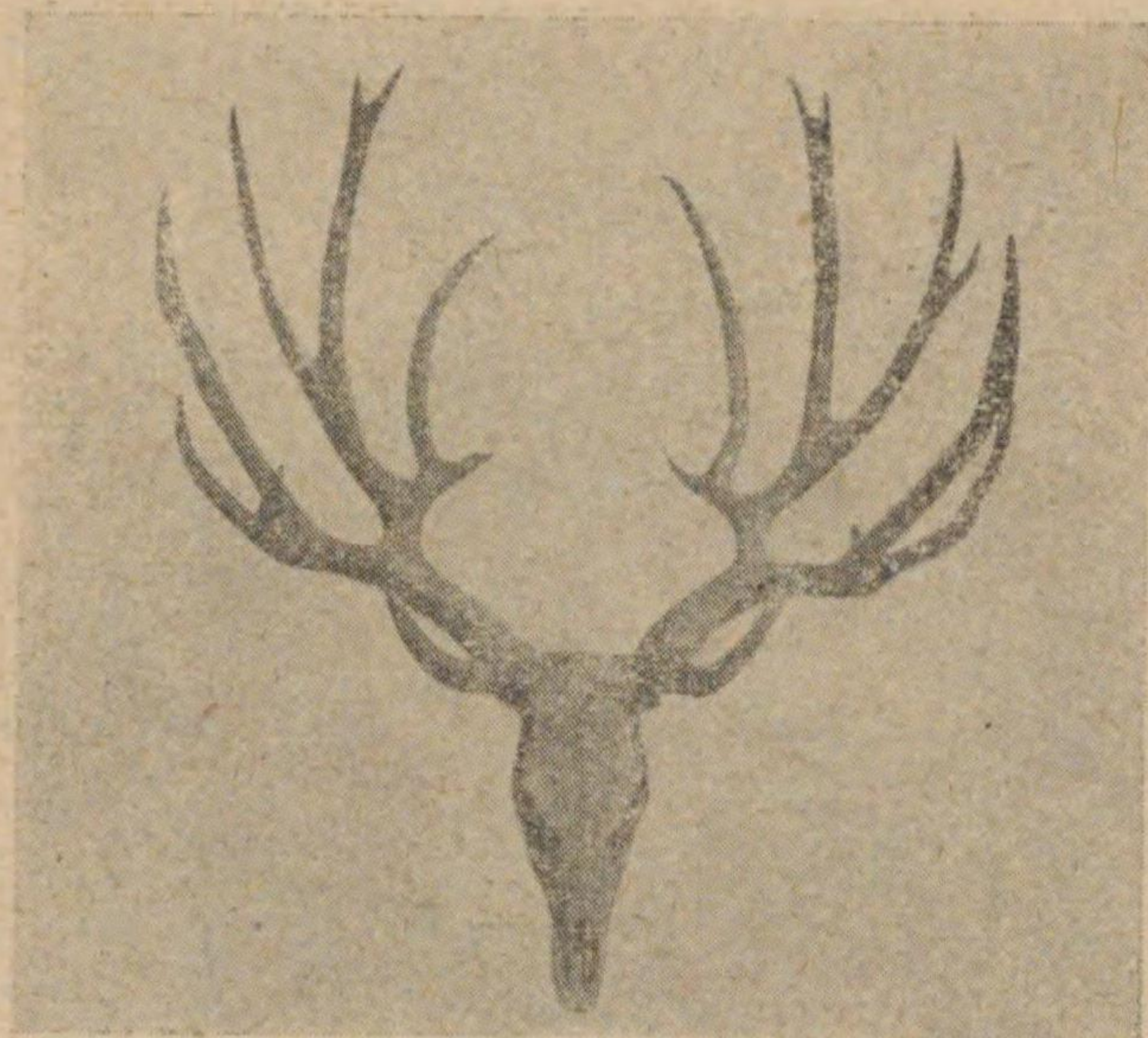
る相である。支那の羴はホクシノロ (*Capreolus bedfordi* Thomas) と呼ばれるもので歐洲のよりやゝ大きい方で夏と冬の體色の差も歐洲の程著しくなく、唇に暗色斑もない。頭胴長一米餘、尾長四〇耗位、肩高二尺三寸内外である。滿洲北部、東部から朝鮮北部にかけては此の外に、オホノロ (*C. pygargus* Pallas) も棲ぶ。

水鹿 (*Rusa unicolor*) は南アジアに廣く分布するもので、印度、ビルマ、マライ半島、マライ諸島、シヤム、佛印、臺灣等にも分布して居る類で、支那にも居る。體は臀にさへ白斑がなく



第二十八圖 水鹿

て、即ち單褐色で角は大きい三先きりな
し。眉枝は前上方に伸びて居る。支那の水
鹿は學名を *R. u. dejeani* P. usargues と呼
ばれ、頭胴長一米餘、肩高も亦一米餘で、
雲南省、四川省、廣西省、廣東省、海南島
等に産する。なほ海南島には、角が扁平で
眉枝は短くて前上方に向いて居るが、後上
方に長大な枝が伸びて、それがまた數本の
枝を出して居る所の赤味がかつたヒラッソ
シカ (*Rucervus p. atyceros hainanus* Thom-
as) (第五圖) とよふ鹿も居るが、佛印、シ
ヤムの方の系統のものである。なほ、シヤ
ム系の ションブルクシカ (*Rucervus schom-
burgki* Blyth) とよふ、角が九乃至十先も有



第二十九圖 シオンブルクシカ

る、肩高三呎九吋位の鹿も雲南のビルマ境でとれたといふ一例が有る。

以下に述べる鹿類は少なくとも臀に白い部分が有つて、群をなして行動する時に
は認識色の役にも立つ事であらう。角の眉枝
は垂直や前上方やには向はずに前方に寝て居る
所の所謂 *Cervus* 屬のものであり、之れがま
た中々多種なのである。

四不像 (麋鹿) (*David's deer*) (*Elaphurus
davidiana* M.E.) は野生としては亡びてから
數千年にもなると言はれるものだが、一八九
四年、即ち日清戦争の頃までは北京の南苑に
澤山飼はれて居つたので、一八六五年ダビッ
ドによつてフランスに標品が持ち込まれ、一

八六六年にミルヌエドワーツによつて報告されたものである。四不像といふ名の起
りは蹄は牛に似て居るが牛でもない、頭は馬に似て居るが馬でもない、胴體は驢に

似て居るが驢でもない、角は鹿に似て居るが鹿でもないといふのから出た名であるが、體は小牛程あり、尾が長いのみでなく、角丈見ても一寸馴鹿のに似た様な妙な



第三十圖 四不像

角で、眉枝が垂直に上方に伸びて、後軸の方が後方に殆水平近く寝て居て、兩軸に共に枝が有る。故

渡瀬先生が千葉縣から之れの角の化石を得たものと、近年山西の殷墟の發掘物中に之れの角が有つた

九〇七年にはベッドフォード侯の苑に三十餘頭生き残つて居たにすぎないといふ妙な鹿である。今は之れも亡びたかも知れない。麋鹿といふ漢語を此の鹿に當てる人もあるし、四不像是馴鹿の事で本種の名ではないといふ人もある。漢人は分類して使つたのではないかも知れない。



第三十一圖 クチジロシカ

も一人によつては以下に述べる鹿類と別屬ともする變つた鹿はチベットや青海、甘肅等の山に居る唇の白、毛の荒い、耳の長くて尖つた、蹄の廣くて高い鹿で、クチジロシカ (*Cervus alirostris* Przewalski) とははれ、頭胴長六尺、肩高四尺二寸位の大きな鹿である。

サンセイオホアカシカ (山西大赤鹿) (*Cervus elaphus kansuensis* Pocock) 山西土民は馬鹿といふ相だが、之れは日本の鹿に比べると巨人の様な大きなもので、全長六尺二寸、肩高四尺八寸といふ。赤褐色で、臀は白といふより黄に近いもので、角

も各五先以上ある大きな角で有る。此の角の枝は歐洲の赤鹿での研究によると生れた年には勿論無角、二年目には無枝角だが、三年目から毎年一枝づゝ加ははるのだから、日本の鹿とは違ふので、七年で角が完成するわけである。アンドリウスは鹿



第三十二圖 サンセイオホアカシカ(馬鹿)

は森林の動物であるのに山西の北部では叢林もない草の峡谷や裸山にも居ると言つて驚いて居る。甘肅省の方まで分布して居る。シベリヤや滿洲や北蒙の樅、樺、橡等の森に居る之れと同種の中の一變種マンシウアカシカ (*Cervus elaphus xanthopygus* M.E.) は色は歐洲の赤鹿に似て居るが角は北米のワピテイに似て居るといふので、ライデッカーをはじめ北米のワピテイ (*C. canadensis*) の變種と做す人も多いけれども、北米のはもつと大きな者で、近來はアレンをはじめ歐洲赤鹿の變種と做す人が多くなつて來た。併し元々北米のワピテイはアジアか

ら由來したものなる事は皆認めて居るのであるから、北支の赤鹿が中間的である事は趣異の法則上むしろ當然な事であらう。鹿茸を取る材料とされる。

チベットの四川省との境の海拔一萬二千尺位の邊には、白鹿 (*Cervus macneilli* Lydekker) といはれる淡色の大きな鹿が居る。夏毛も冬毛も毛色淡灰色で、肢の内側は純白である。角は赤鹿と殆んど同じで體の大きさもやゝ小さい位にすぎぬ。ポコックは甘肅省邊の山西赤鹿に似て居る事を暗示して居るが、ライデッカーの様にヒマラヤ地方の鹿の或物例へば *C. cashmirus* に比較をとつて、似て居るといふ人も有る。

日本鹿の變種が支那の諸所に居る事も面白い。此の類は朝鮮にも、滿洲にも變種 (*Cervus (Sika) nippon m. ntc. uricus* Swinhoe) が居るので不思議はないが、系統上からいへば大陸のが原種で日本に入つて變種が生じたものであらうのに、學名の上では日本のが先に研究發表されたので、日本のが原種になつて大陸のが變種とされるわけなのである。此等の鹿(麋を之れに當るといふ人も有る)は中等大で、夏毛では白い斑點が全身的に有り、冬毛では斑點が殆んど目立たなくなる。ライデッカー

これは此の現象を（印度や）臺灣の華鹿の様に年中白斑のはつきりして居る現象に比較して、白斑のある方が樹葉の間では保護色になるので、年中葉の有る亞熱帯の冬



第三十三圖 熱河鹿

では年中白斑が有り、冬に落葉する日本や北、中支では冬は斑點がない方が保護色になるので美妙な適應だと言つて居るが、生理的機構は別によく研究しなければならぬ問題である。角は四先である。奈良の鹿で調べた所では五年目に眉枝が加はり、六年目と八年目に又枝が加つて角が完成するといふのであるが、もつと研究の要がある様である。支那で薬用に供する袋角（鹿茸）は此の類のが多い相であるが、野生のでは駄目で、

特殊の餌で飼つた者のを貴ぶなどと勿體をつけて居る人もある。扱支那の此の種の鹿の學名は、北京東北地方のは熱河鹿（*C. nippon mandarinus* M.E.）や背筋の黒條と白斑が目立ち、山西省のは山西鹿（*C. n. grassianus* Heude）や、淡色で、頭胴長五尺、尾長七寸、肩高三尺五寸弱。中南支の江蘇、安徽、浙江、江西などのは中支鹿（*C. m. kop chi Swinhoe*）や、背筋の黒條不顯著で、肩高二尺八寸位である。

終りに東西兩半球の北部に分布して居る鹿類中の巨人オホシカ、英語ではムースとかエクルとか呼ばれる鹿の變種（蒙古のは駝鹿 *C. alces cameloides* M.E.、滿洲の興安嶺西部のは *C. a. yakutskensis* Sowerby）が蒙古や西滿の北部に居る。支那語では駝鹿と書いて居る。此等の鹿は角は扁平で銀杏の葉の様に廣がり、葉の縁に十數個の突起が出て居る。吻は廣く、喉には皮垂があり、頸は短くて膝を折らなければ草は食へない様な形なので、樹葉、樹枝を食ふが、又水中に喜んで入り水草をも食ふ。それで山中の森林で且つ水に沿うた様な處に棲むので、戈壁沙漠に分布がさまたげられ、蒙古では庫倫の北六十哩位の邊までさり南下して居ない。昔は北京の近處にも居たものだ相だがそれは戈壁の東を南下したものであらう。

附

一寸見た所では上牙が下方に突出して牝牡共角がないが、形が角のない鹿に似て居て小さいので、豆鹿科とか麋鹿科とかいはれる *Tragulidae* は、印度やマライの方には數種産するのであるが、支那の領内までは入つて居ないらしく、報告がない。(海南島に居るといふスキンホーの報告は誤りとされた)。此の豆鹿科は胃は皺胃を缺いて三室であるし、肢には四本の指(趾)が指趾骨までも發達良好な事などで鹿科とは區別せられて豆鹿科とせられて居るのである。

六、駱 駝 科

ゴビ其他の沙漠を旅行したり荷を運んだりするのに沙漠の舟として役立つて居る二峯駱駝 (*Camelus bactrianus* L.) は五月末から十一月頃までは野に放つて、冬に再び集めて使ふのだ相で、野生化する機會も多かるべき事は争はれない。

プルツエワルスキー(一八七五年)は青海省の柴達木の邊に、飼育駱駝よりも小さい野生駱駝の居る事を長々と述べて居る。其他にも支那西北に野生駱駝の居る

事を主張して居る人も有るけれども、何分駱駝の使用は古エジプト時代からはじまつて居る證が有るのであるから、十九世紀の支那人が、知らない前からの野生だと言つた所で、野生化したものだとの説をくつがへす有力な論據ともなり得ないわけで、今日の大勢は所謂野生駱駝も實は野生化したものに過ぎぬだらうといふ方に傾いて居る。使用駱駝は去勢して使ふ相で、去勢しない牡は十二月の生殖期には何にでも突撃する相である。又春に冬毛が脱け落ちるのは夏毛の生える前に行はれるので二十日間位は毛を刈つた様に全身裸になる相である。駱駝の武器は、敵に鼻や口から汚ない物を吹き掛ける事だといふ。

七、野 猪 科

野猪の分類は中々混雜して居る。ピアは涙骨の眼窩縁の高さに比して同骨の下縁が著しく長いのを *S. scrofa* 系とし、兩縁の長さが略々等しいのを *S. vittatus* 系として居りウエーバーも此の法を採用して居る。其の標準に依ると日本内地のも朝鮮のも臺灣のも *vittatus* 系のものになるのであるが、アレンは支那のを皆 *scrofa* 系

に入れて居るのは果して此の標準によつたのか否かわからない。野猪は百合の球莖とか芍薬の球根とかを食ふ者であるから、若し支那の北方から入つたものとするとかゴビ沙漠の東方を経て南下したものと考へなければならず、さうすれば満洲の野猪と同系と考へられるのであるが、朝鮮と満洲とで系統が異ふとすると其所に疑問をはいひ餘地があるのである。大きさはウラジオや満洲の野猪 *Sus ussuricus* Allen が日本や朝鮮のより大きい事はいへるのだけでも、暫くアレンを信用すると支那には *Sus scrofa* の次の三變種が居る事になる。一は蒙古野猪 (*Sus scrofa raddaana* Adlerberg) で、庫倫の北方のケンタイ山脈邊のもので、體色や、淡く、日本の猪の様に口角から喉にかけて白鬚帯がある。頭骨で比べると朝鮮のより少し大きい丈である。二は四川、甘肅から東方北支にかけて、陝西、山西、河北に分布する北支野猪 (*S. s. moupinensis* M.E.) で、頭骨で見ると、蒙古野猪位の者である。之れも體色は南支のものより淡色で、南支のには殆んど見ない下毛も豊富に有る。三は南支野猪 (*S. s. chirodonta* Heude) で、大きさは北支のと同じ位のから朝鮮のより小さい者迄色々ある。體色は北方のより暗色で、夏には下毛なく、冬にも下毛は少ない。

牙の大きさも北支のより小であるとソワビーは述べて居る。之れは湖北、安徽、江蘇以南、浙江、湖南、廣東、廣西の諸省、海南島にも居る。

第六章 支那の食肉類

一、猫 科

猫科は食肉獸の見本の様な體をして居る類で、爪は起伏自在で、指趾の裏にも掌(蹠)の裏にも肉疣が有つて音もなく敵に忍び寄るに便利になつて居るし、體も比較的短くて敏活に運動し得るし、顎が短いので齒に強く力が入り得るし、齒の數は犬などより少ないけれども、肉齒がよく發達して居り、舌の絲狀乳頭は鈎の様に曲つて居て骨から肉を甜め取るのに適し、又目の瞳孔は光の強弱に應じて丸くも細くもなつて視るに適する様な光の量が目に入る様に調節し得る。嗅覺丈は犬の類に及ばないであらう。

虎 (Felis (Panther) tigris) は昔から支那の猛獸中最も有名なもので、食はれた話も多く、苛政虎よりも猛なり等といふ諺も有つた。虎はカスピ海の南の邊のシベリ



第三十四圖 滿 洲 虎

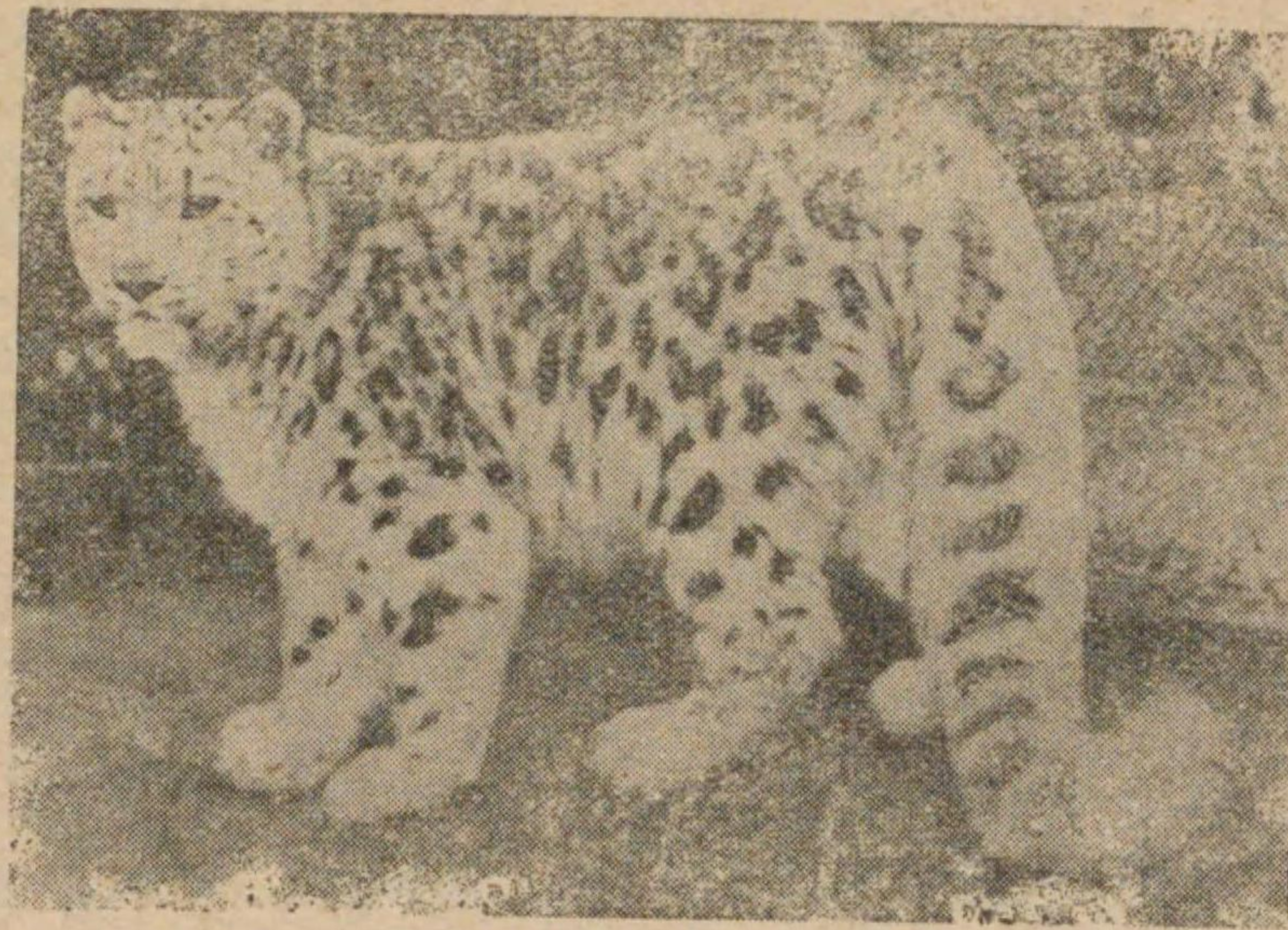
ア以南、東は滿洲、朝鮮にも居り、西はペルシャの一局部、エルブルツ以東、南はマライ半島からスマトラ、ジャワの島にまで居るが、セイロン島やボルネオには居ないので、印度やマライにた後になつて北方から南下して來たものだらうといふ説が出て居る。北方の者の方が體も大きく、毛も深く、色も濃く、黒い條斑が澤山有つて毛皮として貴ばれる。大きなものは頭胴長六尺半、尾長三尺といふ様なものも有つて、獅子よりやゝ胴が長い割合になる。力は獅子に劣らぬ位だが、性質がやゝの

ろいといはれる。人を食ふのは老衰して、逃げ足の速い他の獸を捕へ難くなつた虎とか又は偶然人を食つて、人の體力の弱い事を知つた虎、又は野生獸の少ない場所の虎に限るので、一般的ではないと言はれる。人に馴れて大人しくして居た虎の話は印度の虎にも有る。狩りをするには獅子より餘程怖しいとされ、徒歩で取り巻いて狩るとか徒手で斃したといふ様な話は殆んどない。扱支那の虎は二亞種あるといはれるが、一は滿洲虎 (F. t. amurensis Dode) で、滿洲の松花江、黒龍江沿ひの森林や熱河には未だ居る事が確で、ゴビの北方や甘肅の森にも居るが、河北省や北山西省の山地には残存するか否か疑問であると言ふ人もあるが、ソワービーは山西では一九三三年にも、南山西省新郷の北十二哩の山でもとれたといふ。此の虎は長毛で背では五糶もあり、美色且つ大形で頭胴長七尺、尾長三尺近いのもある。昔は揚子江の北岸地方まで次の亞種と共に分布して居つたものと思はれる。も一つはアマイトラ (南支虎) (F. t. amoyensis Hilsheimer) で、地色は前者より濃いが印度の虎より黄色を帯び毛が短く、頭胴長は五尺三、四寸、尾長二尺五寸位。印度の虎との區別ははつきり言ひつくせないといふ人もある。此の虎は未だく南支には可なり

廣く分布し、福建省の履門邊では十九世紀末に獲つた人が澤山有り、一九二五年にも五漣の海を隔てた履門島でも獲れて居る。同省安永でも同年、虎が人の小兒を奪ひ去つたといふ。浙江省でも少しは残存するかと思はれるが少なくなつた事は確である。廣東省でも少なくなつたが、北部の山には珍らしくなく、北東の川の邊では畏に毒矢を仕掛け、虎が疵所の矢毒を舂めて死ぬ様にするといふ。海南島にも居た。江蘇、安徽、廣西省にも居り、湖南省の西部、湖北省の宜昌のや、西の方は虎狩りの名所であるが、四川省にはあまり多く居ないらしい。雲南省には居るので南支の虎は印度の方からだんだん東進して入つた系統もある事は確かである。海峽も渡る位であるから揚子江も進入の絶對妨害とはいへないわけである。仔は冬に生れる (十二月の例もある) 相で、二疋の例も四疋、五疋の例もある。

豹 (文豹、金錢豹) (Felis (Panther) pardus) は虎よりもずつと分布の廣いもので、虎の居る上述の所には大抵居る外に、虎の居ないアフリカやアラビヤにも居るし、ボルネオやセイロン島にも居る。ヒマラヤやトルキスタンには居ないらしい。分布が廣いだけに變化も多く、大きなものになると尾もいれて八尺位のもあれば、小さな

のになると五尺位のも有る。その内尾長は半分程である。體表には所謂豹紋が有るが、胴では紋は、華の様に黒い斑點が花瓣狀に配列して居るが、頭の前や腹や肢では紋は黒點となつて居る傾向あり、尾では横縞をなして居るが、地の色や華紋の形等は一樣でないので、分類の一着眼點とされる。アフリカのはアジアのより紋が小さくて點狀のが多いし、又黒豹といふものもアフリカには見ないが、アジア熱帯殊にマライに多いといはれる。但し黒豹と言つても眞黒なのではなくて、大抵華紋はほのかに見えるものが多く、又一胞の仔の中に黒と普通のと混じて居る事も往々なので、種別とはされて居ないのである。虎も樹に昇らぬとはいへぬけれども、豹はもつと普通に樹上にも昇るので、食物も虎よりは廣く、自分より小形な獸なら何でも襲ふし、犬は殊に好物らしく、鳥や鳥の卵まで食ひ、又死肉をも食ふので、爪でかゝれると病菌を人に移殖する危険もある。支那の豹も一つは滿洲にも棲む種類で、ホクシヘウ（文豹、金錢豹）*Felis (Panther) pardus fontanieri* M.F. の名を有し、毛長く（冬毛四〇糎）、色は南支のより淡く黄味を帯び、豹紋は六乃至八列で、輪の中の地色は強烈で美しい。河北、江蘇、浙江、山西や陝西の山地か、甘肅省にも居



第三十五圖 雪豹

る。仔は二疋位づゝ生れるといふ。一つの豹はナンシヘウ (*F. (P.) p. fusca* Meyer) と呼ばれ、印度の豹と同じとされるもので、前種より小さく、豹紋が更に分裂して多數の點となつて居り、地の色は濃くて暗黄色を帯ぶ。四川省南部、雲南、廣東、福建等の山地からは色々獲れた報告がある。一腹の仔數は二頭が普通だといふ報告が多い。動物園では五疋の例も有る。姙期は九十日内外で、交尾期は晩冬早春。印度では二、三月頃仔が産れるといふ。

ユキヘウ（雪豹、艾葉皮、愛熱豹）(*Felis uncia* Schreb.) も大さは豹に劣らず、頭胴長一米餘、尾長一米弱位であるが、胴がもつと太り、斑點大きく寒地に棲むので毛深く、尾も太く見える。蹠裏にも毛がある。シ

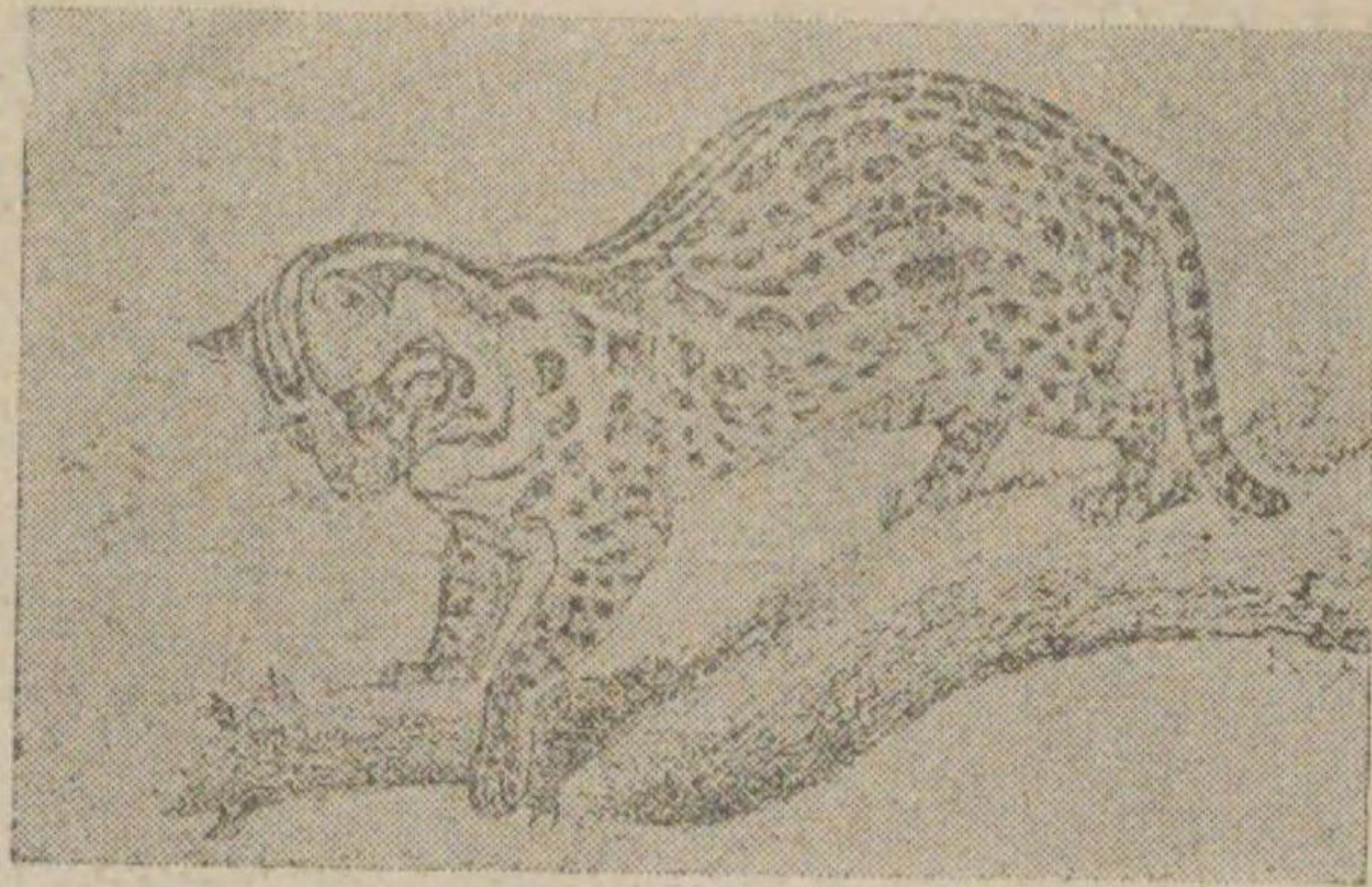
ベリヤ、滿洲、トルキスタン、ヒマラヤ、チベット等に棲み、一層樹上性で、餌獸の背に襲ひかゝる。艾葉豹とか愛熱豹とかいふ名もある。



第三十六圖 雲豹

ウンペウ(雲豹) (*Felis (Neofelis) diardi* Desmoulin) も豹紋を有し、豹に次ぐ大きさのものであるが、その紋斑は背では大きくて多角的でまぬ甲形で、肢が短いのは樹上生活に適するものであらう。マライ地方や臺灣にも居るもので、支那でも上海市場で見られ、海南島、廣東省、福建省にも少し居るといはれるが、多くはない事も確實らしいのである。

テミンク猫 (*Felis (Profelis) temminckii tristis* M.F.) はやはり可なり大きなもので、頭胴長七三〇耗乃至一米弱、尾長半米位のもので、體色は奇妙に二型あり、一型は全身単色で斑紋のないもので、他は條斑や點斑の有るものである。四川や雲南の森にも居るが、廣東省や福建省でも獲れた記録が少なくない。黃豹といふ支那名も

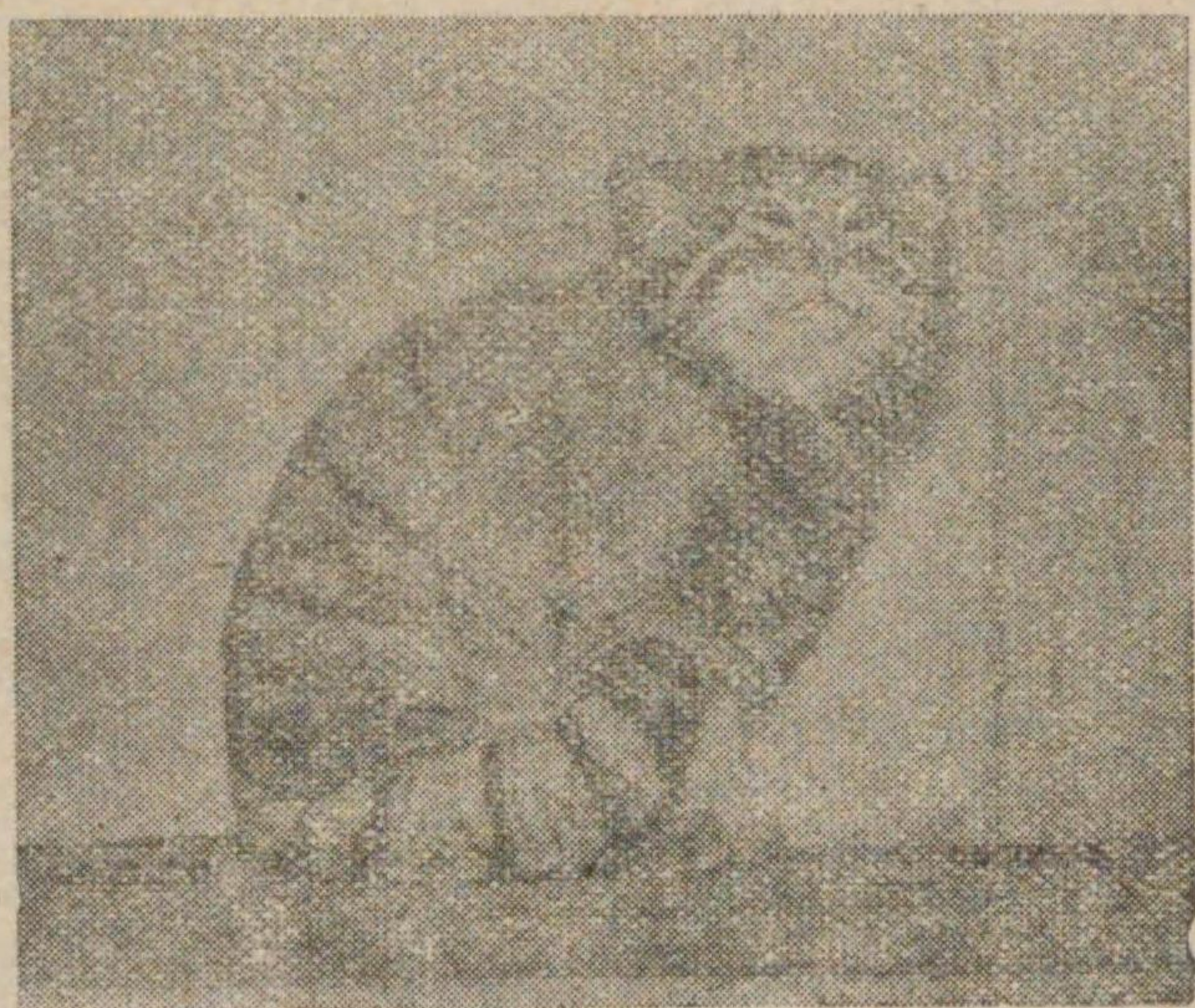


第三十七圖 ウンナンヤマネコ

ある。石虎といふ名を當てて居る人もあるが、之れは條斑の有る方が、次の種類 (*Felis bengalensis*) に似て居る爲めに混同して居るらしいのであつて、臺灣では次の種を石虎と言つて居る。

セキコ (石虎) (*Felis bengalensis*) も臺灣のは頭胴長六一〇—六六〇耗、尾長二八〇—三〇五耗となつて居り、支那のは頭胴長四四五—四八五耗、尾長二三〇—二五五耗といふ報告もある。もつと大きいのも居るのであらう。耳の背面に白斑が有り、體の斑紋は頭では條斑、胴では黒斑が條狀に配列して居るともいふべき複雑な紋様である。地色の赤味がかつたのをウンナンヤマネコ (*F. bengalensis* Kerr) とし、雲南省の西部から印度、マライに分布し、地色のもつと灰色がかつた褪色的な變種をシナヤマネコ (山狸子) *F. bengalensis chinensis* Gray と言つて、廣東省、海南島、福建省にも居つて金錢猫の名も有る。北は河北省や、オールド

ス、ゴビ等の沙漠の邊にまで稀ではないといふ。臺灣の石虎も此の亞種とする人も有る。滿、鮮、對島のヤマネコ (*F. microtis* M.E.) も此の系統に近き者である。



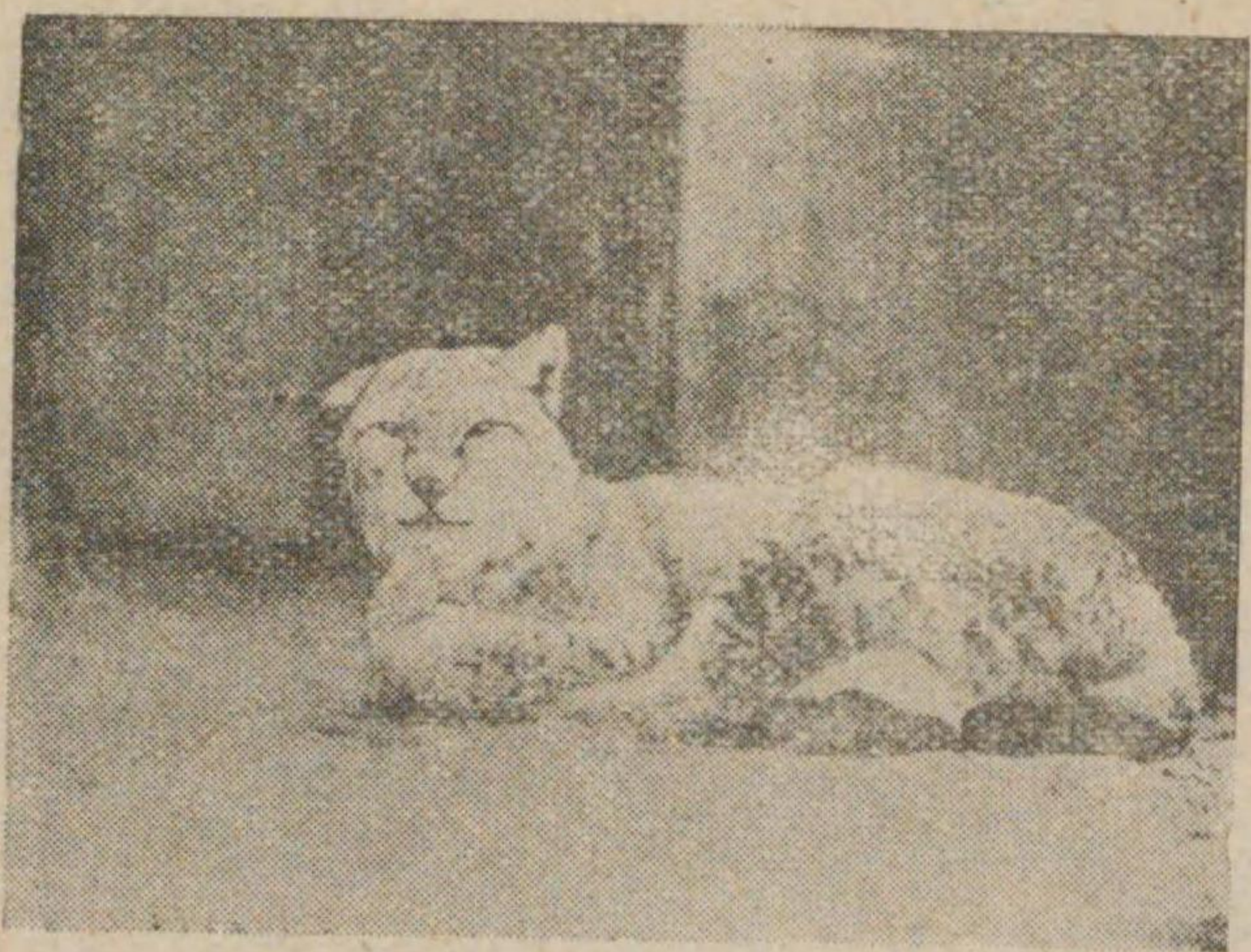
第三十八圖 モウコヤマネコ

スナイロネコ (*Felis bieti* M.E.) といふのは西康省の打箭爐 (康安) の邊や甘肅の荒原に棲む猫で、條斑も斑紋もない黄灰色で、頭胴長六〇〇耗—八四〇耗、尾長二三〇耗—三五〇耗位のものである。

上に述べた猫科のものでは齒式は $\frac{3.1.3.1}{3.1.2.1}$ (三十本) で上前臼齒が三對有るのであるが、モウコヤマネコ (キジネコ) (*Felis manul* Pallas) といふ猫では次に述べる猯類と同様に上前臼齒が二對丈である。大きさは家猫の大きなもの位

だが耳が著しく短くて丸く遠く隔つて對立する。背の後部には多少黒褐色の斜條がほの見えるけれどもまあ背面は淡茶色と言つてよろしい。兩眼の間に短い白線が

ある。興安嶺の西のダウリアからゴビ沙漠、甘肅、ズンガリア、西藏、河北省北部等の沙漠の縁に棲む。



第三十九圖 オホヤマネコ

の東陵にも居り、河北、山西から四川、チベット、雲南の森にも居るが、何處でもあまり多くはない。北方のは赤灰色である。

オホヤマネコ (猯類) (土豹) (*Lynx lynx* isajellina Blyth) は大きな體のもので、肢も太く長く、耳の先端には毛房が有り一見して他の猫類と識別されるものである。上前臼齒も二對丈である。此の類は東西兩半球の北部に分布し、樺太や滿洲や北鮮にも居るのであるが、支那の種類は上記の學名を有するものであつて、土豹などと言つて森林に棲むものであり、高い處から肢を伸ばしたまゝ飛跳び降りる有様は雄壯なものであつた。森のあるゴビ沙漠の北方にも居り、東に廻つて熱河

二、靈猫科 香猫科

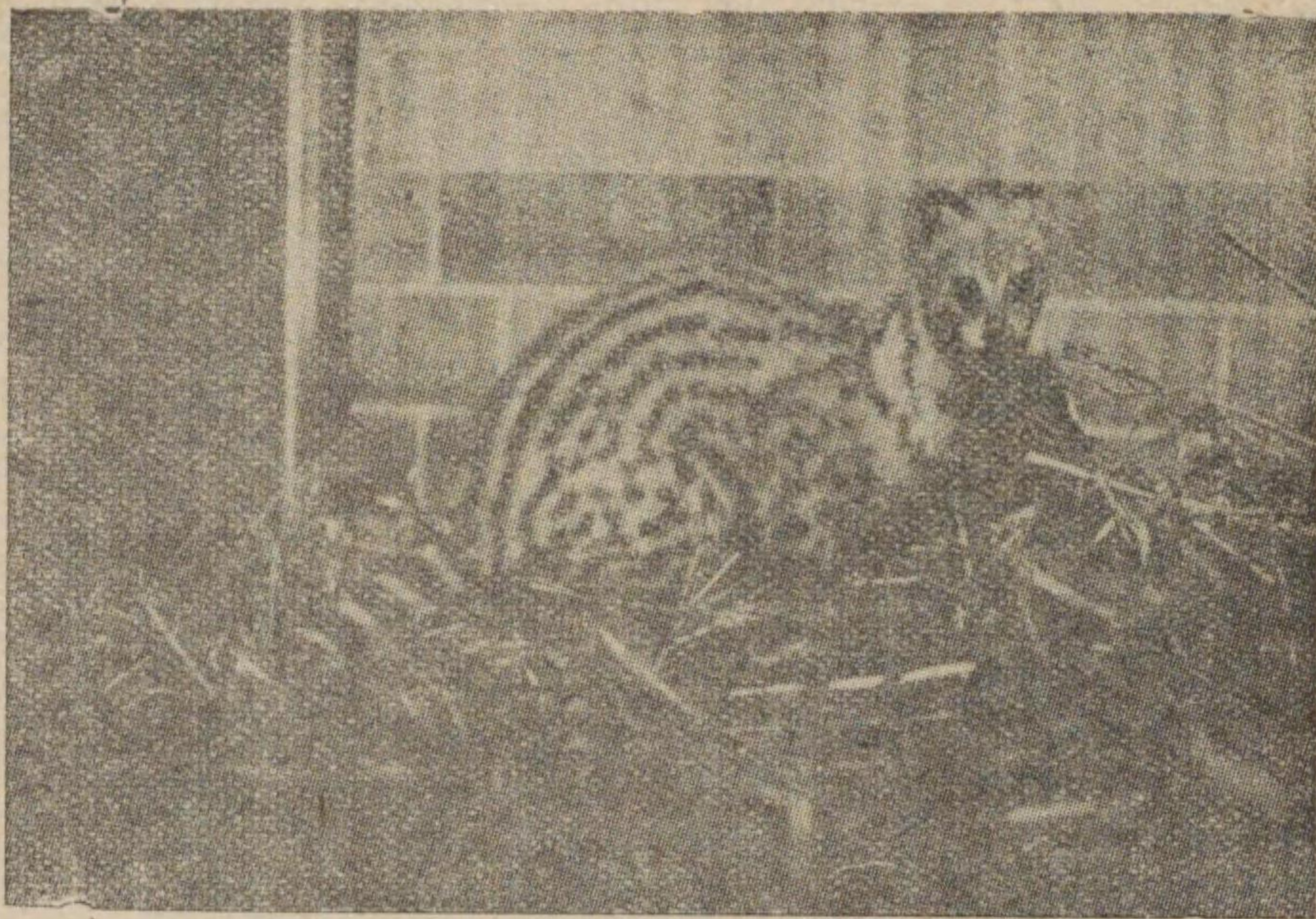
此の類は東半球の熱帯及亞熱帯に産するもので、まあ温帯や寒帯に於ける鼬科の代理の様な觀を呈してゐる。體も猫科より細長くて鼬類の形によく似た者も有り、大きさも家猫よりやゝ大きな種類から、鼠のやゝ大きな者位の種類まである。中には猫の様に爪が起伏したり、瞳孔の晝夜で變形する種類も有り、頭骨の鼓骨胞の構造も猫科と同じ様で、鼓骨と胞骨との會合部が胞腔内に壁狀に突入して居る。

麝香腺を有する麝香猫（靈猫）（*Viverra zibetha*）の變種シジャカウネロ（*V. z. ashtoni Swinhoe*）が支那にも産する。麝香腺は會陰腺（辜丸前腺）の變形物で、左右に分泌腺塊があり中央に分泌物の貯藏所があつて、その從裂孔から麝香がひり出される。靜かに放置して於けば十四乃至二十日目毎にひり出される。つまりたまつて來ると神経が刺戟されるものと見えて、石や樹にこすりつけるし、飼つてある場合には檻の格子にすりつける。人が取り集めるには體を棒に繫つて指を貯藏囊に突込んでまくりかへして押し出すのである。モルツカ諸島のブルの製品が最



第四十圖 シジャカウネロ（香猫）

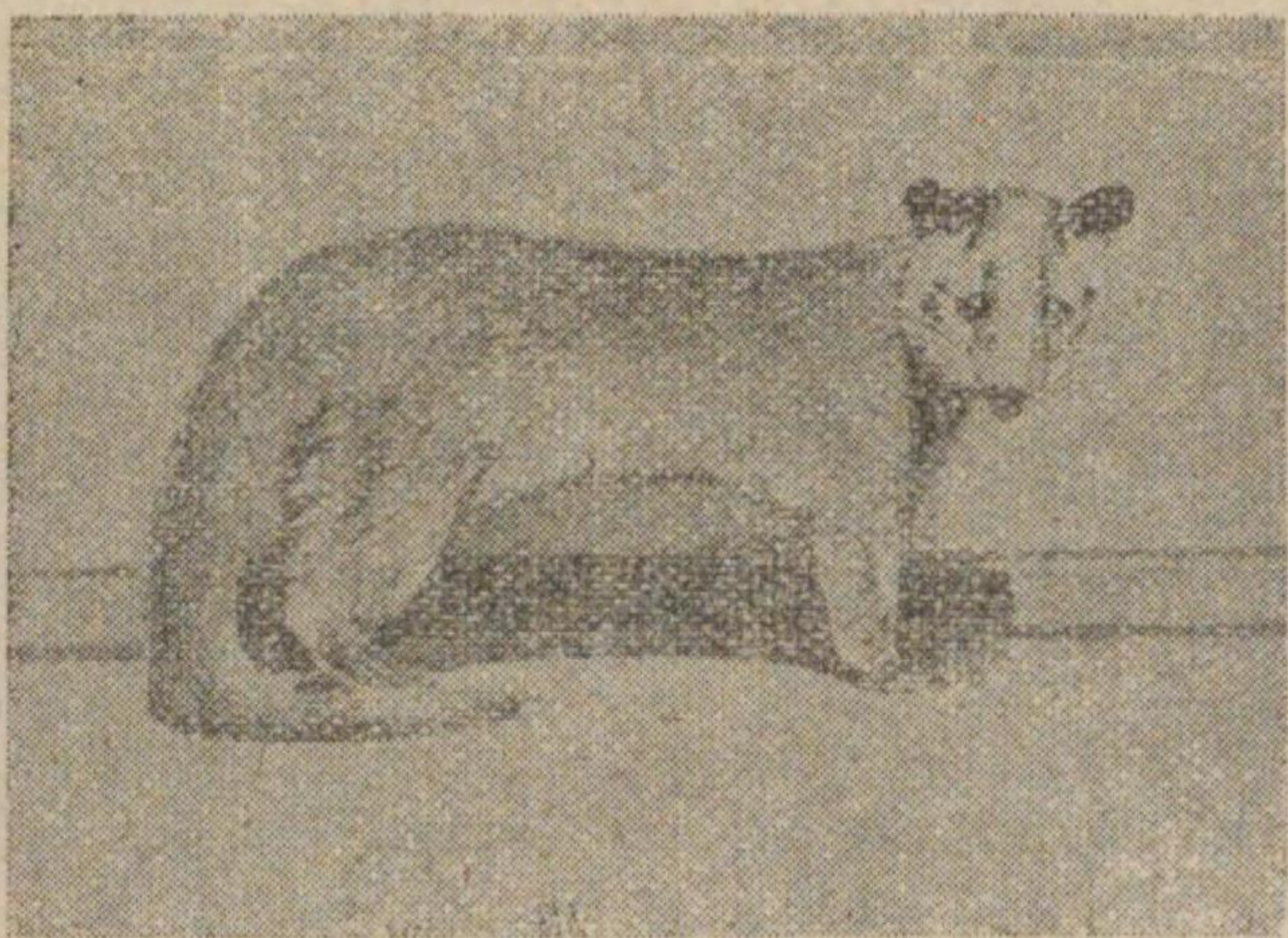
良とされ、シジャワのがその次とされるが、それは主として製法の如何によるのである。とても強すぎる香だといふ。體は家猫よりやゝ大きくてやゝ細く、尾には白黒の環紋あり、喉には白黒の波狀紋が有る。胴體にも斑點が澤山有る。支那では揚子江以南には方々に居り、浙江、江蘇、湖北、湖南、福建、廣東、雲南、四川から陝西の一部にまで分布して居る。食物は、蛇、昆虫、蟹、果物等であるといふ。頭胴長六七〇—八六〇耗、尾長三七五—四六〇耗。タイワンシジャカウネロに近いハイナンシジャカウネロ（*Viverricula malaccen-*



第四十一圖—ハイナンジャカウネコ

sis Gmelin)と云ふ小形のものがマラツカから海南島に産し、その變種タイワシジャコウネコ(V. m. palli a Gray)が廣東省の廣東附近に産する。後者の方がやゝ大きくて、體色に赤味が加はり冬毛も前者より長いといふのである。頭胴長四六〇—五七〇耗、尾長二五〇—三二五耗。

英名を直譯すれば「椰子猫」となる者の屬(Paradoxurus)が支那にも産する。此の類は樹上生活者で、肢短く、爪は起伏し、瞳孔の形も猫の様に變化する。尾が比較的長くて輪紋なく、頭は大體黒くて白斑があり、胴には三



第四十二圖—ハクビシン

乃至五の黒條が縦に走る。海南島の産は佛印やシャムのと同亞種ハイナンヤシネコ(Paradoxurus hermaphroditus la tum Gybenstøpe)であるとされ東南廣東省のはもつと小形でコヤシネコ(P. minor exilis Schwarz)と呼ばれる。臺灣本土や紅頭嶼や火燒島に産する白鼻猫の類も之に似た者ではあるが、胴に黒條なく、左右眼窩間が前者程顯著にくびれて居らず、吻がやゝ廣くて短いと云ふので別屬(Paguma)とされるが、斯ういふ類も支那にも産する。一はフクケンハクビシン(Paguma larva a H. Smith)といふ學名のもので、福建、浙江、廣東、四川から陝西にまで分布して居る。二はウンナンハクビシン(P. l. intrudens Wroughton)と云ふ名で佛印から雲南、四川に分布し、三は海南島のでハイナンハクビシン(P. l. hainana Thomas)と呼ばれる。色調の差だけといへるのである。

マングース屬 (*Herpestes*) は頭部に黒い箇所が無く、體が一層小さくて細長いタチ型の類である。カホアカマングース (*Herpestes rubifrons* Allen) は頭胴長三〇



第五十三圖 カニクヒマングース

〇 牝内外、尾長二二〇 牝位の小さなもので、體色オリブ褐色で顔の側面や手足は赤鐵色である。海南島の産。カニクヒマングース (棕裘猫) (*Herpestes urva* Hodgson) はよほど大きくて頭胴長五五〇 牝、尾長二二〇 牝位で、帶紫褐色又は淡褐色で蟹、魚、蛙、鳥、雞などを食ふ。溪流のほとりに穴居して朝夕に活動するといふ。臺灣にも棲むのであるが、支那では福建省、浙江省、江蘇省等に産するが、雲南省からは獲れた記録はない。盲猫とも呼ぶ相だがそれは近眼で近づき易い爲めであるといふ。

三、犬

科

支那では犬、狼 (*Canis*)、赤狼 (*Cuon*)、貉 (*Nyctereutes*)、狐 (*Vulpes*)、砂狐 (*Cynalopex*) の類が之れに入る。赤狼丈は齒式が $\frac{3.1.4.2}{3.1.4.2}$ だが、他は皆 $\frac{3.1.4.2}{3.1.4.3}$ である。但し石器時代の犬には往々赤狼と同齒式の下顎骨片が出るが、白齒の構造上犬と思はれるものである。

狼 (豺狼) (*Canis lupus*) は東西兩半球の北半に分布する毛の荒い犬科動物で、齒の構造は犬と一番よく似て居るが、齒殊に牙や肉齒が犬より大きな動物である。北歐のを標準にとつて大形とすると、南印度狼 (*C. l. pallipes* Sykes) や本州以南の日本狼 (*C. l. hodopiata* Temm.) は小形で北海道狼 (*C. l. rex*) は大形であるが、支那の狼はまあ中形である。と言つても蒙古には大形と言つてもよいものもあるし、ベルグマンの法則、即ち同種の動物では寒い所の者程大きく、温い所では小さくなる (熱を放散する體表面積は體の大い程比較的に小なのである) といふ法則によつての地方的趨異に過ぎない様に思はれる。從來支那の狼は地方によつて色々な學名に分けられた。例へば一八二九年にチベットの黄灰色の狼が *C. l. laniger* Hodgson と呼ばれ、一八六三年新疆の黄金色の狼 (*C. l. chanco* Gray) が發表されて、一八七四

年にはチベットに黒い狼が獲れて *C. niger* Sclater と命名され、一九〇八年にはマツチーが甘肅西部の西寧から *C. l. filchneri* 甘肅省北部から *C. l. kalanolensis* 河北の山海關から *C. l. tschilensis* の三新亞種をつくつた。併し此等は皆地方趨異の範囲に入るもので同一亞種としてもよい位のものであるが、さうするとどの學名で統一したらよいかといふ問題になるのである。學名先取權の法規からいふと *C. l. langneri* Hodgson が先取權があるわけであるが、不幸にして *C. aniger* といふ名は *Smis* が一八四〇年にプヂェットサウンドの畜犬に命名して居るのを、ホヂソンが知らずに支那の狼に用ゐたので抹殺される運命となり、*C. l. chancoi* Gray が支那狼の學名とされる事に今日ではなつて居る。蒙古、河北、山東、山西、陝西、甘肅、其他揚子江北には可なり居るらしいが、江南にはソワビーは却つて多いと言つて居るにかゝらず、比較的少ないといふ方が正しいらしい。人を襲ふ事はめつたにないが、小兒を取る事はある。仔は穴に二頭か三頭産まれる。

タヌキ（貉、貉子）は支那、滿洲、朝鮮、日本内地（北海道を含む）の特産といはれるもので、目を通して黒い逆さ八字の條斑がある點が北米の洗熊に似て居るの

で、英名を直譯すると洗熊狀の犬といはれる。形は狐よりも小さいが、胴太り、肢短くて尾は房々して居る。體色も普通の狐より黒ずんで居る。支那の貉はシナタヌキ (*Nyctereutes p. ocyonoides* Gray) と呼ばれ、頭胴長五〇〇耗以上、尾長一七〇耗位であるが、體色にも大きにも趨異が色々あるので人によると十數種に分ける人も有る位である。浙江、江蘇、江西、福建等のが、毛皮界では湖南、湖北、安徽のより上等品とされて居る相である。滿洲にも居るのであるから、北支にも居るに相違ないが、川からあまり遠い所には棲まぬのであらう。西限は陝西、四川の邊らしく、雲南省のビルマ境のは淡色な變種として *N. p. oestes* Thomas の名が有る。雲南のは上眞白齒が三本有るともいふが、之れは東方諸省のにも往々有るのである。食物は蛙、川魚、鼠、昆虫、ミ、ズ等の肉の外、ブドウ、柿、其他の果物、穀物、根菜類なども食ふので、犬の様な雜食で飼ひやすい。三月頃交尾、妊娠期間六十二日位で五月に仔を産む。一胞七頭の實例もある。序に日本では貉を狸と書く例が多いが、支那では狸は猫をさすものだ相で、誤解の恐れがあるので動物學者は貉の字を用ゐる。狸をタヌキ、貉をムジナといふのは俗説で、タヌキとムジナは同じも

のである。

狐も日本では野干と書く人も有るけれども野干は經文の漢譯の時に出來た字で、印度のジャツカル(ヤツカル)の音譯で支那には居ないのである。狐は支那にも三亞種が知られて居る。キタシナギツネ(*Vulpes vulpes tschiliensis Matschie*)は南支の紅狐と似て居るけれども、それより大形なのであつて、頭蓋基底長一三七—一五七耗といふのは北歐のに連続する大きさである。又此の狐にも十字狐、銀狐といふ様な色相のものも有り、蒙古には殊に多いが、毛が荒いのが缺點である。蒙古、河北及び山西、陝西、甘肅等の南部に産する。ゴビ荒原には沙黄色な變種ハイロキツネ(*V. v. karangan Erxleben*)が居り、南支紅狐(*V. v. hoole Swinhoe*)は色は北支のと異はないが、明かに小さい事は頭蓋基底長が一二〇—一三〇耗といふのもわかる。福建省や廣東省ではまあ北部、湖南省、四川省等の山地に棲み、香港以南には居つても稀らしい。

スナギツネ(沙狐)(*Cynalopex corsac L.*)は西シベリヤからキルギス草原等やゴビ沙漠に棲み、頭蓋基底長一〇八—一一三耗といへば、小形狐の下位につゞく大きさ

(頭胴長七五〇—九五〇耗、尾長二五〇—三五〇耗)であるが、鼓骨胞大きく、なほ頭骨の諸部で狐と異ひ、耳短く、體色淡黄灰色である。

赤狼は體色は狐に似て赤いが、毛の荒い事は狼の如く、體の大きさは狼に近いが、肢長との比較上尾が長くてちよこ／＼狐の様に動き廻り、耳の幅も廣いといふ妙な犬科動物である。齒も前述の様に下第三眞臼齒が欠如して居る。赤狼は北はシベリアから南はジャワにまで居るが中間で分布が切れて居る様なので、北の赤狼(*Cuon alpinus*)と南の赤狼(*Cuon javanicus*)と二系に分けて考へられて居た。地勢上滿洲や朝鮮のは北方系、支那には北方系と南方系と兩方有ると考へられたのであるが、近年ポコックの比較研究によると皆一種中の異亞種となすべしといふ事で、成る程南方系のジャワのは下第二臼齒や上第二臼齒が小さく、北方のはそれが大であるといふけれども、朝鮮のはどちらも小さいので個體趨異であるかも知れぬとも思はれる。それで皆 *Cuon javanicus* とされてその中に諸亞種があるとされる様になつたのは、*C. alpinus* の名よりも先取權があるからといふ丈の事で、皆南方から起つて北方に廣がつたのだといふ意味ではないのである。扱、支那の赤狼は *Cuon*

Javanicus lepturus Heude と名づけられ、雲南省、四川省のは頭蓋基底長一五〇耗内外で、東の方、江西省、福建省までも居る。チベットからは頭蓋基底長一七一—一七八耗の大形で毛の長い所謂北方的なものが知られ、アルタイ、張家口邊、河北省などの所謂北方系のものに相違ない。四川省では群をなして野鳥獸を襲ひ性却々慄悍であるといふ。

四、熊 科

熊も齒式が $\frac{3.1.4.2}{3.1.4.3}$ な點は犬科に同じだが、肉齒が不顯著な事や臼齒が小判狀で突起は小丘狀である點も異ふし、體大きくて太り蹠行である點もちがふ。日本の大きなヒグマは毛が褐色で小さい黒い熊とは一見してわかるが、支那では骨格や大きさではヒグマ狀で毛色の黒い熊があつたりしてむづかしい。一體熊の類は體大きく吻尖り、掌球と指球との間は、毛の生へた部分で仕切られて居るのであるが、西藏や甘肅に棲むオホツキノソグマ (*Ursus (Myrarcos) pruinus Blyth*) やは全長一・五五米、頭蓋基底長三百耗内外あるから熊の様な大きなものだが、齒が一層大きく

て上第二臼齒四〇耗もあり、掌球と指球とも毛の部を分けて細いつながりが有り、毛色もやゝ黒ずんで居つて月の輪も大きいのでレンベルグは熊と亞屬を別として居る。蒙古の北部に棲むもつと大きくて黒くて月の輪のない熊が有る。北は河北から四川にまで居つたものらしいが、頭蓋基底長三五〇耗以上も有り、色こそ黒いのが多きが熊類の形狀と猛烈さを備へたもので、クロヒグマ (人熊) (*Ursus arctos lasotus Gray*) と呼ばれる。日本でさへば北海道のに近す。ホクマンヒグマ (北滿熊) (*Ursus arctos mansuricus Heude*) は千島や樺太のアカグマと同系のものといはれるが、七月中旬交尾、一九六日位の妊期で、冬眠中に二、三頭の仔を産む。冬眠中は絶食である。

滿洲東部や北鮮には朝鮮熊 (*Ursus (Spelaeus) cavifrons Heude*) と言はれる黒褐色の熊があつて、第一小白齒がなく頭骨の形狀も化石の洞熊に似て居り、西歐の化石の洞熊と北米の *U. americanus Pall.* との中間形を示すものとして、別屬とする人もあるが、クロヒグマ系の變種にすぎないとする人も少なくなす。

チベットクログマ (犬熊) (*Eurctos (Selenarctos) tibetanus Cuvier*) は本州の熊

に似た方の種類で、黒くて月の輪あり、毛も罷に比べれば短くて體も小さい。頭蓋基底長二一八耗—二七〇耗といふのでも前述の大きな熊との比がわかる。吻も短くて可愛らしい様な顔である。此の熊は分布廣く、チベット、四川、陝西、山西、河北からも獲れて居るが、人口稠密な中支、南支には少ないのであらう。交尾は冬眠前に行はれ、十月頃から冬眠に入り、冬眠からさめた牝は生後二、三ヶ月位の仔をつれて居るといふ。之れの變種である北滿のチャウセンクログマ (*Euarctos (Sele-narctos) ussuricus* Heude) は交尾期が七、八月から九月頃で、妊期七ヶ月、二月終りから四月にかけて仔が産れるといふ。産まれたての仔は二〇糶をこえない小さなものだといふ。

海南島にもチベットクログマの變種 *Euarctos tibetanus melli* (Matschie) (ハイナンクログマ) が棲む。小形ではあるが、頭蓋基底長二五〇耗のもあるから大して小さいとは限らない。

マライグマの變種 *Helarctos malayanus wardi* (Lydekker) も雲南省や四川省には入り込んで居る。之れは吻短く體細く小さくて大人しい黒熊で、頭蓋基底長二二〇

耗位、第一小白齒は上下共欠如して居る。

ヒグマは川魚や獸をも襲ひ家畜がやられることもあるが、主食はブドウ其他の果物、堅果、根、若芽、蜂蜜、蟻等であり、チベットクログマやマライグマ類は主として、堅果、ブドウ其他の植物食だが、アリや蜂の子や蜜等も食ふ。

五、オホパンダ科



第四十四圖 オホパンダ

之は支那特産の一屬一種オホパンダ (*Ailuropoda melanoleucus* David) だけを含む科で、大體に於て熊科と北米に多い洗熊科との中間に立つ類であるが、上顎の臼齒が著しく廣くて突起低く、上第四前臼齒の突起も特異で、食肉類的な鋭冠狀でなくて、外側に三、内側に二小突起あり、下第四前臼齒も長くて三突起で、内側齒根が後根と癒着して居ない。又顴骨

部幅が大なので顔が廣くて猫に似た感じあり、尾短く、色彩も眼のへりと手足と耳と、肩をこして前肢をつなく黒帯が有るが、他部は大體白いといふ様な珍なものである。四川省の中央馬邊山附近の高い山の竹林から先づ知られ、後に西康省東部や四川北部の山の竹林からも得られた。竹、苟、若竹等を食物として居るのであるが竹のないロンドンの動物園でも近年飼ひ得たといふ。齒式も前臼齒が $4/3$ で普通の熊よりは二本少ない。肩高六六〇耗、全長は一米半よりやゝ大い。

六、洗 熊 科

洗熊の名は手で顔を洗ふ様なかつこうをするといふ所から出たのであるが、北米には地上性、樹上性數種あるが、その近親のものがヒマラヤに居り、その又變種 *Ailuus fulgens styani* Thomas が支那領内にも居るのは面白い。猫熊とか、パンダとか、化粧熊とか言はれるものが即ちそれであつて、顔は幅廣くて猫の如く、尾は長大で房々し、背も尾も赤味を帯びた奇麗な小形の動物である。果物や青葉を食するといふが、齒は大パンダより食肉獸的である。支那では雲南北部から四川省中

央の南から北までの高い山に分布して居る。皮で測つて頭胴長六一〇耗、尾長四〇五耗といふ位のものであるが、皮では頭胴長は引き伸されがちなものである事を念頭に置く必要がある。北米と東亞との獸類相に親和がある事は前にも諸例を挙げたが之れもその一例である。(第四圖參照)

七、鼬 鼠 科

趾は熊科の様に五本づゝあるが、肢短く趾行又は半蹠行で、體多くは細く、齒の數も熊より少なくて、臼齒は $1/2$ であるし、又肉齒が目立つ事も熊の類と異ふ。

シナアナグマ(ハシボンアナグマ)(獾)(猫獾)(*Meles meles leptorhynchus* M.E.) は半蹠行で體もやゝ太り、上肉齒は三角形で長さ幅と幾等しい點などで他の鼬科のものといふ異つて見え、毛色など貉に似て居るが、毛がもつと荒くて尾が細い。穴居性である。晩秋に交尾し、三月頃三―五頭の仔を産み、十月から三月頃まで冬眠するといはれる。歐洲の獾よりは小形で頭蓋基底長一一〇内外頭、胴長四五〇耗、尾長一三〇耗位。北では河北、山西、陝西から甘肅、四川の東部まで、南方は

香港に至るまで、あまり高い山地でない所に分布する。



第四十六圖 イタチアナグマ属

スナチアナグマ (沙獾、猪獾) (*Arctonyx collaris* Cuvier) は喉が白く、爪も黒くなくて淡色だし、尾がやゝ長くて細い等で前種と區別されるが、吻も豕の様で、體やゝ大きく (頭蓋基底一三〇耗内外)、雲南省から福建省邊まで江南に産する。毛は筆に使はれる丈で毛皮としての價値は少ない。之れの變種クビシロアナグマ (ネツカアナグマ) (*A. c. leucolaemus* M. E.) は喉の白帯が伸びて頸を取り巻いて居るし背の色がやゝ黒ずんで居るが、體も南方のより小さく (頭蓋基底長一一〇耗内外) 熱河省、河北、湖北、山西、陝西、甘肅など江北に産する。第一前臼齒を缺く者が多い。

形はやゝ獾に似て居るが、もつと小さくて、上肉齒も三角でないイタチアナグマ (小豕猫) 属 (*Helictis*) といはれる類も臺灣にも居るが、支那南部にも産する。海

南島のはハイナンイタチアナグマ (*Helictis moschata moschata* Gray) と呼ばれ、頭蓋基底長六六・七耗、チヨコレート褐色である。 *H. moschata ferreogrisea* Hilzheimer



第四十七圖 オンシキエリテン

と呼ばれる變種は、頭胴長三七〇耗内外、尾長一四〇—一九〇耗位で、頭蓋基底長は七〇耗内外、浙江、福建、湖南、江西、江蘇、四川などに居る。もつと小さな (頭蓋基底長六〇耗内外) カバイロイタチアナグマ (*H. faxilla sorella* Allen) は福建省に棲む。前者の灰色がかつて居るのに對して、本種はチヨコレートがかつた褐色である。どれもあまり高山でない所に棲み、魚、蛙、鳥、昆虫、果實等を食とし、臺灣では歩く様子からして鼬獾の名があるといふ。毛皮として流行して來た。

貂と齒式も同じで (3.1.41) (3.1.42) 形も大きさもまあ大體貂位であるけれども、背が黒くて喉が黄色で、毛が荒く、尾が細く長くて頭胴の四分の三以上もあり、陰莖骨も貂

と大分違ふキエリテン(密狗)屬(*Charronia*)が南アジアにも廣く分布し、鮮滿にま
で居るが、支那にも一種ナンシキエリテン(*Charronia flavigula flavigula* Boddaert)



第四十八圖 クロテン

が居る。山地の森に棲み、
雲南、四川、陝西にも、又
湖南、廣東、福建の諸省か
らも知られて居る。頭胴長
四七〇—五七〇耗位、尾長
三七〇—四四〇耗内外であ
る。

蒙古北部の森には、黒貂
(紫貂、青門貂)(*Martes*
zibellina princeps Birula)が

棲む事確實で、蒙古語のブラガといふ名が訛つて日本でも昔フルキと稱したといふ
位である。高價な毛皮とされるので年々少なくなつて來た事は争はれないが、滿洲



第四十九圖 ムナジロテン

や北鮮にも未だ居るが少なくなつて北滿でも年百頭以下きり護れない相である。之
を獲るには通路の丸木橋などに、水にはぢき落す装置をして水中に落ちたのを捕へ
るとか、陷阱とか、又は足跡を見て之を追ひつめて、網を
出口に張つて追ひ出すとか色々工夫して居る相である。頭
胴長三〇〇—四二〇耗、尾その半分位。四月乃至五月に二
—四頭の仔を産む事は一致した意見だが、交尾季は一月末
二月前半といふ人も有り、七、八月頃だといふ人もあり、
それによつて妊娠期間の永さの問題が議論になつて居る。
食物はネズミ、リス、シマリス、小鳥、鳥の卵、果實、堅
果、蜜等であるといはれる。

英名を直譯すると石貂(*Martes foina* Erxleben)と云ふ
べきもの(ムナジロテン)が歐洲から中央アジアにも分布
して居り、恐らく天山、アルタイ山にも棲み、蒙古のゴビ
沙漠より北方の森林や岩山には見られるだらうと思ふが、ソワービーのいふ様に、

山西、河北にも棲むかどうかは疑問である。日本の貂とは上臼齒列の形から見ても別系統の貂である。

イタチ類は支那の方が日本より種類がずっと多い。齒式は皆 $\frac{3.1.3.1}{3.1.3.2}$ で、貂より二對少なく、肢一層短く、體も小さいものだが、毛皮としては經濟的に馬鹿に出来ないものである。

シベリアイタチ類（鼬鼠、黃鼠狼、地猴）（*Mustela (Kolonomus) sibirica*）は日本の普通のイタチに似て背も腹も尾も幾同じ様な色をして居り冬にも白くならないもので、水に親しむ類であるが、體が日本のより大きい。但し日本のと同じ様に牝に比して牝はずつと小さいものである。キタシナイタチ（*M. s. fontanieri* M.E.）と呼ばれるものは、色が淡褐色で、牝は頭胴長三一〇—三八〇耗、尾長一八〇—二二〇耗位、牝は頭胴長二六〇—二九〇耗、尾長一八〇—二〇〇耗位で、江蘇省、河南省、陝西省以北に産し、ダビッドイタチ（*M. s. davidiana* M.E.）は體色が濃く橙褐色で、體も少し大きく、頭胴長牝で三六〇—三九〇耗、牝でも二九〇—三二五耗位で、湖北、安徽以南、西は湖南、廣東省東北部までに分布して居る。*M. s. moupin-*

ensis M.E.（シセンイタチ）は尾端の暗褐色が特に目立つが體色も一體に暗色ずんで居る。大さは北支のと同じ位で、四川、廣西、雲南北部などの高地に棲む。

アルタイイタチ（*Mustela altaica*）は牝でもシベリアイタチの牝位の大きさで、牝はもつと小さいのであるが、背面と腹面との色が著しく異つて、はつきりした境界線がある事で見分けられる。冬毛でも白くならず、尾の端が黒くないのでエゾイタチとも見分けられる。背面は夏は淡い赤色で冬はクリーム色、腹面はまあ橙黄色である。タカネイタチ（*M. a. altaica Pallas*）は蒙古北部や甘肅、チベット、山西などに見出され、牝の頭胴長二三五耗位、尾長一四〇耗位。ナンシタカネイタチ（*M. a. kathiah Hodgson*）は福建省、雲南省等南方に見出され、背はチョコレート褐色で、腹面は黄色牝で、頭胴長二六〇—二七〇耗、尾長一三六—一七〇耗位。冬毛はもつと淡色である。滿洲でも之れの變種（*M. a. raddei Ognev*）が可なり獲れる。

も一つアルタイイタチとコエゾイタチとの中間的な様なイタチが西康省の打箭爐の邊からベッドフォード探検によつて知られた。それはコタカネイタチ（*M. russelliana Thomas*）や、頭胴長一三三—一三八耗、尾長五四耗といふ小さなもので、夏

毛で見ると背面は暗色、腹面は美しい橙紅色で兩部の境界線が顯著に目立ち、喉に白斑がある。恐らくヤルカンド地方の *M. stoliczkana* の系統のものであらう。

エゾイタチ (掃雪) の蒙古の變種モウコエゾイタチ (*Mustela (Mustela) erminea mongolica* Ognev) は尾端が黒く、夏には背と腹とで色が異ふが、冬には尾端が黒い丈で、他部は雪白いイタチである。支那では蒙古領アルタイに見出された丈で少ないらしいのである。滿洲でも少なく、大興安嶺に少し居る位なものとされるが、それは冬に雪のない所では、白い色が目立つので亡ぼされ易かつたのだらうといふ。牝牡の大きさの差はあまり大でなく、頭胴長二〇〇耗以内、尾長一〇〇耗以内。

コエゾイタチ (白鼠) (*M. (M.) rixosa pygmaea* Allen) は尾が甚だ短くて尾端も黒くないのでエゾイタチと識別容易であるが、體も鼠の様に小さく、即ち頭胴長牝で一五七耗位、牝で一四〇耗位、尾長は牝二〇耗、牝一七耗位である。夏毛は背がチヨコレート褐色で、腹面や肢の内側は白い。冬は全身が眞白である。蒙古の庫倫附近から北方に見られる。

ケナガイタチ (*Mustela (Putorius) eversmanni tiarata* Hollister) は尾端が黒い事

や背と腹と色が異ふといふ點ではエゾイタチに似るが、冬も白くならず、手足も黒く、體も大きくて、牝牡によつての差が著しくない。即ち頭胴長三九〇—四〇〇耗位、尾長一五〇—一七〇耗位である。體の色は背や尾の上面三分の二位は茶褐色で頭や喉は大體黒褐色で、腹から兩脇は赭土色で腹面には白斑が見える。蒙古、チベット、甘肅、山西などに産し、毛が長し大形なので毛皮として價值あり、滿洲にもアムールケナガイタチ (*M. (P.) e. amurensis* Ognev) が産する。

も一つケナガイタチ位の大きさのトラフイタチ (*Vormela perergusna negans* Miller) といふものが陝西省北方のオルドスや蒙古から知られて居るが、沙地の縁の森に棲み樹に上るものらしい。頭胴長三四〇耗、尾長二二〇耗位で房々して居る。トラフイタチと言はれる所以は顔や體に條斑や斑點が澤山有るからである。一寸ダルマチア犬の斑紋を想はしめる様なもので、襪褐色の地に白、茶色斑があるのである。土地の人は「マナイホウ」と呼ぶ相だが「ホウ」は猴であらう。ケナガイタチとは下顎肉齒に後突起の有る事や鼓骨胞の邊の構造も異ふので別屬とされるのである。

カハヤン (水獺) (*Lutra*) は事新しく言ふ事もない程著名なもので、趾間に蹼が

有り、爪は小さく、尾は長大で水中運動に役立つて居る。水中に浸るのに適應して毛も密生して中々美しい。丈夫な毛皮を提供するので經濟價値の多いものである。

齒式は $\frac{3.1.4.1}{3.1.3.2}$ でイタチより齒數多くて三十六本、又上肉齒が三角形な點は獾に似て居る。獺は川を越す事が自由で、川によつて隔離されるといふ事が少ないので、

地方的變種の少ない點で有名なもので滿洲や日本内地のは歐洲のと同亞種と做される位だが、それでも、支那は大きい丈に次の様な亞種が認められるが、谿谷や湖に沿つた所に棲むのでどうしても揚子江流域などの南支に多い。シナカハフン (*Lutra lutra chinensis* Gray) は鼻盤の上縁に三突起を有し、齒の小ささ (臼齒列長三四耗位) 獺で、上毛短くて灰褐色、下毛は短いが密生し、黄灰色。頭、頸、胸の上部は帶白色で皮の長さは頭胴長が八〇〇耗のを大とし、五五〇—六〇〇耗のを中とし、四〇〇—四五〇耗位のを小として居る。尾長は三〇〇—四〇〇耗位。浙江省、福建省、四川、江蘇省、湖南、廣東、海南島等が確かな産地だが、もつと北方にも廣がつて居るに相違なく。雲南省の *L. l. nair* Cuvier は齒が大 (臼齒列長三八耗位) 點で前者と區別されるが、頭胴長六八五耗、尾長四〇〇耗といへば體は前者の大きな者に相當する。なほ雲南には *L. tarayensis* Hodgson とすはれる獺も殆んど同じ分布を示して居るが、之れは鼻盤の上縁に齒狀突起なく、頭骨の形も異ひ、體色ももつと茶褐色を帯び、又前種より大形である。

も一つ爪が殆んど見えない位に小さい獺が南支の雲南から海南島、福建省にかけて見出されるが數は何處でも少ないものと言はれる。之れは、チビヅメカハフン *Micraonyx cinerea* Illiger と呼ばれ齒は大 (臼齒列長三八耗位) 齒式は $\frac{3.1.3.1}{3.1.3.2}$ で二本少なく、頭胴

長五六〇耗位、背面の色は暗灰色、腹面はやゝ淡色で顔にも異色部がなく、吻は著しく短いものである。

第七章 支那の齧齒類

一、兔 科

日本の兔を念頭に置いて支那の兔の分布を見ると、第一に氣の付く點は冬に白くなる兔の居る所が極めて少ない事である。北西隅のアルタイ山脈にアルタイウサギ (*Lepus timidus altaicus* Barr.-Ham.) がある丈で、之れとて研究された材料は極めて貧弱である。バーレット・ハミルトンは頭蓋基底長が六六・五耗だから北歐のよりずつと小形であるといふが、これでは日本のノウサギより小さいことになるので、もつと大いのが普通なのではないかと思はれる。滿洲にも大興安嶺にチタノウサギ (カハリウサギ) (*L. t. transbaikalicus* Ognev) が進入して居るが、これも報告極めて貧弱である。チタ邊のは頭蓋基(髀)底長七六・三—八八・二耗で夏毛は北方のより灰色であるといふ。山西省山地にも白化する兔が居るともいふが、之れも未だ調

査ずみとはいへぬ。此の白化する兔類に比べると耳が比較的長く後足比較的以小で毛のやゝ荒いヨーロッパノウサギ (*L. europaeus*) に近い兔は支那にも廣く分布して居る。

モロコノウサギ (*L. e. tolai* Pallas) はバイカル地方から蒙古、陝西省のオールドス荒原、滿洲のバルガ高原、南滿平原 (吉林附近より西の方) に分布し、體色は灰色に黒褐味のまじつた様な色のものが普通で、赤味なく臀も灰色である。尾の上面は黒、下面は白。頭胴長四六五—五〇〇、尾一〇五、耳(外)一〇五、(内)九〇—九八、後足一二〇(爪を除いて)、頭蓋正中底長六六・五—七一耗位。奉天から送つて貰つた二頭も此の種類のもので、ヨーロッパノウサギの變種と做してよいものであつた。尾の下面の白くないマンシノウサギは黒褐色の個體もあり、吉林以東に産するのであらうが、之も同種中の變種と言ひ得る。

スキンホーノウサギ (*L. e. swinhoei* Thomas) これも前種に近い變種であるが、色がやゝ赤味を混じ、冬の臀部も目立つた灰色ではないが勿論ヨーロッパの程赤くない。鼻骨もやゝ廣いので吻が太いことになる。頭胴長五〇〇、尾七五、耳長(外)

九八、(内)八七、後足一一五、頭蓋正中底長六八—七一耗。河北省、山東省産。
 フイルシユナーノウサギ(ホクレイノウサギ)(*L. e. filchneri Matschie*)も前のと似た兎で、臀も灰色でないが、體の赤茶味が前者より濃く、吻も一層短いといはれる。山西省、陝西省南部の峽谷産。頭胴長四二〇—四九〇、尾八〇—八五、耳長(内)九〇—九八、後足一二〇—一三〇耗。

ホリスターノウサギ(*L. e. aurigenus Hollister*)ホリスターは、江蘇省の九江邊からの標品を見て、體色は後出の南支野兎によく似て居るが、頭骨がちがふといふので別種にしたので、小さな兎と思つたのであるが、アレンが湖北省や四川省東部の之と同定される兎を見ると大きさをむしろ前掲の諸亞種にまけぬ位で、即ち頭胴長五一〇—五九〇(伸した皮だらう)、尾七二—九〇、後足一〇八—一二二耗、頭骨も前亞種に似たもので、たゞ體色が鮮やかで赤い變種なのである。揚子江沿ひの野畑に棲むので、色の鮮かなのは、溫度と湿度との影響であらう。

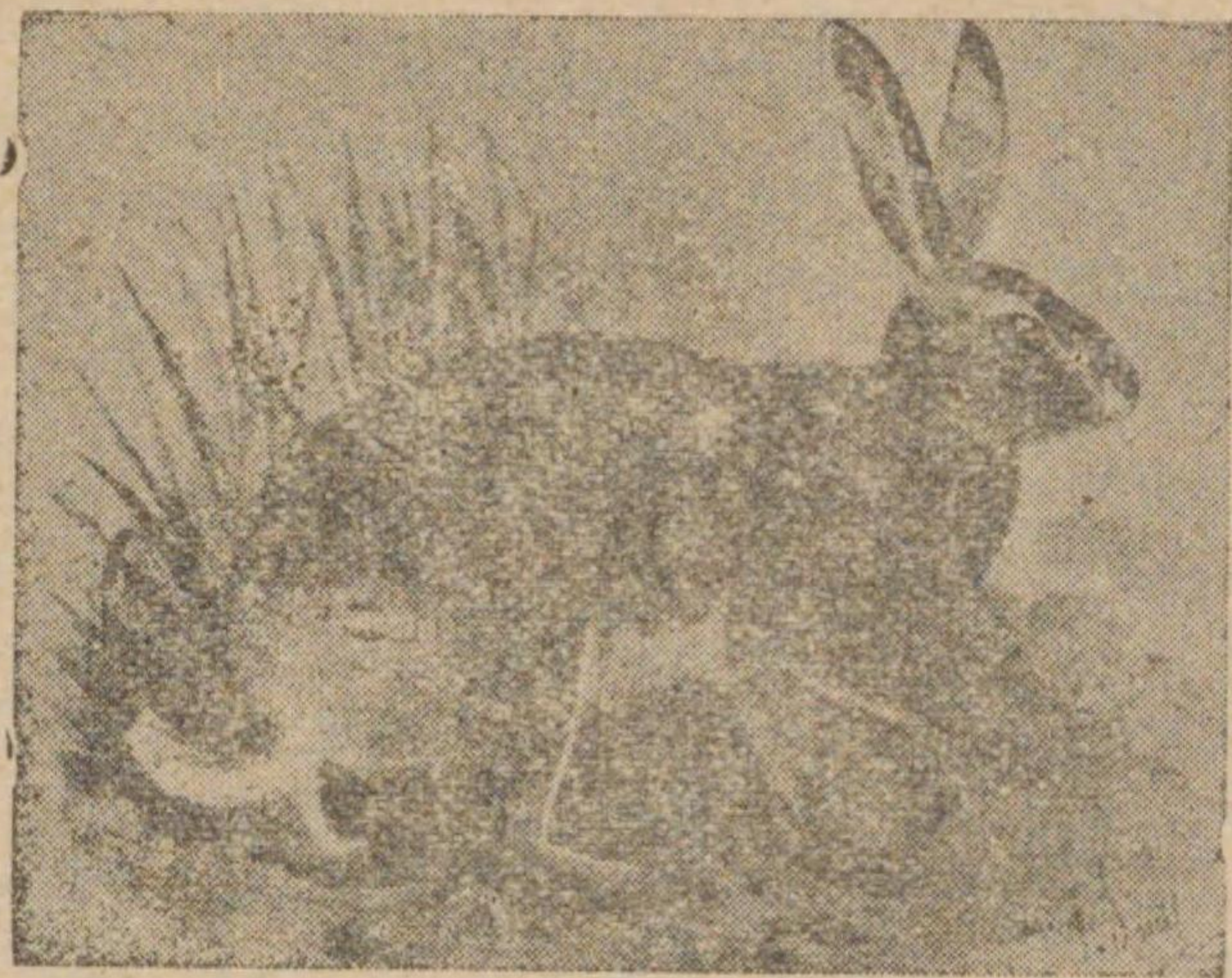
ハイナンノウサギ(*L. hainanus Swinhoe*)は海南島産の小形な兎で、頭胴長三五〇、耳長七九、尾七九、後足長九二—九六、頭蓋髁底長六四に對して顴弓幅三六耗

といふ様な、頭骨で見ると南支野兎とも前出の諸兎とも異ひ、むしろ、安南の兎やシヤムの兎を通して西方の *L. peguensis* 群に近うものと思はれる。アレンは毛色が

北支の兎に似て居るからその小形に變化した兎だらうと言つて居るが、頭骨のカーブの強い點内鼻孔の狭い點、顴骨弓の溝の深くて全長に亘つて居る點など、北支の兎群とは著しく異なるので、むしろ前説の方がより近い様にも思はれるが、とにかく獨立種と認めるべき事には異論ない兎である。

チベットノウサギ(*L. tibethanus Waterhouse*)

支那の兎としては第三番目に名乗りを擧げたもので、頭胴長四三四、尾長七九(毛を入れれば一〇五)、耳長九一(外長一一六)、後足長一三八(爪を含みて)、頭蓋正中底長六八、顴骨弓幅三九、背の色は淡灰色で、褐とか黄とかの色調なく、尾は上面煤色、



第五十圖 チベットノウサギ

下面は白、胴腹面も白といふ荒原又は沙漠的な色で、オグネフはモロコノウサギを中間としてヨーロッパノウサギ系に續くものといふ。毛が眞直で波状をなさぬ點でもチベットの後出の種と異ふとギンターはいふ。チベット西北部の小チベットのスカルド附近から記載されたものである。アレンが此の兎に言及して居ないのは、同氏は一體にチベットを支那扱ひしないからであらう。カシニガルの北及西北の天山山脈の外丘のストリックカンノウサギ (*L. stoliczkanus* Blanford) も此れの系統の色變りと思はれるもので頭の色が灰黄色でなくて淡赤色、背の色は沙褐色に黒味が大きいに混じて居る。耳長くて内長一一二、後尾(爪共)一二八、尾長(毛共)一三〇、頭胴長四六〇。

ラッサノウサギ (*L. oistolus* Hodgson) 冬の毛色はモロコノウサギによく似て居るが、尾の背面の煤色の部が非常に狭く、末の方の正中部丈である事や、毛が波状である事、耳がより長いといふ點で異ふ。頭骨で見ても、吻が長大であるし、上眼窩突起が立つて居る。第四番目に名乗りを挙げたヒマラヤ、ラダック邊の支那の兎であるが、ラッサ邊の *L. pallipes* Hodgson も之れと同種とせられ、四川省西部のシ

センノウサギ *L. sechuenensis* de Winton や西康省カーム地方の *L. kozlovi* Satunin も同種と做される様になり、甘肅省からも同種と做されるものが採れて分布版圖がずつと廣い事となつた。チベットを中心とする草原の兎といはれるが、夏には一萬一萬二千呎の高山帯にも見られ八千呎の谷にも見られた。頭胴長四七四、耳長一一五(外一二〇)、後足長(爪共)一一八、尾長一三二(毛共)、頭蓋基底長七五—七八耗。なほ西康省東部、打箭爐邊の高山一萬五千呎邊の兎は之と似て居るが毛深く濕氣の爲めか黒化現象が明かたといふので之れの變種 *L. o. grahami* Howell とすれ、又雲南省のは臀がやゝ濃色で尾の上面褐色、下面、側面が灰色で後足が細いといふので、やはり本種の變種と做され *L. o. cornus* Allen と名づけられて居る。

青海省ツァイダム邊のプルツェワルスキノノウサギ (*L. przewalskii* Satunin) も、尾が白くて上面に廣い黒帯が有るといふのも換言すれば上面全部が黒くない點で前種と一致するし、中央アジアの荒野の淡色な諸種に比して遙かに黄色の勝つて居るといふのも前種に似て居るし、後足長なども似て居るので、前種の系統のものと思はれる。頭胴長四九〇—五八〇、尾長(毛共)一三七—一四二、耳長九一—一二五、

後足長（爪を除き）一〇八—一〇九。新疆西部のカシユガル地方のカシユガルノウサギ (*L. kaschgaricus Satunin*) も尾の色は前種と同様で、たゞ體背面の色が黒味の大いに混ざる黄色で、頭胴長四一〇—四八〇、尾長（毛共）一一二—一三三、耳長一一六—一二九、後足長（爪を除き）九八—一一〇といふので、之れも同系の兎と思はれる。新疆省ヤルカンド地方のヤルカンドノウサギ (*L. yarcandensis Günther*) の方は耳の上端や縁に黒色を缺く點でチベットノウサギと異なり、腰部が灰色でない點でラッサノウサギと異なり、兩種より小形で殊に後足が小さいといふ。尾は上面黄褐色、他部は白い。體の毛は絹絲狀で長いが波狀をなさぬ。頭胴長四二〇—四八〇、尾長一〇五、耳長一一八—一三八、後足長（爪共）一〇五—一一〇、頭蓋基底長六八。

ラダックヤマウサギ (*L. hypsibius Blanford*) も毛が波狀で大きな兎であるが、耳が短くて内長九二、外長一一九位な事や、尾が上面さへも白い事、後足長が爪を含めると一三二耗もある點などで、チベットの他の兎と異なるといふので新種として發表された兎である。西チベットのラダック邊の一萬五千呎位の高地に棲む兎で、

頭胴長（伸した皮で）六三二、頭蓋基底長七二—七六耗。

ナンシノウサギ (*Allolagus sinensis Gray*) は一八三四年にグレイが着色圖版と學名とを發表した小形の兎で、毛は前述の兎類に比べると極めて荒い。スキンホーは臺灣のも此の種類であるとしたが、臺灣のはグレイの圖の色に比べると淡色で赤味が遙かに少ないので、トマスは臺灣のはタイワンノウサギ (*L. formosus*) とし、新種として南支のと分けた。骨格的には兩者共似た様なもので同系のものには相違なし。アレンは印度の毛のもつと荒し耳の短し *Caprolagus hispidus* と同屬と做して *Caprolagus sinensis* (Gray) として居るけれども、習性から言つても、後者の穴居性なのとは異なるし、耳もあれ程短くはないし、頭骨も異なるので、むしろオグネフの亞屬 *Allolagus* を昇格としてナンシノウサギやタイワンノウサギを收容した方がよいと思ふ。色調からいへば北支のスキンホーノウサギと大して變らない赤黄味を帯びた小形の兎である。頭胴長四三六—四六三、尾長六六—七四、耳長八二—八四、後足長九五—九七、頭蓋基底長六一—六四。分布は浙江省、福建省、廣東省などの南支。

二、啼兔科（鼠兔科）（喂兔科）

上顎の門齒は兔と同様に二對であるが、上臼齒列は一對少なく、即ち齒式は $\frac{2.0.2.3}{1.0.2.3}$ であるし、體も小さくて二百耗を超える者少なく、耳も小さく、尾はないともいへる位であり、前肢後肢の長さも大して違はない。乳房は二對又は三對。そして群居性、穴居性で、鳴きかはすので啼き兔ともいはれる所以である。人のあまり行かない高山とか荒野とかに主として棲むので標品の数が少なくしたがつて個體趨異の研究が十分でないから、學名の数は少し多く發表されすぎて居ると思はれる。歐洲にはロシアに一種知られる丈であるが、アジア北部と北米からは澤山の種類が發表されて居る。日本でも樺太、北海道の大雪山、北鮮などに夫々見出され、滿洲にも（一種）二亞種知られて居るが、支那には流石に種類が多く、屬は *Ochotona* と *Su* 一屬だがトマスの三亞屬のどれに入る者も棲んで居る。モウコナキウサギ (*Ochotona daurica* Pallas) は兔の様に門齒孔と口蓋孔との區別がなく一續きの孔になつて居るので、亞屬 *Ochotona* に編入されるものであるが

冬毛では背面淡い沙茶色で耳の後面丈が茶色である。夏毛ではもつと黄褐色であるが、之と體色の似たパラスナキウサギ（後出）とは、趾の端の裏の疣が毛で隠されて居る點丈でも見分けられる。頭胴長一七〇—一九二、耳長一七—二五、後足二七—三三、尾長五—一三耗。ゴビ沙漠中の草地を選んで棲んで居る。北方ではゴビ沙漠の東端から西はアルタイ山邊まで、南では熱河省の近くから新疆省の東端までに棲む。トマスはアルタイ山から之の後足のやゝ大いといふ變種 (*O. d. altaina*) を發表して居るが、變種の價値があるかないか疑はしい。同氏は山西省の荒原のは冬毛の色が少し淡くて灰色だといつて、變種ベッドフォードナキウサギ (*O. d. befordi* Thomas) を作つて居る。又甘肅省から青海省の東部にかけて、變種セイカイナキウサギ (*Ochotona daurica annectens* Miller) が發表されて居るが、之れは鼓骨胞がやゝ大きくて頭蓋の中凸さがやゝ低いといふ。甘肅省の西端からチベットの東部にかけてプルツェワルスキーの採集したナキウサギは鼻端と唇とが黒くて體がやゝ大いが、他の點では前掲のモウコナキウサギに似て居るといふのでやはりその變種としてハナグロナキウサギ (*O. daurica melanostoma* Buchner) と命名されて居る。

頭胴長二〇〇—二四二、後足三三—三七、耳長二〇—二三・五。

同亞屬のチベットナキウサギ (*O. thibetana thibetana* M. E.) は小形の種類で、後足長三〇耗又は以下で、體色も冬毛では灰褐色、夏毛では赤さび色である。頭胴長一四〇—一六七、後足二六—三〇、頭蓋髁底長二八・五—三二。四川省中西部(馬邊山)を中心として湖北の西部まで、又一方にはチベットと雲南の一部までの高地に棲む。南甘肅省には之れの褪色變種カンシクナキウサギ (*O. th. cansus* Lyon) あり、陝西省の西安から蘭州にゆく途中の大豊山邊からは、黒毛が多いために灰色ずんだ變種キョウセイナキウサギ (*O. th. hiansgensis* Matschie) が知られ、山西省の太原の北、五台山邊からはサンセイナキウサギ (*O. th. sorella* Thomas) が知られ、冬毛はモウコナキウサギに似て淡色だが、夏毛では背面褐色で腹面クリーム茶色で耳は黒灰色で縁が白い。頭胴長一四〇、後足二七、耳長一八耗といふ小形のものである。雲南省西境のはフォレストナキウサギ (*O. forresti* Thomas) と呼ばれ、チベットナキウサギより大きくて背の毛の長さ一五耗もあるから別種だといふ人もあるが後者の變種と做す人もある。頭胴長一八五、後足二七、耳長一九。



第五十一圖 左 ハイイロナキウサギ
右 ラダツクナキウサギ

西康省の打箭爐の邊には大きな灰色のナキウサギが産しダセンロナキウサギ (*O. roylei chinensis* Thomas) と呼ばれ、ヒマラヤのものの変種とされるが、淡灰色で赤味なく、耳が長大である。頭胴長一八〇、後足三二に對して耳長三〇耗といふので耳の大きな事明かである。

フトミミナキウサギ (*O. auritus* Blanford) は恐らく夏毛だと思はれる標品では煤けた褐色で、頭はやゝ淡色、頭胴長二一〇、後足三〇、耳長二六耗以上でチベットのラダツクの東方パンコン湖の邊の産。ギンタールの *O. macrois* と命名したナキウサギは寸方は似た様なもので、毛色が背面淡茶色、腹面帯白色で後足は白といふが恐らく前種の冬毛のものを見て居るのだらうといふ。

ハイイロナキウサギ (*O. griseus* Blanford) も耳の大きな種類で、頭胴一九〇、後足三四、耳長三五耗、背面は銀鼠色で、腹面は白い(恐らく冬毛)。チベットの崑崙山脈に棲む。

亞屬 *Ogotoma* に編入されるものは門齒孔と口蓋孔とが分離して、門齒孔は前上顎骨に輪郭の正しい孔をなし左右眼窩間幅は兩鼻骨の合幅よりも狭い特徴を有するもので、パラスナキウサギ (*O. pallasi pallasii* Gray) はその一である。之れはコビ沙漠の岩穴に廣く見出されるもので、その穴は入口に丸い糞と草や花莖の引き込まれて居る事で容易に發見される。冬毛では背面淡灰色で、後部はやゝ茶色を帯びて鮮やかな色をなし、前肢の前腕と手首足首は白つけて居る。毛色はモウコナキウサギと一寸似て居るが、趾端の裏の疣が裸出して居るので見分けられる。可なり大きな方で、頭胴長二〇五—二二〇、尾九—一九、後足三三—三六、耳長一九—二三耗位。トマスは外蒙西部の科布多の山地から、頭蓋の窮隆度の本種ほど著しくない、又體の小さなナキウサギの居る事を報告して居るが、アレンは本種の變種にすぎないと做して *O. pallasii pricei* Thomas とする學名にして居る。頭胴長一七八、後足

二九・五、耳長二〇耗。

ラダックナキウサギ (*O. Ladacensis* Günther) はチベット西部ラダック地方(の東部ルプシュ)に産し、頭胴長一九〇—二五〇、後足長(爪を含み)三二—三八耗、耳長一七—二六耗位で、夏毛では赤褐色で上毛がすり切れた部は基底の黒味が現れて居り、冬毛は黒味がかくれて橙茶色である。勿論夏毛は短くて冬毛は長い。ラダック北方の高原には可なり多く棲む。

亞屬 *Pika* に編入されるナキウサギは門齒孔と口蓋孔とはやはり仕切られて居るが、門齒孔は後部が細く伸びて居り、眼窩間幅は鼻骨合幅よりも廣いし、頭蓋天井がせむしの様に曲つて居ない點で前亞屬と分けて居るのである。

ミミアカナキウサギ (*O. erythrotis* Buechner) は體が大形で耳の後面が赤さび色をして居る種類で、他部は冬毛では淡茶色を混じた灰色で、夏毛では一樣に赤味を帯びた鮮やかな色である。頭胴長二二五—二八五、後足長三四—四二耗。東部チベット及び甘肅省の産。トマスは四川省西部から小形で耳の栗色なグローバーナキウサギ (*O. gloveri* Thomas) とするナキウサギを報告して居るが、恐らくミミアカナキウ

サギと同系でやゝ濃色な種類といふべきであらう。頭胴長一六五—二一五、後足三四—三五耗。

アルタイナキウサギ(*O. alpina alpina* Pallas)はアルタイ山脈を中心とした内外蒙の六千呎から八千呎位の山地に見出され、夏毛では橙赤色で、冬毛ではやゝ黄味を帯びた灰色である。頭胴長一九〇、後足(爪を除いて)三七耗といふから後足が割合に大きな種類である。冬毛に於て之れと比べると黄味がもつと少なくて銀灰色な變種ギンイロナキウサギ(*O. alpina argentata* Howell)が支那本部のニンシャから採集されて此の系の分布の東限だらうと言はれて居る。

マンシウナキウサギ(*O. hyperborea manchurica* Thomas)は滿洲の大興安嶺のものに付けた學名なのであるが、蒙古の庫倫の北四十五哩の邊にも棲む事がアンドリュウスによつてはつきりした。此のナキウサギは頭胴長一七〇—一八五、耳長一八一—一九、後足長二五—二八・五耗といふ割に小形のもので、夏毛では背面鮮かな赤褐色で背すぢが暗色、冬毛では背面もつと灰色で後部やゝ鮮麗、腹面は粘土色を帯びた灰白色である。滿洲の吉林省邊のアムールナキウサギ(*O. hyperborea cinereo-fusca*

Schrenck)はもつと色が濃色であつて、その差は少であるとはいへ、一定であるから亞種は分ける價值が有るといふ人もあるが、シュレンクが滿洲諸地から四變種も記載した事から考へると、體色の個體趨異も可なり大なるものがあるのであらうと思はれる。同亞種とすべき場合には、アムールナキウサギの學名が生きて、マンシウナキウサギの學名は其の異名とされるわけである。

上に述べた齧齒類は上顎門歯が二對有るので復門齒亞目に入れられ、以下に述べた齧齒類は皆上門歯が一對なので單門齒亞目に入れられて居る。

三、栗鼠上科

リス、ムサ、ビの様に樹上に棲む者では第四趾が最も長く、タラバガンの様に穴居する者は第三趾が最長で且つ掘爪を有するし、ハタリス、シマリスの様に地上性だが樹にも上るといふ様なものでは第三、第四趾の釣り合ひも中間的だといふ様な異ひが有り、リスでは臼齒の輪郭が四角形でタラバカンでは三角形に近いといふ様な異ひもあるが、頭骨の構造や下顎の運動などには共通な點が多く、後眼窩突起顯

著であるし、下顎は側咬筋の發達よきため前後にの運動もよく、左右各半が廻轉的運動も可能である。

(イ) タラバガン科

群棲穴居性で、鳴き聲を立て、體も太り、尾長も體の半分以下で、臼齒も三角形といふ風に、リス類との相違が多いので、タラバガン上科としてリス上科と分ける人もある位である。頬嚙は痕跡的である。齒式はリスと同様 $\frac{1.0.2.3.}{1.0.1.3.}$ 。

タラバガン(旱獭兒)(*Marmota bobak sibirica* Radde) は蒙古の北東部(庫倫の周圍)からダウリア、それから滿洲の大興安嶺の西部無林支脈、ハイラル等の三河地方、マンチゴリー邊等の半荒野に穴居群棲し、頭胴長四八〇—五〇〇、尾長一四〇—一五〇、後足長七七—七八耗位の、毛色は背面藁黄色に肉桂色を加味した様な色で黒味なく、腹面は帶黃褐色である。穴居性であるが、夏穴は淺くて出入口數個あり、冬穴は深く五—七呎もあり、草や枝を敷き、少量の食物即ち、種子、根、草等を貯へて、九月末から三月末まで冬眠する。冬眠室の少し上位に糞の有る大室が有るといふ。出入口は夏穴と違つて一個丈である。冬穴には二乃至四足が普通であ

るが、十四頭も居つた例も有る。あの邊は冬には地下六呎も凍るので穴の中も随分冷たいわけである。四月はじめに穴から出でて間もなく交尾し、六週間の産期の後二乃至七、八頭の仔が産まれ、六、七月にはハタリス位の大さとなつて親と一所に餌を食ひに現れて来る。毛皮が貂のまがひ物として使はれる位良質であるので獲り亡ぼされて来る傾向がある。之れには *Ceratophylus silantiewei* Wagner と云ふ蚤と *Phipicephalus* 屬のダニがよく寄生して居るので、此の寄生蟲が人にペスト菌を傳染させるものではないかといふ説が多いので日本にも有名になつた。

シセンタラバガン(*Marmota himalayana robusta* M.E.) は鼻端と兩眼の間とが黒く、耳は鮮かな茶色で、背にも黒味が混じて居るし、頭胴長七〇五、尾長一三五、後足長八八耗といふ風に足首の割に尾が短い種類で、四川省、雲南省西北の一萬四五千呎の高地に産する。

西チベットのラダック高地に普通なのはドラン(ラダックタラバガン)(*M. caudata* Jaacquemont)で、背筋は帶黒だが他部は黃赤色の大きな種類で、頭胴長六〇〇耗以上、尾長も毛を込めればその半分位ある尾長種で、後足長(爪を除いて)八五、頭

蓋全長も普通の兎より大きくて一〇五耗といふ。

チベット西北部のカシミヤとの境の邊にはもつと小形で、黒毛がもつと廣く散在し、尾の太くて短きコドラン (*Marmota aurea* Blanford) が棲む。頭胴長四五〇、後足長六〇、尾長一五〇耗位である。尾が長くて(二二〇耗)、頭胴長(四七〇耗)の半分近くもある *Mormota littledalei flavinus* Thomas もアルタイや外蒙のコブト河の邊に居るかも知れぬが確實とはしへぬ。

(ロ) 栗鼠科

體がタラバガンより細くて栗鼠狀で舉動の敏活な類である。臼齒の輪郭も四角である。



第五十二圖 コドラン

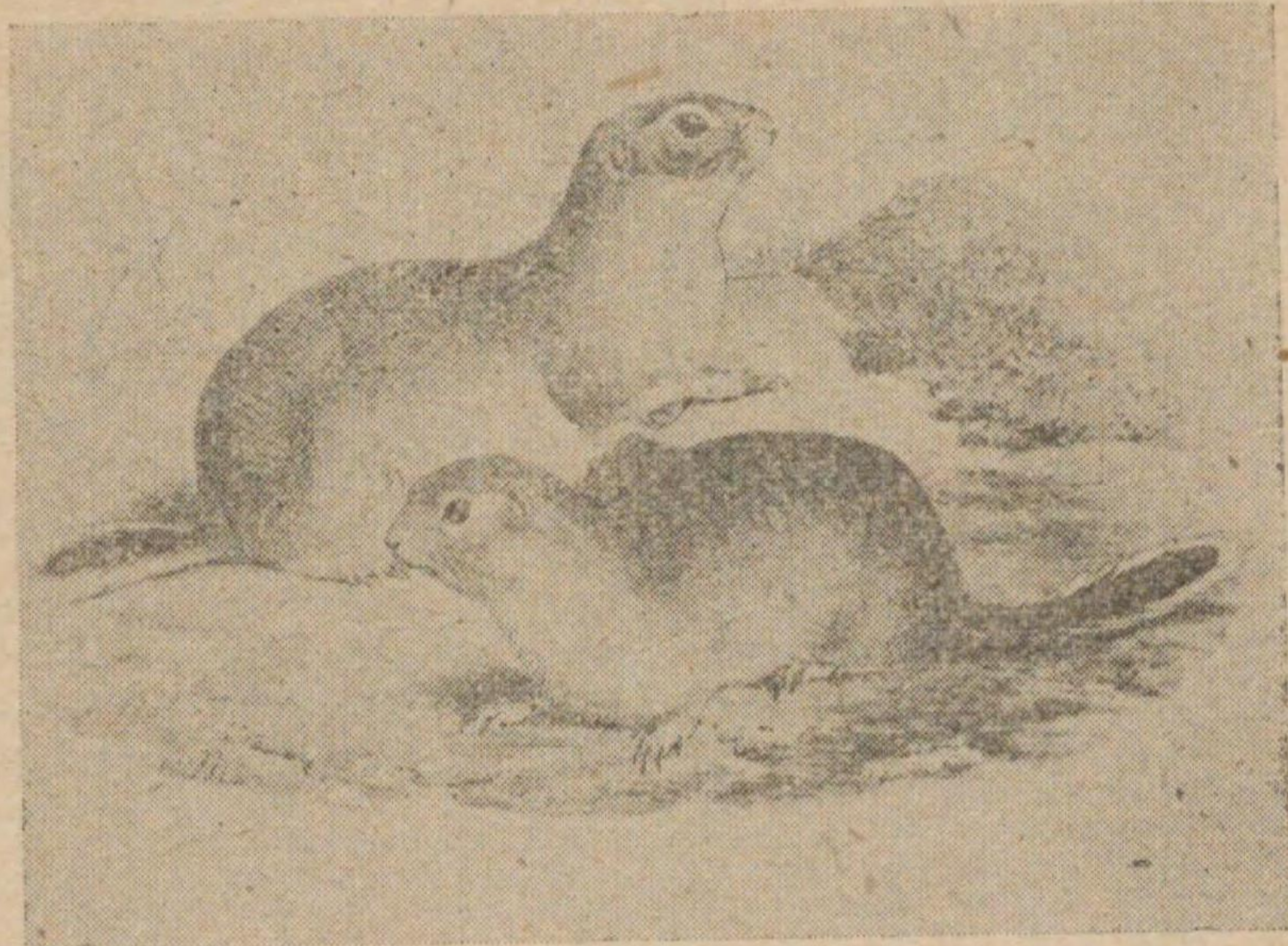
ハタリス (黄鼠) 屬 (*Citellus*) はシマリス屬と同様地上性、穴居性で、頬嚙があり、北米に多い事も兩者共通であるが、齒式が $\frac{1.0.2.3}{1.0.1.3}$ で、シマリス屬程、上前臼

齒數が不定でないし、乳房も二—三の五對でシマリスより一對多い。冬眠するもので、冬眠中は北米のハタリスでの研究によると、體温も外温より一度も高くなかつて、零度乃至零下二度までも降り、呼吸數も一分間一—四 (平時は一〇〇—二〇〇)、心搏數も一分間に五 (平時は二〇〇—三五〇) にも降るといふ。

オホハタリス (*Citellus eversmanni jacutensis* Brandt) は、後足の裏の中央が毛で被はれ、尾は體長の半分位で頭胴長二二〇—二五〇、尾長一〇〇—一一〇、後足長四五—五〇耗位の大形種で、夏毛では背の色黒味を帯びた灰色、冬毛ではずつと淡色である。東部シベリヤ、北滿から蒙古の北端、庫倫を圍んで北東、西南の産。

ダウリヤハタリス (*Citellus dauricus dauricus* Brandt) は、後足の裏の中央部はやはり毛で被はれて居るが、尾は體の半分以下である。毛色も淡色で、頸の側面や横腹、全腹面は冬には白い。蒙古のゴビ沙漠地方、マンチュリ、バルガ、ハイラルの産。熱河省、河北省、山東省、山西省東部には之れの變種ナンモウハタリス (*C. t. mongolicus* M. E.) が居り、夏毛は前種より濃色で黒毛が多く混じて居る。頭胴長一九〇—二一〇、尾長五五—六五、後足三六—三九耗。南滿洲平原のハタリス (*C.*

d. ramosus Thomas) 中央平原やホロンバイルのホクマンハタリス(*C. d. yamashinai*



第五十二圖 アラシヤンハタリス

Kuroda) も之れに近似したものである。アラシヤンハタリス (*C. d. alashanicus* Buchner) は赤茶色をした變種で、山西省西部から、寧夏省東部アラシヤンに見出され、又スナイロハタリス (*C. d. obscurus* Buchner) は赤味も黒味もない沙色の變種で、甘肅省西部や蒙古西部の沙漠に棲む。

フジロハタリス (*C. pallidicauda* Satunin) は後足蹠面の中央部が裸出して居る點に於ても前述の類と異ふが、尾の大部分が白くて唯尾背面の正中部四分の三位が褐色である。夏毛では一體に沙色で、冬毛ではやゝ

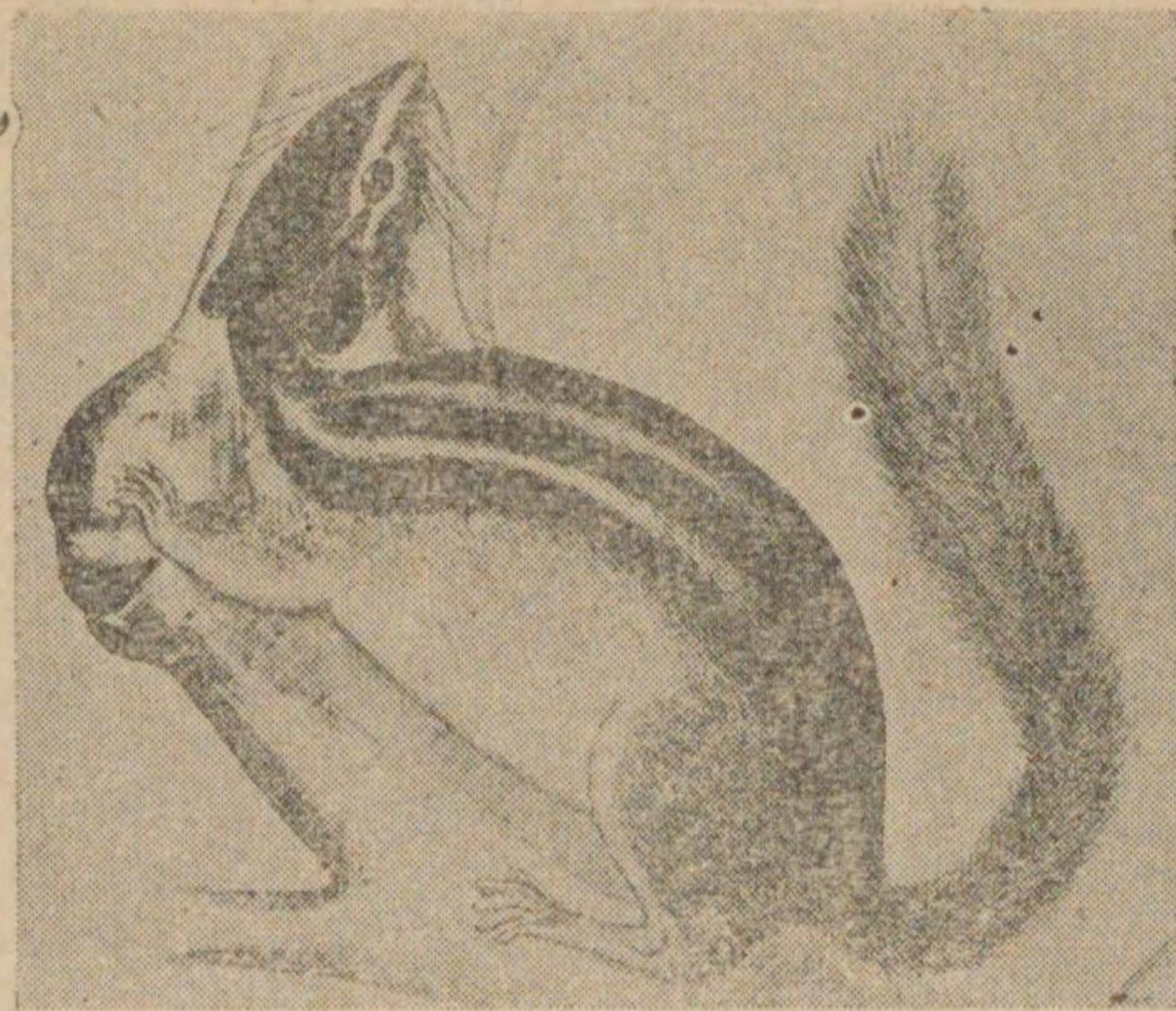
赤茶色を帯ぶが大差はない。此の種はゴビ沙漠の北草原に廣く分布して居る。南蒙

には前に述べたナンモウハタリス (*C. d. mongolicus*) が棲み、以北三五〇哩—四〇〇哩はハタリスの棲まぬ地帯で、その北、即ち烏得の北百哩邊以北の地帯、即ち南北には四、五十哩の帯に亘り、東西には随分廣い範圍に亘つて此のヲデロハタリスが棲んで居る。但し左様多數うよ／＼して居る程多くはないといふ。

シマリス (臊鬮子、花鼠、五道眉兒) 屬 (*Eutamias*) は大體に於てハタリス屬に似て居るが、上前臼齒も一對少なくて $\frac{1.0.1.3}{1.0.1.3}$ のも $\frac{1.0.2.3}{1.0.1.3}$ のもあり、乳房も一對少なくて四對である。そして體の背面に五本の縦縞が有る。北米には多くの種類が棲むが、アジアには一種數變種が見出されるだけで、ウラル山以西には居ないのである。

シベリアシマリス (*Eutamias sibiricus asiaticus* Gmelin) はシベリアからゴビ北東の落葉松樹林帯に棲み、落葉松の生果を食つて居るのも見られて居るし、落ちたのも食ふのであらう。穴居性でもあるが樹にも上るものである。背に五本の黒い縦條が有り、地の色は他の變種より淡くて赤味が少ない。頭胴長一四〇—一五一、尾長九三—一〇八、後足三五—三七耗。コシアカシマリス (*E. s. senescens* Miller) は肩

が灰色で、臀が茶褐色な點で識別される。やゝ大きな變種で、頭胴長一五二—一六五、尾長一一〇—一三二、後足三五—四〇耗。河北省、山西省の樹の有る地方に廣く分布し、一方にゴビの東南隅、熱河省等にも



第五十三圖 コシアカシマリス

分布し、他方に陝西省にも入り込んで居る。岩や藪に棲み、杏の果等を食ふのを見られて居る。冬眠の穴には食物の貯へも見出されて居る。オールドスシマリス (*E. s. ordinalis* Thomas) は陝西省の北に當る緩遠省のオールドス沙漠の縁の地域に見出される淡色の變種である。カンシユクシマリス (*E. s. albogularis* Allen) は色が暗色な變種で、背も臀も暗色がかつたオリーブ色である。甘肅省の産。鮮滿のテウセンシマリスの學名は先取權上から *S. s.* と、*E. sibiricus uthensis* (Pallas) が正しい。

縦縞こそ無いが穴居性で頬嚙の有る點や頭蓋骨が扁平な點でシマリスに似て居るが、形は可なり樹上性の栗鼠類に似て居り、乳房は一—二の三對で齒式は $\frac{1.0.2.3}{1.0.1.3}$ と *S. s.* シマリス屬とリス類との中間的な、吻の長さ、イワヤマリス (臊羊) 屬 *Sciurotamias* と *S. s.* 屬のものが、中、北支那、滿洲にかけて一種數變種が知られて居る。ダビッドイワヤマリス (*S. davidianus davidianus* M.E.) は腹面灰白色、背面灰色で、頭胴長一九五—二三〇、尾長一三五—一四〇、後足長五〇—五三耗位で、樹にも上れるが、主として岩や崖に棲み、岩の穴や堆石下に穴居して鼠と同様な食害を人に與へる。滿洲、熱河、河北、山東、山西、甘肅の諸省に分布して居る。アシグロイワヤマリス (*S. d. consobrinus* M.E.) は腹面が茶色を帯び、後肢の黒い變種で背はオリーブ褐色。四川省の濕氣の多い高原に棲む。之れの褪色した様な色で、後肢も黒くないコホクイワヤマリス (*S. d. salitans* Heude) は、湖北省、河南省、陝西省の邊に分布し、頭胴長三一〇—三七五、尾長一二〇—一四五、後足長五三—五九耗で可なり大きい。

フォレストイワリス (*Rupestes forresti* Thomas) は大體前の屬と似たものではあ

るけれども、足蹠が毛で被はれないで、後部以外は裸出して居るので前屬に見ない長い蹠疣あり、第一對目の前臼齒が缺けて齒式が $\frac{10.13}{10.13}$ となり、體側に狭い白帯が有る。ビルマ境に近い雲南省西北部の産で、頭胴長一九四—二五〇、尾長一三〇—一八〇、後足長四七—五四耗。

もう一屬、前臼齒がやはり $\frac{10.13}{10.13}$ の齒式を有する極めて大形な *Ratufa* とよ屬がある。頭胴長四一〇—四七〇、尾長、毛を含めて計れば頭胴長よりも三〇—五〇耗長いといふ大きな者で、印度、ネパール、ビルマ等の森林に産するが、支那領内でも雲南省の西南部、ビルマ境の邊にオホリス (*Ratufa gigantea gigantea* Mac Clelland) が産し、海南島にはハイナンオホリス (*Ratufa gigantea hainana* Allen) が産する。共に耳には毛房があり、背面の色は黒又は赤褐色だが、腹面の色は前者では鮮黄色で、後者ではもつと暗色である。

タイワンシマリス屬 (*Tamias*) は體背面に縦縞の有る點では前出のシマリスに似て居るが、樹上生活をなし、耳には少量の白い毛房が有り、縞も夏毛では三條共殆んど黒いが、冬毛では外側の條は褐色であまり目立たない種類もある。乳房が一

—二の三對な點もシマリスと異ふ。頭蓋骨もシマリス程扁平でなく頬嚙もない。マツクレランドシマリス (*T. macclelandi inconstans* Thomas) は佛印の東京や支那の雲南省に産する小種形で、頭胴長一〇〇—一〇五、尾長九五—一〇〇、後足長二六一—二七耗位で、眼下條と背の外側條とが續いて居り、その外側條は冬は褐色であり腹は赭色である。此の條が冬にも黒色な變種 (*T. m. barbei* Byth) も雲南省の西部ビルマ境に産し、共に後述種より低地に見出される。頭胴長一〇五—一一二、尾長一一〇—一一五、後足長二九—三一耗位。

スピンホーシマリス (*T. swinhoei swinhoei* M.E.) は腹面が帯白色又は淡黄色で體側條は眼下條と續かぬ者多く、體や後足もやゝ大きい。五條の黒縞の外の部は肩より前方の背面は暗オリーブ色で、後背面はやゝ淡く、外側の體側條の前は赤味を帯びて居る。頭胴長一一五—一四一、尾長一〇六—一一〇、後足長三二—三五耗。四川省中史の高い山林から雲南省にも分布して居る。熱河省、河北省のは之の變種でネツカシマリス (*T. swinhoei vestus* Miller) と命名され、肩より前方が赤さび色である。クラークシマリス (*T. swinhoei clarkei* Thomas) は五縦條が黒くて條間は肩

より前方がオリブ色。後方體面は帯白色乃至鈍黄色で、腹面は殆んど純白。四川省南部や雲南省西部に産する。福建省のは腹面が鈍黄色を帯びて居る點がちがひ、*T. s. maritimus* Bonhote と命名されて居る。海南島のは頭胴長(一二〇—一二二耗)の割に後足長の短(二五—二九耗)點でも上述の亞種と異ふ。體色は福建省のと殆んど區別付かぬ個體も有るが、體側部後方は赤茶けたのも有る。ハイナンシマリス (*T. s. hainanus* Allen) と呼ばれて居る。

ハナナガリス屬 (*Dremomys*) は臺灣のオーストリスをも含む屬であり、支那では揚子江流域以南に産するのであるが、吻の長い點や耳に毛房の無い點はイワリス屬に似て居り、乳房は一—二の三對で、足蹠は大部分裸出して居るので長い蹠疣が二つ目立ち、背がオリブ色なのに、股とか尾の下面とか頬等に鮮やかな色斑の有る傾向が多いので目立つ色彩である。齒式はリスと同様 $\frac{1.0.2.3}{1.0.1.3}$ 。

パーニーハナナガリス (*D. pernyi pernyi* M.F.) は背はオリブ色で、尾の基部の下面が赤さび色。耳に黄斑又は白斑有り、胴腹面はやゝ赭色を帯ぶ。頭胴長一九一—二二〇、尾長一四四—一八〇、後足長四四—四八耗。四川省と雲南省の北西部

との産。雲南省中部のものは胴腹面が白く、前膊の下面も白い事と、やゝ小さい事(頭胴長一八〇、尾長一五五、後足長五一)とで前者の變種とされ、ウンナンハナナガリス (*D. p. flavior* Allen) と呼ばれる。雲南省西南部のは背が褐色がかり前體部は暗色強(變種でハウエルハナナガリス (*D. p. howelli* Thomas) と呼ばれる。四川省東部には大體原種の色に似て居るが腹白く、耳の斑紋の不鮮明な變種シセンハナナガリス (*D. p. modestus* Thomas) が棲み、湖北省、湖南省北部には原種の様な耳斑が有るが、腹面白く、前膊下面は灰色な變種コホクハナナガリス (*D. p. senex* Allen) が棲み、福建省、浙江省、安徽省のは背面褐色で前部も暗色でな(變種フクケンハナナガリス (*D. p. calid* or Thomas) が棲む。

モ、アカハナナガリス (*D. rufigenis pyrrhomerus* Thomas) は背面は一樣にオリブ色だが、尾の下面は全長に互つて正中部赤さび色で、體腹面は黄白色だが、臀から股にかけて顯著な赤斑あり、頭胴長一九五—二一〇、尾長一四〇—一六〇、後足長五〇—五四耗。湖北省の四川境、宜昌の邊に産する。之れの變種で頬及び頸部が赤さび色で頭頂や肢の外側の赤(ハイナンハナナガリス (*D. r. riudonensis* Allen))

は海南島に産し、頭頂と肢の外側が赤くない點で前者と識別される種變カントンハナナガリス (*D. r. melli* Matschie) は廣東省に棲む。又雲南省の南隅からはやはりモアカハナナガリスと同種の異亞種としてシロハラハナナガリス (*D. r. ornatus* Thomas) と呼ばれるものが報告されて居るが、之れは頭骨も吻もより長く、耳背に黄斑有り、頬は赭土色で、胴背はオリーブがかつた赭色、腹面は白、腹面の色は鮮赭色で白く縁どられて居る。

クリハラリス屬 (*Callosciurus*) も臺灣にも棲む南アジア的のもので、森林の樹上に棲む事も體の形も、齒式の $\frac{1.0.2.3}{1.0.1.3}$ な事も、齒の形も北方の栗鼠に似て居るが齒が小さく、耳に毛房が無く、腹面の色が赤又は栗色で、陰莖骨も栗鼠と違つて骨柄と之れと可動的に關節して靱帯で連結された扁平な骨片とから成つて居る。乳房も腹部に二對有るだけなのは一時に産まれる仔の少ない事と相關するのであらう。その代り一年に出産する回数が多いといふのは南方の諸獸類に見る現象で、北方の者は一産の仔数が多いが産の回数が少ないのである。

腹面が大體栗色で、暗色と白との縦條の無いのが *C. erythraeus* とよふ種類で、

支那に七亞種識別され、腹面に白色部に仕切られた暗色の縦條が三本有るのが *C. quinguestriatus* のよふ種類と二亞種が識別されて居る。

ハイナンクリハラリス (*C. erythraeus castaneiventris* Gray) は海南島産で、背面はオリーブ色、腹面は栗色又は赤さび色である。頭胴長二一〇—二二五、尾長一七五—二〇五、後足長四四—五五耗位。ニンポークリハラリス (*C. e. ningpoensis* Bonhote) は福建省、浙江省の産で、前亞種より色が淡く、腹面も橙赤色である。尾が少し短くて一六〇—一八三耗である。ステイアンクリハラリス (*C. e. styani* Thomas) は腹面が一層淡色な變種でクリーム黄色乃至淡赭色である。浙江省、江蘇省、江西省、安徽省の産。ボンホートクリハラリス (*C. e. bonhotei*) は四川省に産し、前述の諸亞種より暗色で脚が黒く、やゝ體も大きい。ゴルドンクリハラリス (*C. e. gordonii* Anderson) は耳の色が他部の背面の色と異つて橙赤色である。背面は一樣に暗色である。雲南省西南隅の産。雲南省の西北ビルマとの境の高地のはタカネクリハラリス (*C. e. michianus* Robinson et Wroughton) と名づけられ、前亞種より淡色で、背すぢの暗色が體側部に對して目立つ。グローバークリハラリス (*C.*

e. gloveri Thomas) は前亞種より耳が赭色であり、又腹面の正中に灰色のすぢがな
 5 點で識別される。

ビルマスデハラリス (*C. quinquestriatus quinquestriatus* Anderson) は雲南省の西
 北隅からビルマにかけて棲み、腹面に三條の暗色の縦縞があり、その間は白條で仕
 切られて居るし、體背面はオリブがかる褐灰色で、背すぢに赤味が加はつて居
 る。頭胴長二四〇、尾長一八一耗位。之れの變種ウスデハラリス (*C. q. sylvester*
 Thomas) は西部雲南省の九千尺位の高地から採集されたもので、腹面の暗色な三
 縦條の内正中のははつきりして居るが、左右の二條はあまりはつきりして居ない。

リス (栗鼠、松鼠、灰鼠) 屬 (*Sciurus*) は前屬と異つて東半球の北部に分布する
 もので、毛の房々した尾は頭胴長の半分位ある。樹上生活者で、耳には毛房が有り、
 冬毛では特に目立つ。乳房は一—三で四對有り、齒式は $\frac{1.0.2.3}{1.0.1.3}$ で、臼齒は四角形
 陰莖骨は右手を半分開いた様なスコップ形で、拇指に相當する様な突起が有る。歐
 洲のもシベリアのも、樺太、北海道、滿洲、朝鮮のも、支那のも皆 *Sciurus vulgaris*
 の學名の中に編入されるものだが、亞種としては支那のも二亞種に分けられる。

キタシナリス (*S. v. chilensis* Sowerby) は河北省の森林に棲むが、その森林が段
 段切りへらされるのでリスも少なくなつて來た。體色は冬毛では暗灰色で黒化個體
 も有り、腹は白く體側や尾や肢には赤味を帯びた所もある。頭胴長二一五—二四〇
 尾長一七五—一九七、後足長六一—七五耗位。モウコロリス (*S. v. fusconigrans*
D. vigubski) はシベリアのバイカル地方や蒙古北方の落葉松林に棲み、色も大して
 北支のと異らぬが平均的にいふと赤味が一層少なく、頭胴長二四〇、尾長一六〇、
 後足長六五耗位。滿洲の興安嶺邊まで本亞種も分布して居るが、北滿洲にはなほホ
 クマンリス (*S. v. manchuricus* Thomas) が棲み、頭蓋骨が平均して北支のより大
 きいと云ふのであるが、大した異ひではなし。南滿洲や朝鮮のはテウセンリス (*S.*
v. coreae Sowerby) とあつた。

(ハ) 鼯鼠科

栗鼠科中の亞科として居る人も多い程栗鼠科に似た點が多けれども、足首から
 手首にかけて體側に毛の有る皮膜が張つて居り、掌、蹠の外側に軟骨の曲棒が有つ
 て皮膜を擴げる役に立つ等の異ひがあるので、別科とする人も有るのである。夜間

活動性で晝は樹洞等に棲む。果實、樹皮、嫩葉等を食とする。

モ、ンガ（飛鼠）屬（*Pteromys*）は、從來 *Sciuropterus* とすふ屬名が廣く使はれて居たが、*Pteromys* の方が二十五年も先行して居るので此の方を使ふべきだといふ。ムササビより小形で、尾の毛もリスの様に左右に向つて生へて居るので尾が扁平である。皮膜も膝と腕關節とまできり伸びて居らぬ。東西兩半球の北部に分布する。

ビニツヒナーモ、ンガ（*Pt. volans buechneri* Satunin）は甘肅省と山西省西部とから知られ、夏毛で見ると、東部シベリアの淡黄褐色なのに比して、暗色で殊に尾の暗色が濃く、殆んど黒褐色といふべきで、冬毛では全背面淡赤褐色である。頭胴長一五六—一九八、尾長一〇〇、後足長三三—三五耗位。ゴリウモ、ンガ（*Pt. v. ulungshanensis* Mori）は前種や滿洲のやロシアのに似て居るが小さくて色濃く、朝鮮のチョウセンモ、ンガ（*Pt. volans aluco* Thomas）とは體色著しく異なるといふのであるが、頭胴長一五九、尾長一一七、後足長三五耗といふから前種より小さいとはいへない様である。熱河省の南部産。

シロクロモ、ンガ（*Pt. alboniger orinus* Allen）乳房が三對（前種では四對）な點でも前種と異ひ、又背面は暗色なのに皮膜の外側部に狭い白帯が有る。前腕も毛の端が淡色で殆んど白い。大きな種類で、頭胴長二〇三、尾長一八二、後足長四〇・五—四五耗。雲南省の西南部からネパールにかけて棲む。

ハイナンモ、ンガ（*Pt. electilis* Allen）も乳房は三對又は二對の南方的なもので、セイロンやマライ半島に類似種を有するものである。背面は赤さび色で皮膜の方にだん／＼茶色になり、目の周圍は黒ずんで居り、唇から項にかけて白條有り、腹面は白。頭胴長一六三—一七三、尾長一三五—一五九、後足長三二—三五耗位。

ケアシモ、ンガ（毛足飛鼠）屬（*Belomys*）は耳が大きくて耳の基部に長さ（三十種位）細い毛の房が有る事と趾に毛が有る點で前屬と見分けられるが、臼齒列の齒冠の突起が複雑（縦皺に仕切られて）な點が一層著しい異ひである。ペーアソンケアシモ、ンガ（*B. pearsonii pearsonii* Gray）は雲南省西南部、東京、ネパール等に分布し、背面は赤褐色で黒毛が交り、頭胴長二五〇、尾長一二五耗位。臺灣のケアシモ、ンガ（*B. pearsonii kaleensis* Swinhoe）に近似した亞種とされる。

ムサ、ビ(鼯鼠)屬(Petaurista)は南方に多いもので、モ、ンガ類より大きくて尾は多くの種類では圓柱状で、體側膜は踝まで尾膜も脛の中程より下まで達して居る。

アカムサ、ビ(P. petaurista rufipes Allen)は背面は銹赤色で、腹面は淡紅色であるが、飛膜の方にゆくと濃くなつて銹赤色となつて居る。頭胴長約三七五、尾長三三〇、後足長七四耗位。此の亞種はジャワのものの変種とされるものであるが、福建省や廣東省の様な東方に見られるのは面白い。シセンアカムサ、ビ(P. p. rubicundus Howell)は色がやゝ暗色がかかり、尾の端が黒いので前述の亞種と識別され、後足長七二耗位。四川省南部の叙洲の西北から得られた。

シロアカムサ、ビ(P. alborufus alborufus M.E.)は大形で、鮮やかな色をして居り、肩や飛膜背面は大體栗色をして居るが、胴體の中以後は黄色であり、吻や前額から耳まで、頬の下部、頸の側面は白色、飛膜も前肢基部の邊は白色、腹面は喉が白い丈で他部では淡橙赭色である。頭胴長五八〇、尾長四三〇耗位。頭蓋全長七八耗位。四川省中部馬邊山や南方の山地の産。ウンナンシロアカムサ、ビ(P. a. och-

raspis Thomas)は腹面が一層白に近く、胴後部背面の帶黄部も一層淡色である。雲南省の西部に産する、コホクシロアカムサ、ビ(P. a. castaneus Thomas)は湖北省の揚子江沿岸の山林の産で、前二亞種と似て居るが肢が黒い。

ウンナンムサ、ビ(P. yunnanensis Anderson)は雲南省南西部の産で、前肢からその付け根の飛膜部、後肢や尾の端半部等の背面は煤色で、他背面は濃栗色、腹面は黄白色。頭胴長五〇〇、尾長五七五、頭蓋全長七六耗位。

ハイナンムサ、ビ(P. hainanus Allen)はフィリッピンのに似た暗色の種類で、頭黒く胴背も暗色である。腹面は白。頭胴長四一〇—四二〇、尾長四五九—四六八、後足長八二耗位。海南島の産。

シロマダラムサ、ビ(P. punctatus marica Thomas)は頭は黒、尾や肢は赤色であるが、頭胴背面に直径一寸近い白斑が三十個以上もある。雲南省の産でマラッカのものの変種とされて居る。頭胴長三五〇—三七三、尾長三四七—三八〇、後足長五九—六三耗位。

ミミアカムサ、ビ(P. xanthotis M.E.)は四川省中部(馬邊山)、甘肅省、雲南省

に棲み、背面黄灰色で、耳の基部に橙赤色の斑有り、肢黒く、頭胴長三五三—四三三〇、尾長三三〇—三四五、後足長六五—五八耗位。

クラークムサ、ビ (*P. clarkei* Thomas) は耳の基部に赤錆色の濃い斑が有るが、肢が赭色で、頭は灰色である。頭胴長三〇〇—三六八、尾長三七〇—四〇三、後足長五九—六八耗位。産地は雲南省西部から四川省にかけての分布なので、前種と異なる産地も有るわけである。アレンの言ふ程兩者の區別のはつきりしたものでないだらうと思はれる。

河北省や滿洲熱河省にはネツカムサ、ビ (*P. sulcatus* Howell) とすふ暗色な小形種が有る。

ハネグロムサ、ド (*Aeretes melanopterus* M.E.) は上門歯が廣くて縦の溝が有る點で、他のすべてのムサ、ビやモ、ンガと違ふので、別屬とされるものであるが、尾も圓柱状でなくて扁平である。體も小さい方で、頭胴長三〇五—三一〇、尾長三三〇—三四三、後足長六三—五五耗位。北京附近の産で、背面は黄灰色と黒との混合した様な色調、腹面は黄白色。

アカアシムサ、ビ (*Tr. gopferus xanthipes* M.E.) は又、上顎の最後前臼歯が第一眞臼歯より大きくて、側面から見ると前方の前臼歯を被ひかくして居るし、耳の基部に顯著な毛房が有るので別屬とされる。體の背面も赭いが、肢も赭く、腕前膜も赭い。尾は灰色で、腹面は帯白色である。頭胴長三〇〇、尾長二七〇、後足長六〇耗位。河北省の産。湖北省や四川省の揚子江上流地方には之れに似て、もつと色の濃い變種が居り、コホクアカアシムサ、ビ (*T. x. mordax* Thomas) と命名されて居る。又雲南省西部にも之れに似てや、灰色がかつた變種が産し、ウンナンアカアシムサ、ビ (*T. x. edithae* Thomas) と命名されて居る。體もや、小さく、頭胴長二六八、尾長二六〇、後足長五六耗位。

四、海狸上科

栗鼠型上科に入れて仕舞ふ人も有るが、随分變つた性質のものであるから分けてもよいものと思ふ。後眼窩突起も殆んど缺如し、鼓骨胞の内は全く中空であるし、槌骨や砧骨の形も特異である。齒式は $\frac{1.0.1.3}{1.0.1.3}$ であるが、前臼歯と眞臼歯とは殆ん

ど同形同大で、珧瑯質の層薄く、無根齒である。木質を多く食べるせいだらうが、胃は屈曲が少なく、大きな腺が附属して居る。水をせき止めて棲所をつくり、水中生活が主調をなすのであるが、目や耳は小さく、光澤のよい毛が密生し、後肢には蹠が發達し、尾は扁平で鱗に被はれて毛なく、橈の役目をする。包莖腺に相當する皮膚腺が發達して麝香腺をなし、高價な海狸香 (Castoreum) を分泌する。毛皮も獺以上の價値があるので、狩獵の目的物とされた爲め、西半球でも大部少なくなつたが、東半球では殆んど亡びかゝつて、歐洲では僅かにエルベ河ローム河の流域に残ると言はれて居たが、蒙古の西北境やウラルの邊にも少しは残つて居る様で珍らしい。本上科に入るのは一科一屬丈であるが、種類は人によつては西半球のと東半球のとに分ける人もあるが、東半球の (Castor fiber) も亦二、三の亞種に分ける人も有る。それにしたがへば蒙古の西北境科布多のブルンゲン河のはコブトビーバー (Castor fiber birulai Serebrennikov) と命名されるもので、ウラル邊のより色が濃くて暗色を帯ぶといはれる。一九二九年の命名であるが、若し未だ生き残つて居るとしても少ないものである事は疑ひない。

五、跳鼠上科

沙漠に棲む類は後足が長くなつて跳ねる様に出來て居つて、一見して鼠上科と區別されるが、草原や森林帯に棲む類はそれ程外形は異相を呈しないけれども、齒式が $\frac{1.0.1.3}{1.0.0.3}$ で上前臼齒が一對有るし、咬筋の側部が顴骨の前縁に廣い區域に互つて付して居る。

(イ) 尾長鼠科

此の科のものは藪林棲で、沙漠棲でなく、後肢の蹠骨は伸びて居らず、頸椎間に癒合が起つて居らぬ。

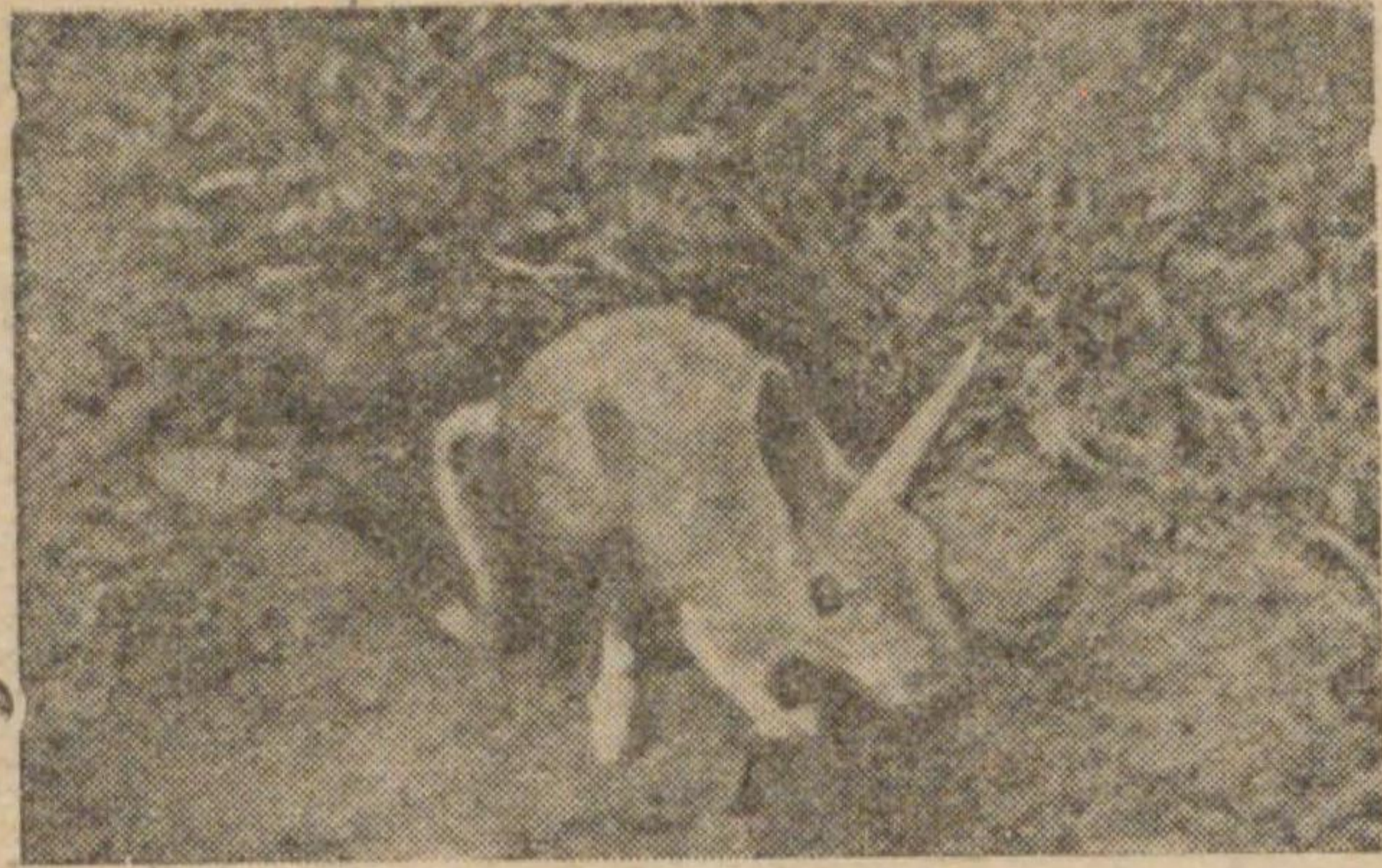
ヲナガネズミ (尾長鼠) 屬 (Sicista) は尾が頭胴長より著しく長し事と、上前臼齒が一對有る事との外には一見鼠類と異はぬ様な類で、乳房は2—2の八個。樺太にも一種居るが、支那のはマンシウヲナガネズミ (Sicista concolor Buechner) とはれ、頭胴長七一、尾長一〇五、後足長一八、耳一三耗位。頭胴の背面は褐色で體側面はやゝ淡色で赤味を帯び、尾は全く黒い。東滿の外に支那といつても甘肅省と

四川省との高地の樹叢に見出されたが、却々入手し難いとされる。

Zapus 属は後肢が前肢より長く伸びて居り、後足丈でも頭骨長より遙かに長し。尾も亦後足長の四乃至六倍ある。此の属は北米にも澤山の種類が有るが支那にも四川や甘肅の高地に棲む事は、アジアと北米との哺乳類の同根を示す例だといはれる。スヂハラヲナガネズミ (*Zapus setchuraris* Pousargue) は背筋は暗色だが背面一體は赤茶色で、腹面は白いが、正中に赤茶色の縦條が有る。頭胴長七〇—一〇〇、尾長九五—一二〇、後足長二八—三一耗位。西康省の打箭爐邊の高地、一萬二千尺乃至二萬五千尺の邊に棲む。腹に赤茶色の縦條がなくて全く白い變種シロハラヲナガネズミ (*Z. s. vicinus* Thomas) は、甘肅省の一萬尺位の高地から採集され、頭胴長七八、尾長一四四耗とふわけで前種より長尾でもある。

(ロ) 跳鼠(跳兔)科

後肢が、脛骨も腓骨も長くて末端が癒合し、蹠骨も長く、頸椎間に癒合起り、外見は鼠と大層異ふ。上前臼齒は小又は缺如。北米、アジア、アフリカの沙漠や荒原に分布して居るが、支那にも七属も有る。



第五十四圖 南路のトビネズミ

シベリアトビネズミ (*Allactaga sibirica* Forster) は後趾五本共有るが、中央に近い三本は長くて内外縁の二本は短小。鼓骨胞はあまり異常な程度にはふくれて居らず、上前臼齒有り、門齒は少し出齒でバイカル地方や東北蒙、熱河省等に産し、ゴビ沙漠のより暗色なるのみならず、體もやゝ大で、後足長七〇—七八耗位ある。ゴビトビネズミ (*All. s. annulata* M.E.) は之れの變種で、體色が淡いのみならず、體も後足も少し小さい。頭胴長一二〇—一四〇、尾長一八七—二〇二、後足(爪を含み)六八—七二、耳長三八—四三耗位。ゴビ沙漠産(甘肅省まで)。

カハルトトビネズミ (*All. bullata* Allen) は頭胴長一〇五—一三三、尾長一六五—一九五、後足長六四—七〇耳長三一—四〇耗位で、耳が小さいのに、鼓骨胞は大きく丸くふくれて居る。體色はゴビトビネズミに似て居り、やはりゴビ沙漠の産である。

コアシトビネズミ (*Allactagulus pumilis potanini Vinogradov*) は、後足小さくて六〇耗以下で、上前臼歯を缺き、耳も小さくて二八耗位。頭胴長は一二五耗位。綏遠省のオルドス沙漠の産。

オホミミトビネズミ属 (大耳跳鼠) (*Euchoreutes*) は後趾の状態は上述の二属に似て居るけれども、陰莖や陰莖骨の形状が大いに異ひ、耳が廣くて且つ頭より遙かに長し。オホミミトビネズミ (*E. nasolashanicus Howell*) は寧夏省アラシヤン地方や内蒙の産で、體色橙赭色で、砂色でなく、頭胴長七四—一〇〇耗、尾長一五〇以上、後足長四一—四二・七、耳長三七・八—四一耗位。

コミ、トビネズミ (*Cardiocranius paradoxus Satunin*) は上前歯に溝が有り、鼓骨胞が著しく大きいので頭蓋骨が上から見ると心臟形をして居る。小形で頭胴長六〇尾長七〇、後足長二七、耳長五耗といふ様に、耳が殊に小さい。甘肅省の北西、中央ゴビ等で獲れた。

ソワービーカンガルネズミ (*Dipus sagitta sowerbyi Thomas*) は後趾三本丈で、蹠骨は癒合して一本となり、上前歯に溝有り、尾の先端は毛が扁平な房になつて居る。上前臼歯は有つても極く小。頭胴長一一〇—一二八、尾長一五六—一八四、後足長六一—六七、耳長一一—二三耗位。熱河省、陝西省、蒙古の産。

アンドリューストビネズミ (*Stylodipus telum andrewsi Allen*) はやはり三本趾だが、全長に互つて矢羽状の尾を有し、體色は砂色で、頭胴長一二〇—一三〇、尾長一四〇—一五〇、後足長五一—五九、耳長一五—一九耗位。コビ沙漠に廣く分布する。

コッロフトビネズミ (*Salpingotus kozlovi Vinogradov*) も三本趾で、上前歯に溝有り、鼓骨胞著しく大きく、體は極めて小形である。中央ゴビの産で、頭胴長五一尾長一二六、後足長二五・二、耳長一一・八耗位。フトフトビネズミ (*S. crassicauda Vinogradov*) は蒙古の西北即ちゴビアルタイの邊に産し、前種に比して尾が遙かに短し。即ち頭胴長四一、尾長九三・二、後足長二〇・五、耳長五・六耗位。

六、鼠 上 科

前臼歯が無く、眼窩前孔が丸に近く、側咬筋は吻の上縁に達する事稀で、盲腸が

有る。從來ヤマネ類中に編入されて居た猪尾鼠科もミラー、ギドレイ兩氏の一九一八年の分類法以來、此の上科に編入がへされたので、それによれば支那には猪尾鼠科 (*Platacanthomyida*)、モグラネズミ科 (*Spalacidae*)、タケネズミ科 (*Rhizomyidae*)、キヌケネズミ科 (*Cricetidae*)、ネズミ科 (*Muridae*) の五科となるが、本書では最後の二科を合併してネズミ科 (*Muridae*) とし、之れを多くの亞科に分ける一般の分類法を採用する。

(イ) 猪尾鼠科

印度のトゲヤマネ屬 (*Platacanthomys*) と支那の福建省のチヨビネズミ屬 (*Typhlomys*) とを含み、從來はヤマネ上科に入れられたのであるが、後者で見ると、眼窩前孔も、顴骨も鼠形で、前臼齒もなく、一寸程の盲腸も有るし、臼齒冠の褶もヤマネの様に横褶でなくて斜である等の點からして鼠上科に編入がへされたものである。チヨビネズミ (*Typhlomys cinereus* M.E.) は頭胴長七一八九、尾長九四一一、後足長一九一二〇、耳長一四一一六耗位で、背面は鼠灰色。腹面は灰白色。福建省西部の七千尺位の山の林地に棲む。頭蓋骨の形は腦頭蓋がふくれ、吻細くて

ヤマネに似て居る。

(ロ) モグラネズミ (鼯鼠) 科

臼齒の齒冠を見ると鼯鼠類に似て疣狀突起なく、平面的な多稜形であるが、體形は一層地下生活に適して居り、前肢は掌も廣く爪も巨大であり、目小さく、體形もモグラに似て太つて居り、尾は短い。支那領の北部に産するものは皆、臼齒が無根齒で、成長の止まない點に於て西亞細亞や歐洲に分布する類と異なり、モグラネズミ屬 (*Myopanax*) に屬するものである。乳房は1—2で六個。顴骨弓も腦頭蓋も幅が廣く。

キタシナモグラネズミ (*Myosorex mysosorex psilurus* M.E.) はシベリア系の變種で、モウコモグラネズミ系より下門齒の根深く、上第一臼齒の内側に二凹溝有り、後頭骨後端面のちよん切られた様な點も眼窩前孔の形も異ふし門齒孔は前上顎骨内に止まる。はじめ北京南郊から採れたのは頭胴長二七〇、尾長三五、後足長(爪を含みて)四八・五耗位だったが、其後熱河省の承德邊や山東省からも同種が報告された。大興安嶺の東西兩斜面や吉林省のマンシウモグラネズミ (鼯鼠) (*M. eysian-*

us (Thomas) も之れと同系の變種といはれるし、ゴビや山西北部のアルマンドモグ

ラネズミ (*M. armandii* M.E.) やトウモウモグ

ラネズミ (*M. komurai* Mori) もそれと近似の種

といはれるが、毛が一層軟かで第一上臼齒の内

側に唯一個の凹溝を有するのみである。アルマ

ンドモグラネズミは吻の前端部が白いのに對し

てトウモウモグラネズミは黄灰色である。後者

は南滿の四平街や熱河省北部、東蒙の産である。

頭胴長二〇九、尾長四七、後足長三一耗位。

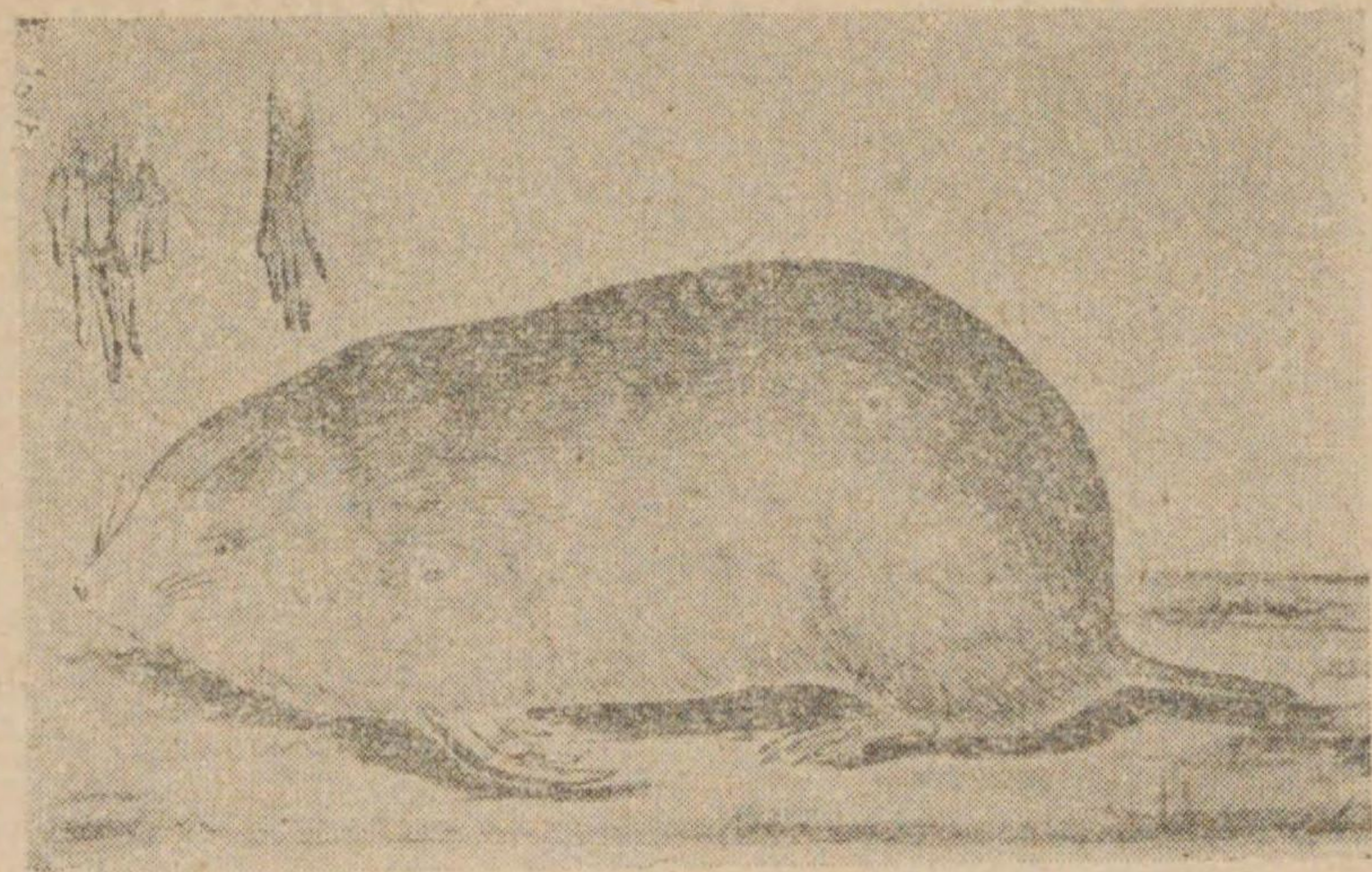
モウコモグラネズミ (鼯鼠、犂鼠) (*M. fon-*

tanerii fontanerii M.E.) は後頭骨後端面のち

よん切られ方が前の諸種の様に急でなく、門齒

孔は半分程上顎骨にまたがり、下門齒の根は比

較的に浅い。外形は前述の種類に似たものである。頭胴長一七二—二〇四、尾長五



第五十五圖 トウモウモグラネズミ

三—六九、後足長三一—三七耗位。山西省に廣く分布し北は緩遠にも東は河北省西部にも及ぶ。カンシユクモグラネズミ (*M. f. cansus* Lyon) は之れの小形の變種で頭胴長一六〇—二〇五、尾長四一—六五、後足長二七—三六耗位。甘肅省や陝西省西部の大白山の邊に分布する。ベーレイモグラネズミ (*M. f. baileyi* Thomas) は甘肅のと僅に尾が短くて、足がやゝ毛深い點で異ふだけといふ様なものだが、西康省の打箭爐の南方の産なので異つた名を付けてもよからうといふ位の所。頭胴長一七三、尾長三三、後足長二六耗位。此の屬の分布の南限のものである。

ロスチャイルドモグラネズミ (*M. rothshildi* Thomas) はカンシユクモグラネズミに似た外觀のものであるが、小形で爪も細く、尾は背と同じ様に毛深い。頭胴長一四七—一六〇、尾長二九—四〇、後足長二六—三一耗位。陝西省、湖北省西部及び甘肅省東部の産。スミスモグラネズミ (*M. smithii* Thomas) も甘肅省から報告せられたもので、大きさもカンシユクモグラネズミと同じ位だが、尾が比較的短くて後足長とあまり違はない。頭骨で見ると大變違ひ、顛顛褶が本種では正中で會合するに至るが、後者では平行して居り、眼窩褶も本種では垂れ下らず、後者では垂れ下

つて居る。頭胴長一八五—二〇七、尾長三七—三九、後足長三二—三四耗位。

(ハ) 竹 鼠 科

之れも地下棲であり、昔はモグラネズミ科中に編入されて居たが、形がもつと鼠形で、爪は短くて扁平で掘地に適した形でなく（恐らく太い門歯が掘地を援けるのであらう）、頭蓋頭は三角形で、顴骨弓強く顛頂正中に隆起線有り、門歯太くて広く前面赤色を帯ぶ。眼窩前孔も△形でなくて横に長い楕圓形で、つまり第五脳神経の通る孔の下部が顴骨で埋められた様なわけで、従つて孔の位置も顴骨弓前端の上位に有ることとなる。支那産のは東部アフリカのと亞科が違ひ、竹鼠亞科 (*Rhizomyinae*) の竹鼠屬 (*Rhizomys*) であるが、南アジア的分布の一屬である。臼齒はモグラネズミ科に似て居る。

タケネズミ (竹鼠) (*Rhizomys sinensis sinensis* Gray) は廣東省の北部の山の四百米以上の竹林に棲み、竹の根や筍を主食とするが、草の實をも食ふ。六、七月頃と十一、二月頃とに仔が見られ、支那人は此の鼠を豚よりも美味であるといふ。頭胴長二三六、尾長七四耗位の可なり大きなもので、毛は絹の様に軟くて深く、背腹

面共灰褐色である。ダビッドタケネズミ (*Rh. s. davidi* Thomas) は福建省の西北部の産で、前者によく似たものであるが少し小形で吻が廣いとされる。頭胴長二一六—三〇四、尾長五〇—九〇、後足長三五—四五、耳長一五—一九耗位。キタタケネズミ (*Rh. s. vestus* M.E.) は四川省から甘肅省東部、陝西省南部に分布する大形のもので、背の色は赤灰色で前述のと少し違ひ、喉や唇の下面は白い。頭胴長三八六—四五一、尾長五五—八九、後足長五二—六〇耗位。雲南省西北部高地にはワードタケネズミ (*Rh. s. wardi* Thomas) が産し、大形だが背面の色が暗灰色である。

ウスグロタケネズミ (*Rh. pruinus senex* Thomas) は吻が細くて體が石板黒色 (青黒い色) をして居る點で前の諸種と違ふ。アッサムの種類の變種である。頭胴長三三〇、尾長一〇一、後足長五六耗位で、雲南省のビルマ境から南部にかけて分布する。スワトウタケネズミ (*Rh. p. latouchei* Thomas) は廣東省南部の汕頭から獲れたものなので、恐らく同省南部にはもつと廣く分布するものと思ふが、色の青黒い事は前述のとよく似て居るが、少し大形だといふのであつて、頭蓋骨髁底長が六九耗あるといふから、雲南のウスグロタケネズミのその六七耗といふのと比べ

て大形な事はたしかであるが、多數採集されたら續くものかも知れない。まあ今の所では地理的亞種のちがひと見做しておく外はないのである。

ニ、鼠 科

ミラー、ギッドレイ兩氏は（一九一八年）、キヌゲネズミ、スナネズミ、ハタネズミの類は臼齒の紋様が、縦には多列であつても、横には二列の突起から由來したもので四突起齒に近いから原始的であるとして一括して鼠科と別な一科（キヌゲネズミ科）とし、臼齒の突起が横には三列から成る東半球特産の狹義の鼠科は、臼齒に突起が横に一列加はつて三突起づつに成つたので後成的なものだとして居るが、ヒントンは（一九二六年）マダガスカルの古代的な鼠の類でも臼齒は横には三突起有るので、キヌゲネズミの類では三の内中央の突起が退化して二突起となつたのである。天井のネズミの類では中央の列の突起が特に發達して左右の突起がやゝ發達不良になつたのだとして、皆同根で、中生代の多突起齒から由來したものとして居る。斯んな風に説もさまざまぬ者を、はつきりと二科に分けるよりも一科にして置いて、同等な亞科に排列し、モグラネズミ科や竹鼠科の様に臼齒に瘤狀突起がなくて、

多稜形な臼齒のものから述べてゆく方が自然的だと思つたので、アレンの様にミラーの説を採用することはしないで、記述を進める事としたのである。即ち支那の鼠科は畑鼠亞科、沙鼠亞科、絹毛鼠亞科、鼠亞科の四亞科となるのである。

1、畑 鼠 亞 科

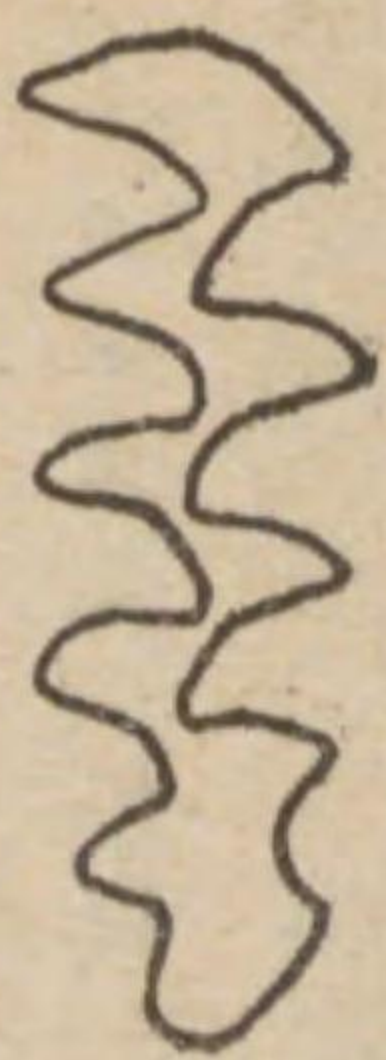
體一般に太り、尾も股も短い地下棲的なもので、臼齒は一生無根の類と成後は有根になつて成長止む類と有るが、皆齒冠は平面的で、三角をつなぎ合せた様な稜柱狀の臼齒である。植物の根のみならず、莖も實も食害するので農家の大敵である。歴史上に竹の開花せる後に畑鼠類の大發生を來して作物に大害を興へた例が東西各國に澤山有るのは、竹の實が畑鼠類の好餌料たりし爲めである。チフス菌團子を食はしてチフスの流行によつて畑鼠を除く方法が最も普通に行はれる。

ハタネズミ（畑鼠）屬（*Microtus*）は北方系のもので、硬口蓋の後端の中央線が後方に伸びて、その左右に窪所を形成して居り、上門齒に縦溝なく、尾は短いけれども、後足よりは長い。臼齒冠の三角形の角が鋭い。第三上臼齒の最後葉は内側に灣を抱くC字形である。

モウコハタネズミ (*M. mongolicus* Radda) はシベリアから蒙古北部、大興安嶺、

チ、ハル等に分布して居り、第三上臼歯に見る三角形の数は外側に三、内側に四で

あり、第一下臼歯の後横部の前に小三角が五有る。



圖タ(第)六(第)十コミ臼歯
五ウズ下
第モネ一

や、大形の方で、頭胴長一〇二—一三二、後足長一

五—一九、尾長三五—三八、耳長一〇・五—一三耗

位で、背面暗褐色、腹面はや、赤味を帯ぶ。ポルヤコフハタネズミ (*M. poljakowi*

Kastchenko) は之に似たが、足の小ささ、灰褐色の種類で、後足長一七、(爪を除

けば一四—一五)、頭胴長八八—一一九、尾長二四・五—三一耗位。蒙古の庫倫の

北西方南西方の産。ザイダムハタネズミ (*M. himnophilus* Buechner) は青海省ザ

イダム及びコビ沙漠の鹽性荒野の産で、第三上臼歯は前種に似て居るが、第一下

臼歯の後横部の前の小三角形は四箇で、體色鈍黄色である。頭胴長八八—一一八、

尾長三二—四四、後足長二〇—二二、耳長九—一四耗位、カンシユクハタネズミ

(*M. atticeps faviventris* Saturnia) は齒の構造は之れと似て居るが、體色暗色で、

體も小さく、頭胴長一〇〇—一一二、尾長三二—四九、後足長一四—一八、耳長一

二—一六耗位。甘肅省の西部に産するがトマスの *M. male* Imi も之れと同種と思は

れるので、さうすると、陝西省の西部まで分布することになる。

シロアシハタネズミ (*M. obscurus* Eversmann) は第三上臼歯冠の三角が外側に

四箇内側に五箇有る點でも前述の諸種と違ひ、體色も灰色がかつて、背面はオリ

ブ茶色、腹面は帯白灰色、尾の上面は黒、下面は白、頭胴長一一八、尾長三五、後

足長一九耗位。内蒙を横ぎつて、西はアルタイ山から東は滿洲西部まで分布する。

センセイヨシネズミ (陝西葭鼠) (*M. fortis fortis* Buechner) は大形な種で、頭胴長

一一五—一三五、尾長四八—六四、後足長二二—二六、耳長一三—一五耗位もあ

り、即ち後足も大きく尾も長く、蹠の疣は六でなくて五、背面體色は茶褐色で、腹

面は白でなくて鈍茶色である。陝西省の産。ナンキンヨシネズミ (*M. f. ca'morun*

Thomas) は、腹面の色が白に近い點で前亞種と識別されるが、よく似たもので、南

京附近の揚子江の兩岸地方に棲む。頭胴長一二七—一三九、尾長五三、後足長二一

—二三耗位。朝鮮や滿洲東部に棲むヨシネズミ (*M. f. pelliceus* Thomas) も之れに

近いものであり、又熱河省のヅナガハタネズミ (*M. dolicocephalus* Mori) をもヨシ

ネズミの中に包含させてよいといふ人もあるが、後出のスナイロハタネズミ系といふ人も有る。

クラークハタネズミ (*M. clarkei* Hinton) は外形や色はナンキンヨシネズミに可なり似て居るけれども、第二上臼歯を見ると、前述のすべての種類の様に外側に三突起、内側に二突でなくて、外側の第三突起に對してもつと大きな突起が内側に有る點でも異種といへる。色もやゝ赤味が勝つて居る。頭胴長一一四—一三四、尾長六二—六七、後足長一九—二一、耳長二—一五耗位。雲南省に産する。



圖七十五
第二上臼歯
クラークハタネズミ

ハイイロハタネズミ (*M. millicens* Thomas) は四川省の西北、一萬二千尺位の高地から採れ、背面黒灰色で、腹面は薄く暗灰色で、尾は長くて上面灰褐、下面帯白色である。第二上臼歯は後葉の内側に小後葉が一つ加はつて居るし、第一下臼歯は最後横行部の前に四箇の小三角が有るので、つまり内側に六箇外側に四箇の三角が有る點が違ふ。頭胴長九〇、尾長五三、後足長一八・五耗位。カゲハタネズミ(鹿毛畑鼠) (*M. agrestis mongol* Thomas) は第二上臼歯の構造は上述のと同様で第一

下臼歯の三角は後横部の前に五箇の小三角が有る點で前種と違ひ、體色背面は黒褐色即ち暗鹿毛で、腹面は灰白色である。蒙古西北部、バイカル地方等の産であるが之れの原因は西歐から記載されたものであるが、北米のペンシルバニアハタネズミも此の系統のものと見做されるのであつて、つまり東西兩半球北部に陸橋の有つた頃に一大陸から他大陸に入り込んだ一例とされるものである事が面白い。

ホンハタネズミ (*M. (Stenocranius) gregalis raddei* Poljakov) は上述の諸畑鼠や日本の畑鼠類と比較すると、頭骨が細長で、幅の狭い點で亞屬を別にされるもので背面の體色は暗黄褐色である。頭胴長一一〇—一二〇、尾長一六—二五、後足長一五—一八、耳長一〇—一二耗位。北蒙からコビを横断して張家口邊までも分布して居る。テンザンハタネズミ (*M. (S.) tianshanicus angustus* Thomas) は細長な事は前種に似て居るが、體色が鈍黄色である。蒙古の張家口西北百哩位の高原から西北方に散在し、アルタイ山脈に至る。

第一下臼歯の後横部の前の小三角は三箇のみである點に於て化石の *Pitymys* 屬に似た亞屬を (*Neodon*) とす。此の亞屬に入る畑鼠の一はフレネトハタネズミ (*M.*



圖トミ種白
ハスズ一
十レネの一
五オタ屬第
第フハ亞(齒)

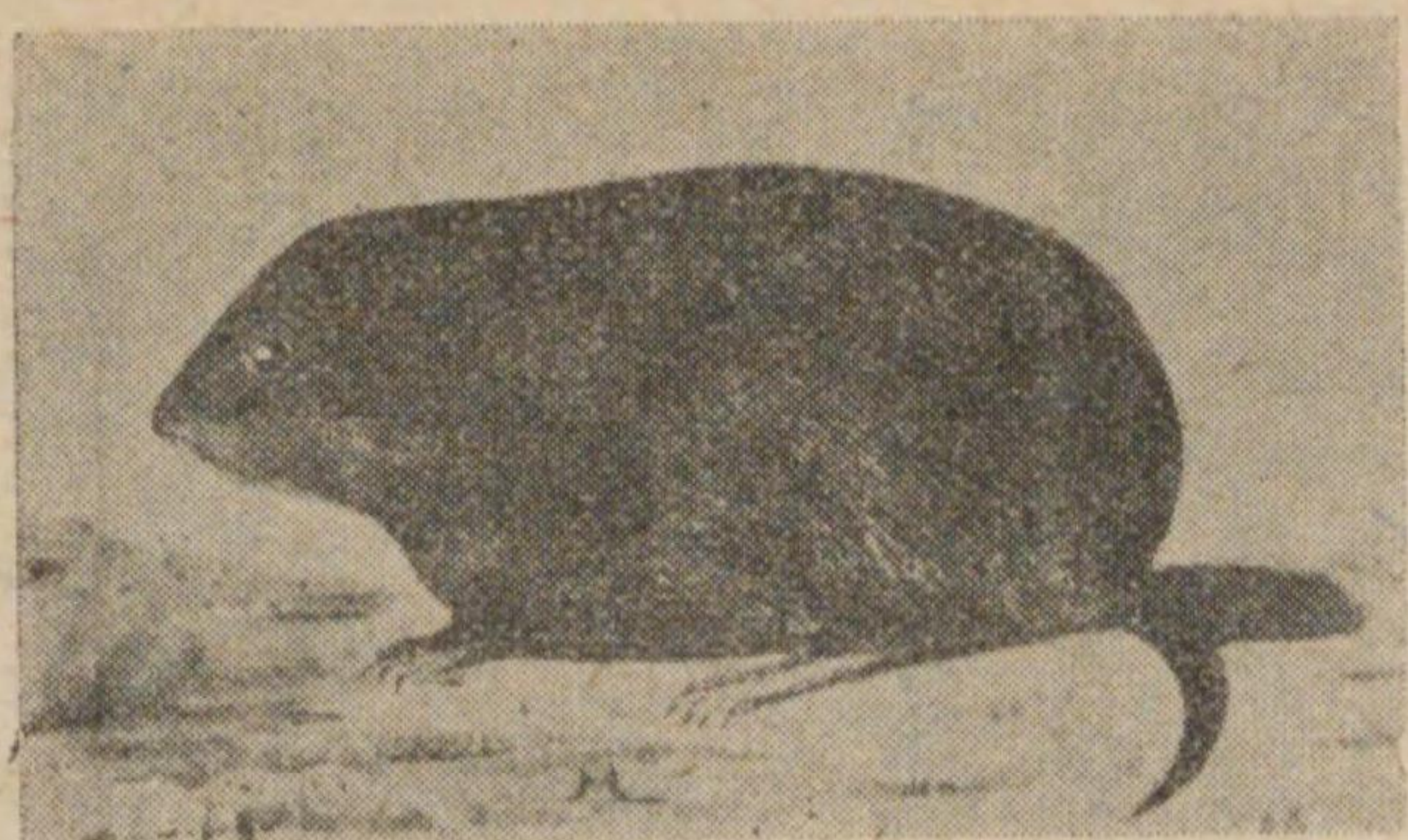
(N.) forresti Hinton) 雲南省北部の一萬二千尺乃至一萬二千尺の邊に見出され、背面暗褐色、尾は上面黒く下面が白。頭胴長一〇〇—一三〇、尾長三六—四三耗、後足長一七一〇耗位。ダセンロハタネズミ(M. (N.) irene i ene

Thomas)は西康省の打箭爐邊や雲南省北部に産し、背面灰褐色で、頭胴長八五—一〇七、尾長二三—四〇、後足長一六一—一九耗位。之れの變種 (M. (N.) j. oriscus Thomas)は少し小さくて尾が短くといふだけで頭胴長八〇、尾長二五、後足長一五・五耗位。變種の價値があるか否か疑はしいが、甘肅省のがこんな風である

亞屬 *Phaiomys* に入れられる畑鼠は形態が穴居に適した様な觀を呈する類で乃ち耳小さく、爪強大で、尾は後足の一倍半以下で、又第二下臼齒には小三角突起が内側に二、外側に三である。徳田氏は *Lemmingerotus* として別屬にして居る。

マンダリンハタネズミ (M. (Ph.) mandarinus M. E.) は山西省の中央を縦貫して北は蒙古まで、南は陝西省まで入り込んで居るもので、背筋は暗色がかつて居るが背は大體木褐色で、腹面は帯灰白色。頭胴長九七—一一三、尾長二〇—二五、後足

長一五—一八、耳長八—一二耗位。北京の東北百哩の邊、熱河省の變種コミミハタネズミ (M. (Ph.) m. faecus Allen) は背面もつと暗色で腹面黄色を帯ぶ。ネツカ



第五十九圖 ネツカハタネズミ

ハタネズミ (M. jeholensis Kuroda) も之れとの區別がはつきりせぬ程似て居る。又山西省の北西部にはもつと耳が小さく(七—八耗)て、橙褐色な變種ヨハネスハタネズミ (M. (Ph.) m. johannes Thomas) が産する。

スナイロハタネズミ (M. (Ph.) brandtii Radde) も此の亞屬のものであるが、體色が砂色で、頭胴長一一〇—一三五、尾長二四—三一、後足長一八—二〇耗といふ大形なものである。第一下臼齒の小三角が前種では三であるのに此の種では四又は五有る點が違ふといふのでヒントンは別屬として *Lasiopodomys* に入れて居るが、ミラ

ーやホーエルは上述の亞屬中に入れて居るのである。

ウサギヲハタネズミ屬 (*Lagurus*) は尾が後足長よりもずつと短い短尾で、第三

上臼齒の最後葉の前後徑も短く、第二下臼齒の後横部の前の小三角は四で左右交互



圖ハ屬第
十ヲミ(齒)
六ギズ種白
第サネ一
ウタの二

の位置にある。プルツェワルスキーハタネズミ(L. pr.
zewalskii Buechner)は青海省ツァイダムで採集された
もので、淡黄色で耳の極く小さい種類である。頭胴長

一二五—一三三、尾長二—一五、後足長一九—二二、耳長九耗位。



圖タの三
一ハ屬第
十ヲミ(齒)
六ギズ種白
章モネ一上

モグラハタネズミ屬(Ellobius)は尾の短い事や第三上臼
齒の形は前屬に似て居るが、第二下臼齒の小三角四は左右
對立的である。畑鼠類中最も地下棲に適應した形態を示す

もので、耳は外聽道孔の縁の襞にすぎず、尾はほんの小突起で、毛は一樣の長さの
軟かい密生した毛である。門齒が前方に向つて居て土を掘るに役立つので、爪は弱
弱し爪である。モグラハタネズミ(E. talpinus larvatus Allen)は外蒙西部、アル
ツァ・ボダドの六千五百尺位の高地から採集せられたもので、頭胴長一〇二—一二
五、尾長一〇—一五、後足二〇—二四耗位。サハルモグラハタネズミ(E. t. orient
alis Allen)は東蒙察哈爾省産で、後足長が三、四耗短く、頭骨も齒もやゝ小さく點

で前者と識別される。

ベッドフォードハタネズミ(Proedromys bedfordi Thomas)は上門齒に縦溝の有
る、又第三上臼齒最後葉が外方に曲つてゐる變つた畑鼠で、甘肅省から唯一頭採集
されただけである。頭胴長一〇三、尾長四一、後足長一八、耳長一三耗。

以下に述べる本亞科の支那産の鼠は硬口蓋の後端が普通の鼠の様に單純な形なる
點に於て日本のヤチネズミに似たものである。その内 Myopus schisticolor saianicus
Hinton だけは臼齒一生無根齒で第三上臼齒は内外の方向に開通した四つの三角より
成る點に於て、西歐のレミングに似て小形なもので、蒙古の庫倫の北方に産するが、
北歐の種類の一變種といはれる。背は赤、體側は灰色で、頭胴長九〇—一一四、尾
長一五、後足長一六—一七、耳長一一—一四耗位。以下は皆第三上臼齒は前横行部
の後に二又は以上の小三角形が内外交互の位置に有る。

ヤチネズミ(谷地鼠)屬の學名 Clethrionomys は Evotomys と同じものを指す
のであるが、先取權の規約によると前者を採用すべきだといふまでである。「ヤ
チ」はアイヌ語で葦等の生へた荒野をいふのだ相で、東北では「谷地」といふ語を

使ふ。此の属の鼠は體の背面赤味を帯び、臼齒は成體では有根齒と成る所の、野の鼠である。

チシマヤチネズミ (*C. rufocanus* Sundevall) は日本の千島にも産する。歐亞北方系の者で、支那領では蒙古の庫倫より北部に分布する。頭骨も頑丈、齒も大きくて、背は赤いが、吻や體側が甚だ灰色なので同地方の他の種類と識別される。頭胴長一〇〇—一二二、尾長二七—三五、後足長一七—二〇、耳長一五—一九。耗位。サンセイヤチネズミ (*C. r. shanseus* Thomas) は之れの變種で、背の赤がやや橙色で體側もやや赭土色であるので全體としてやや黄味を帯び淡色である。頭胴長一〇五—一〇六、尾長二五—三〇、後足長二〇—二一、耳長一三—一五。耗位。西省の産。西部アルタイ地方やシベリヤと北蒙との境の山脈から庫倫邊にかけて、頭骨も齒ももつときやしやで、吻の鈍黄色なオビヤチネズミ (*C. rutilus* russatus Radda) が産する。

ピロウドネズミ属 (*Eothenomys*) は頭骨や齒はヤチネズミ属に似て居るが、背が赤味を帯びずに暗褐色で、腹も暗黒色である。多くは南方的分布のものである。ピ

ロウドネズミ (*E. melanogaster* M.F.) は四川省西部、中部(馬邊山)

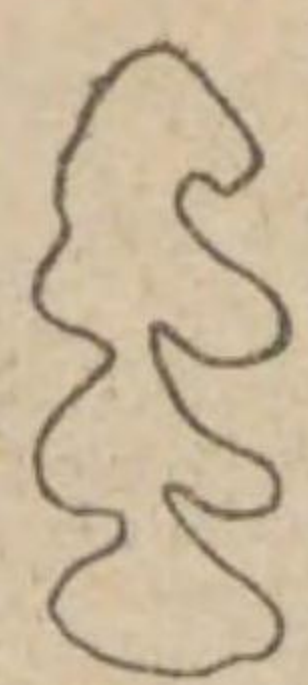


第六十二圖 ピロウドネズミ

上臼齒の角突出が外側に三、内側に四有る點で前種と違ひ、體色も暗赤褐色である。

邊の高地に産し、頭胴長八七—九六、尾長三三—四二、後足長一五—一七、耳長九・五—一一。耗位。第三上臼齒の小三角は内側にも外側にも三箇づつである。之れの變種ナンシビロウドネズミ (*E. n. columnus* Thomas) は福建省西北部から浙江にかけて産し、やや淡色な變種で、頭胴長一三三—一四六、尾長三二—四二、後足長一六—一七、耳長一〇—一二。耗位だから體がやや大きくて尾はその割合には短いと云へよう。臺灣にも之れに似たタイワンピロウドネズミが棲む。ウンナンピロウドネズミ (*E. milletus* Thomas) は第三

頭胴長一一〇—一二六、尾長四一—五〇、後足長一八—二一耗位。雲南省西北高地や四川省南部に分布する。之れの變種ギシウビロウドネズミ (*E. m. aurora* Allen) は湖北省の揚子江峽部、宜昌邊に産し、赤褐色で、頭胴長一三九—一四八、尾長四〇

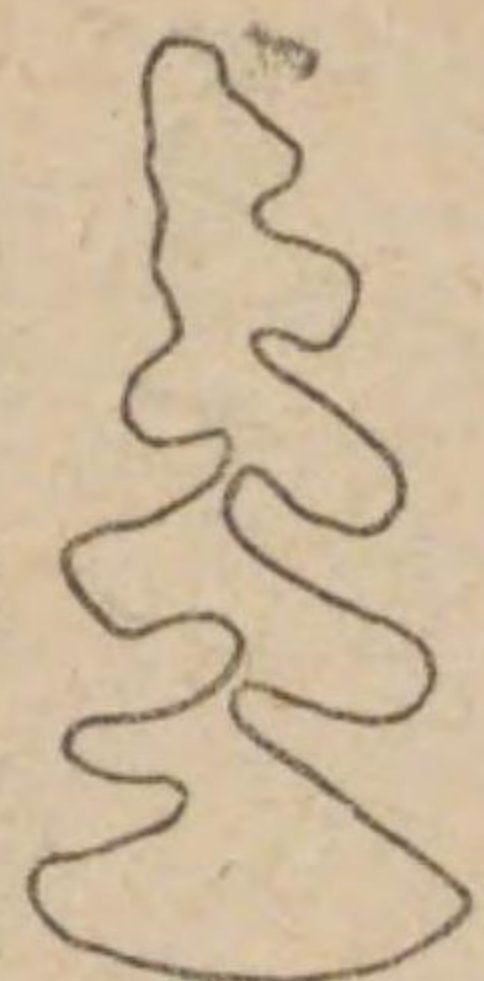


圖三
ミズミ
ネズミ
三上白
十ロビ
六シナ
第ナウ
コ(夫々)

一四三、後足長一五—一八・五耗位だが、頭骨で見ると、後者は全長二六耗以下なのに前者の方は大きくて、二六・五耗以上である。雲南省の北部に産するコビロウドネズミ (*E. eleusis* Thomas) は臼齒の形態は前種に似て居るが、頭蓋骨や、扁平で、體色は灰褐色で體がずつと小さい。即ち頭胴長九〇—一〇六、尾長四六—五九、後足長一六—一八耗位である。

クロミミビロウドネズミ (*E. olitor* Thomas) も雲南省北部に産し、四川のピロウドネズミと外觀はよく似て居るが、臼齒を見ると、第一上臼齒は角形突起が外側にも内側にも三であるし、第三上臼齒の角形突起は外側に四であるが、外側の第一入込が浅いので、外側の第一小三角と前横部とはつきり仕切られない。頭胴長八〇—

九二、尾長二九—三九、後足長一四—七七、耳長一〇耗内外で、耳の色が黒くて目立つ。タカネビロウドネズミ (*E. prodlor* Hinton) も西部雲南省の一萬三千尺位の高地の産であるが、少し大きく、頭胴長一〇五—一一〇、尾長二六—三三、後足長一七—二〇、耳長一二—一六耗位で、體色はウンナンビロウドネズミによく似た暗赤褐色であるが、齒は前種とよく似て居つて、共に *Antelionys* とすふ亞屬とされるものである。シナビロウドネズミ (*E. chinensis* Thomas) も第一上臼齒の形態は

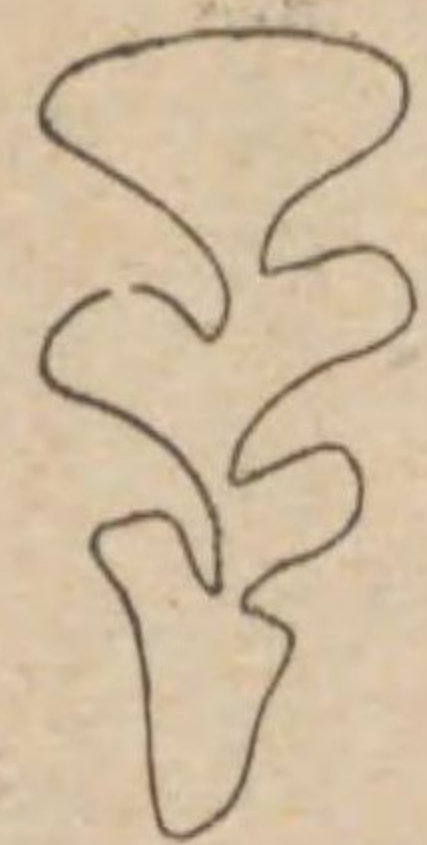


圖四
シナ
ネズ
ミ上
白(第
三)

前種と同様で、同亞屬とされるが、第三上臼齒には角形突起が内側に四、外側に四又は五有る。そして尾が長くて六三耗以上あり、體色は黒褐色である。頭胴長一一〇—一二五、尾長六三—六九、後足長二〇—二四耗位。四川省中央部馬邊山邊の六千尺から一萬尺位の高地の森林地帯に棲む。之れの變種ダセンロビロウドネズミ (*E. c. toquinus* Thomas) は西康省打箭爐邊に、變種ワードビロウドネズミ (*E. c. wardi* Thomas) は雲南省の西北境に棲み頭骨が扁平である。 *E. custos custos* Thomas も雲南省の産で、前種より後足と尾との短い點で識別される。頭胴長八一

一〇五、尾長三八—四七、後足長一六・五—一八耗位。腹面が帯黄色である。之れの変種 *E. c. rubellus* Allen は、やはり雲南省西境の産だが、腹面が褐色である。ヒントンピロウドネズミ (*E. c. hintoni*) も之れの一變種であるが、西康省打箭爐の西南から採集され、少し大形であつて、頭胴長一四七—一五八、尾長五一—五九、後足長一九—二〇耗位である。

亞屬 *Caryomys* に編入されるピロウドネズミ屬は上述の諸種と違つて、第一下臼



ミズド
ネズミ
の臼
五
上
臼
十
三
メ
ヨ
六
第
三
キ
メ
ヨ
第
三
ネ
ズ
ミ
右
左

齒冠の内外の三角が横に連合しないで、交互に位置して居るし、齒がヤチネズミの方に一寸似て居るのである。

ヒメピロウドネズミ (*E. evaeva* Thomas) は甘肅省、四川省、湖北省に産し、尾長が頭胴長の半分以上あり、即ち頭胴長八四—一〇〇、尾長四六—六〇、後足長一六—一八耗位で、體色は鮮かな赤褐色である。之れは黒褐色な變種、クロカゲヒメピロウドネズミ (*E. e. alcinous* Thomas) は四川省に産する。之れに似て尾が頭胴長の半分以下なとして第三上臼齒の後葉が前種より長くて往々外側に入込の加はつて居

る種類をサンセイピロウドネズミ (*E. inez inez* Thomas) とす。山西省、陝西省の産で、體色暗橙黄色、頭胴長八七—九二、尾長三二—三七、後足長一五・五—一六耗位。之れの濃色な、赭褐色な變種サンセイピロウドネズミ (*E. i. nux* Thomas) は陝西省南部に産し、頭胴長九〇—九三、尾長三七—四〇、後足長一五—一六・五耗位。熱河省から黒田博士は *E. i. jeholicus* を報告して居るが、色は山西省の近く、唯後足長が一七—二一・五耗といへば後足の長い變種といへるわけであるが、若し爪を含んでの長さを測つたものなら、山西省のと同じになると、アレンは言つて居る。

なほ蒙古やチベット等支那の邊境の高地にはイハヤマネズミ屬 (*Alticola*) とす。屬の野鼠が入り込んで居る。此の屬の鼠は各臼齒の後方が細くなつて居る傾向があり、成體でも無根齒である。體色は背が灰色、尾は白、腹面も白い。イハヤマネズミ (*A. macrotis macrotis* Radd) は外蒙西境のシアンスク山や庫倫の東北方等北蒙に産し、此の類としては暗色長尾のものである。ゴビイハヤマネズミ (*A. m. semicanus* Allen) はゴビの西北半に分布する淡色のもので、頭胴長一〇五—一二二、尾

長二四—三五、後足長一九—二三、耳長一五—二一耗位である。ナンザンイハマネズミ (*A. nanschanicus Satunin*) は甘肅省北部の南山系に産し、尾は後足長よりも短く、即ち頭胴長一一四、尾長一七、後足長一九・五耗。ストリックカンイハマネズミ (*A. stoliczkanus Blanford*) は後足長(一六耗)より尾(二五耗)が長く、背面は赤錆色で腹面は白く、コンロン山や西藏のラダックに産し、ラマイハマネズミ (*A. lama Bar-Ham.*) は背灰褐、腹白で、西部チベットやカシミヤの一萬四、五千尺から一萬八千五百尺位の所に産する。

2、沙鼠亞科

此の亞科の鼠は沙漠や荒野に穴居するもの多く、後足が可なり長くなつて居り、跳ねる習性がある。頭骨でいふと鼓骨胞が丸くて大いが、之れは廣い沙漠の聴覺の鋭敏を要するのと相關があるのか、平衡感覺の發達して居る事を意味して居るのか何か意味がありさうである。門齒に縦溝有り、臼齒は有根齒だが、その齒冠は平面で多稜形な事は谷地鼠とか畑鼠とかに似て居る。が、その三角突起は左右開通して横襞をなし、第一上臼齒が三、第二上臼齒が二に仕切られ、第三上臼齒は小で輪に

近い齒冠紋を呈するもの (*Meriones*) と。字形に近きもの (*Rhombomys*) とある。



第六十六圖 (セキホウ) スナネズミ

であるし、尾も鮮赭色であるので識別される。頭骨も明かに違ひ、鼓骨胞が一層大

スナネズミ(砂耗子) (*Meriones unguiculatus* M.E.) は山西省の北部や内蒙に可なりありふれた鼠で、爪が黒くて背面砂色、腹の白毛も基部は灰色な點で類似のものと識別される。頭胴長一一四—一三〇、尾長九三—一〇五、後足長二八—三二、耳長一三—一五耗位。滿洲西部のツウリヨウスナネズミ (*M. kurauchii* Mori) (通遼産) やセキホウスナネズミ (*M. k. chihfengensis* Mori) (鄭家屯産) も本種の異名らし。ホクシスナネズミ (*M. meridianus psammophilus* M.E.) は大きさも色も大體前種に似て居るが爪が白く、又腹面の毛も純白